

奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

奇譚クラブ

10月号

KITAN CLUB

10

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



新装一周年記念号



定価 1100 円

五百四

忘去の復た……新川三郎

~~~~~

特別号は一切書店売りを致しませんから、直接

## 第二口絵

- 17 黒皮の羊羹  
 18 ゴム紐との間  
 19 受難の瞬間  
 20 変形舞踏・棒踊り  
 21 消えぬ灯  
 22 森の精  
 23 強まりゆく痛覚  
 24 迫り来る羞恥  
 25 妻という名の犬  
 26 廻上といけにえ  
 27 狙われる美因  
 28 車中のもがき  
 29 踏みにじられる女  
 30 ハンモック椅子  
 31 耐苦の座褥  
 32 雄雉と雌肌



第三表紙 新製品苛性酸









奇譚クラブ 十月新装一周年記念号 目次

目次裏「風俗川柳」「新残酷物語」……佐保忍・作 滝れい子・画  
「身仕舞」……北原純子・画

第一グラビヤ

SMMーの組写真集……構成・塚本鉄三  
運鏡組写真  
美しい玩弄物……朝川  
さるぐつわ愁顔……大塚  
股裂きポーズへの移行……朝川  
組写真  
洋服部員の娘……大塚  
組写真  
転転……大塚  
吊られゆく足……朝川  
私の愛読雑誌……東浦  
豊満美の縦横……桜井

第二グラ

茶晶と茶摘女  
人間馬の調教  
夜は妖嬈の如し  
女性燭台  
華麗な私刑  
宇宙船用女奴隷輸送面  
組写真  
私は洗脚マニヤの看護婦  
美人の手で縛られたい  
という希望者はこのように  
して縛られている  
もぐさと縛体  
四種の洗脚道具

第三グラ

美の冒険  
Mフォト組写真  
組写真「自白の強要」  
女主人と奴隷  
マニヤの切腹ポーズ  
硝子戸の彼方

第二口絵

鼻輪の引廻し  
マンモデル募集  
炎責に耐える表情  
女体と洗脚器  
吾の下に  
美人の手で縛られたい  
という希望者はこのように  
して縛られている  
もぐさと縛体  
四種の洗脚道具

告白特集「偏執記録の断片」

女体は私の楽しみです……桃山かおる……76  
お誘天国……鏡谷純司……86  
おむつカバー難考……関根彰……98  
洗脚器を買う……栗瀬長……126  
ふんどし快悦……衣軍一……148  
鼻鏡……藤木久生……164  
マブに生きている……春木俊野……187  
私の下着はふんどし……井上真澄……202  
導尿の羞恥に喘ぐ……山岸悠子……220  
読者と奇ク……中谷正夫……220  
奇ク太平洋……中谷正夫……220  
連動小説「狩獵者」……佐度桃……80  
映画「用心棒」の影射を買う……牧高志……92  
わが唇は喜びにふるえる……とやまかづひ……104  
外誌紹介(PHOTO-FICTION)  
麗わしき争奪……BATTILING BABES……107  
女性の切腹……数奇咲……123  
連動小説「宇宙のどこかで」……佐治麻造……130  
女斗美シリーズ4「土俵際の攻防」……雪崎京人……147  
女相模ファン見聞記……江波恵吾……160

奇クサロン

岩崎「生氏」に答える  
連作「少女」仲良しグループ  
連作「少女」放課後  
貴屋敷の晩餐  
モーター「写実の女客」  
連作「少女」強盗  
買好一代男  
前「金のかく」  
「ブラウス」への倒錯的  
淫陽を詠える  
愛撫通信  
私もおむつマニヤです  
チェックのワンピース  
和服と振袖への郷愁  
玉落穂集  
女相模覚え書  
半股引礼讃  
梨花悠紀子さんへ  
獲物……アブストラクト

アカロバット「白」アクロの訓練  
「白」版な夢  
麻生保氏の生活と意見  
創作訓練される女  
色劇「遠藤春一個展」  
読者通信  
上田隆子……243  
西田仁……235  
麻生保……226  
山光力四郎……224  
212  
194



# 風俗川柳新殘酷物語

佐保心作  
淹れい子画

**継**

母に父は妻具  
道具なり

お菊は

**番**

町の

お菊は

井戸へ

吊るさる

**あ**

かく若い女囚の脛  
は白し

**蛇**

妻具めの

女に  
仕置なり  
むごい

**口**

**石**

抱き  
色の変わりし  
足の指

**蛇**

いくる

蚊に腫れあがり  
糸几泣く

蠟の  
したたる白肌





# S M ムードの組寫眞集

構成 塚本鉄三







とのくっつけられ、やっつけてるんだ。

連続組写真 美しい玩弄物



今度はそのきれいな顔をあおむけるんだ。





襟首をつかんで無理矢理に寝ころがす。



梨花 悠紀子





起きようとしたって、それは無理というものだよ。



ぐったりと横になったポーズの美しさ。



むき出しになった足が馳しいって?



お前は美しい私の玩弄物だ!







一枚の布に掩われた君の顔は、素顔の  
ときより、こよなく我が胸をうつ



組寫眞

輾轉（てんてん）



大塚啓子



さるぐつわ愁顔





組寫眞

吊られゆく足







片足滑車吊り



股裂きポーズへの移行







私の愛読雑誌



〈組寫眞〉 洋服筆筭の娘







開けた洋服ダンスの中には、可愛い娘が縛られていた。





大塚啓子





娘は逃れようとして、もがきながら横倒しとなってころがり出てきた。



櫻井葉子







## 茶畠と茶摘女

「若旦那、こんなところでしたか？」 「バカ、覗くんじゃない」



人間馬の調教

「もうバテたか、このいくじなし奴」



# 夜は妖婦の如し

「さあ、今夜はどんな虐め方をしてやろうか？」





## 女 体 燭 台

「いつまでもそうして頑張っておれよ、そのうち蠟がとけたら……」





## 華麗な私刑

はなやかに五彩の電光に映えるキャバレーの地下室では……

通産大臣賞受賞

第八回産業博覽會出品



株式會社南村製作所謹製

宇宙船用女奴隷輸送函



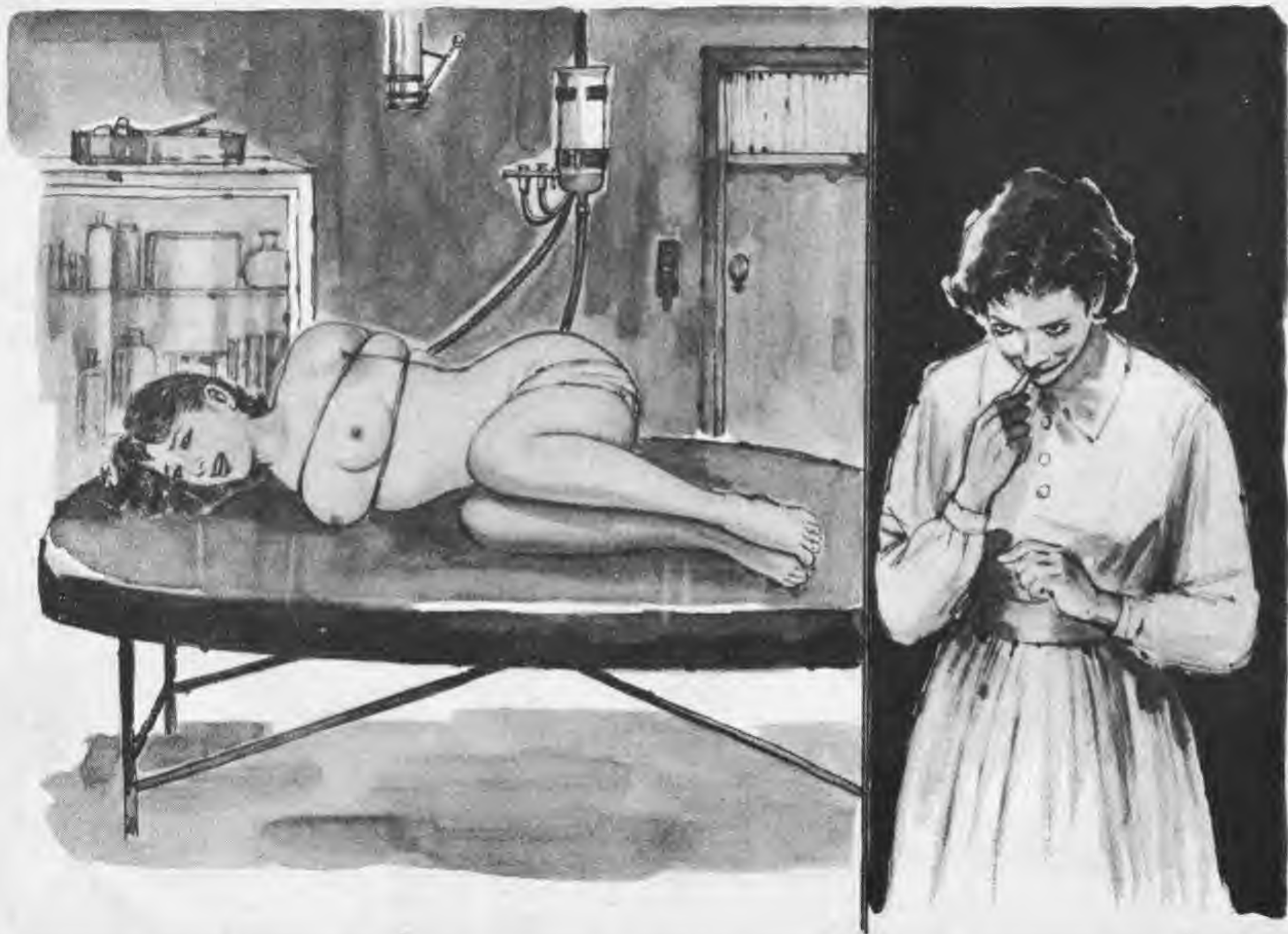


南村俊平戯画 犀の骨

前世紀に栄えたホモ・サピエンス類人猿に驚かされる。

# 私は浣腸マニヤの看護婦

黒光りする寝台の上に転っている女体が、間もなくどんな悲鳴を挙げるかと思うと、器具を手にした彼女の手がかすかにふるえるのだ。







美の昌瀆



# 女主人と奴隷

便器と奉仕



フン、お前なんか、これが身分相応というものだ。  
お舐めったら、頭をふんずけてほしいのかい。





マニヤの切腹ポーズ





先月号に引続いて、女性切腹マニヤの愛読者某女の特別な願いにより、顔のあがらせまでないものを若干集録しました。



モデル（切腹マニヤ）愛読者某女



組寫眞

# 自白の強要



「素直に白状すればよし、さもないと俺の体重が……」



「うううう、胸が苦しい。許して……」



「どうだ、このバンドで思いきり叩かれないといふのか」



「フフン、強情をはって、白状しない気なのだな」



「押しつぶしても叩いても音を掌げんとは、しぶとい女奴、ベルトで首を締めてやるが、さあ、どうだ」



「イイイイ、白状しますから、ベルトをゆるめて……」





「うん、とうとう白状する気になったか。お前が強情をはるから、いけないんだ。ちよっと、手荒かったかな」  
「いいえ、いいんです。だって私、貴方にいじめてはしかなかったんですもの」



梨花悠紀子





硝子戸の彼方

東浦ひかる





鼻輪の引廻し

〔辻村隆提供〕



美人の手でいじめられたいという希望者はこのようにして縛られる。



（出演している男性モデルは応募した読者です）



『マゾ・モデル募集』



灸責に耐える表情



もぐさと縛体





女体と浣腸器



四種の浣腸道具



知(し)のド(も)に





# 緊縛フォト撮影の実際

—ゴムの感触とフェチ好み—

塚 本 鉄 三



## 撮影の要領

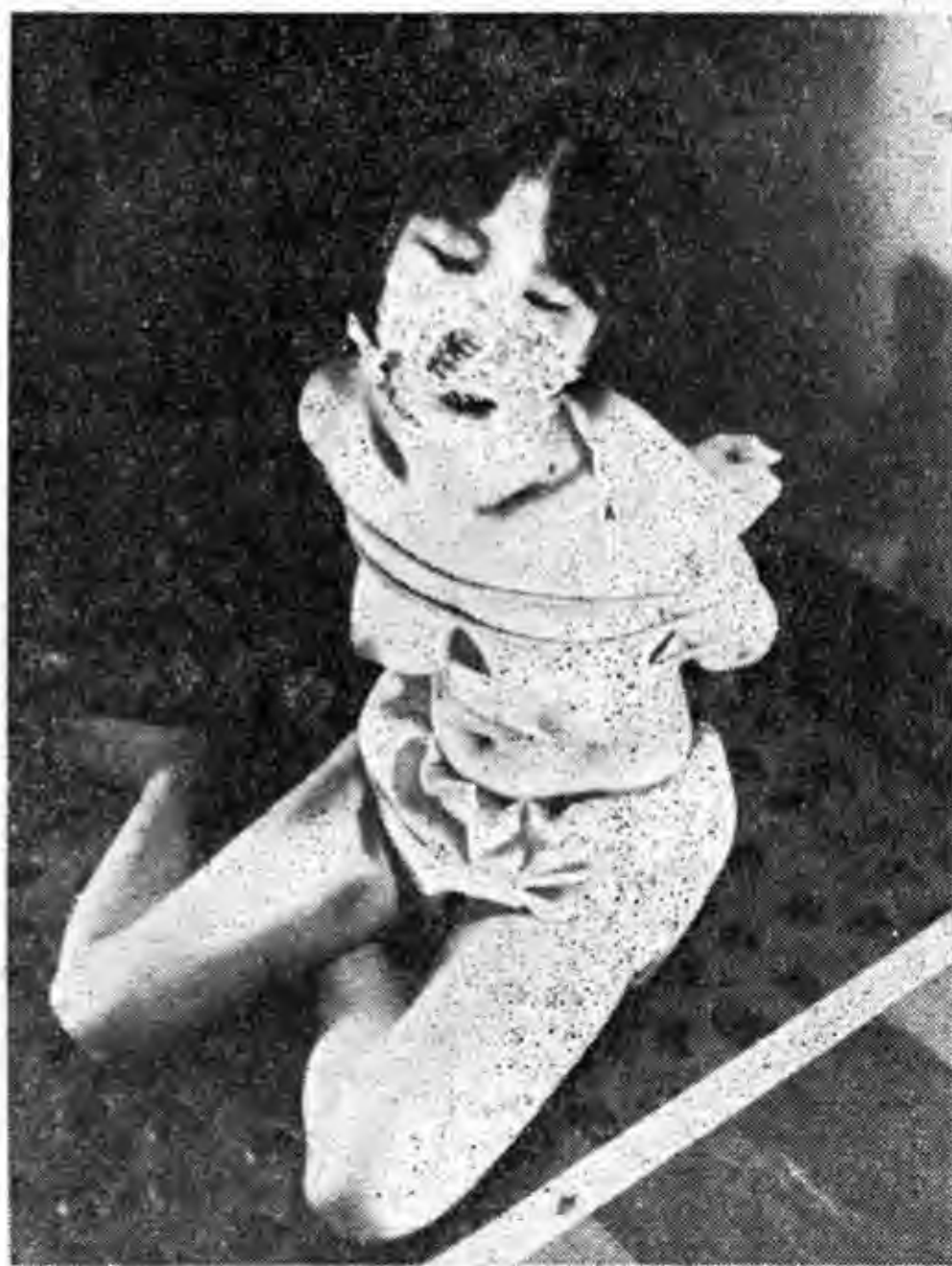
- モデル……………愛川 悦子
- 撮影……………塚本 鉄三
- カメラ……………オリンパス・エース
- レンズ……………ズイコー35ミリF2.8
- フィルム……………ネオパンSS
- 現像液……………DK20とD72
- 印画紙……………フジプロF2
- 照明用具……………ウエスト・レフレクター
- ・ランプ三〇〇W三個、クリップ三個、コード等若干。
- 小道具……………ロープ一本、ゴム製おむつカバー、模様つきブラジャー各一。
- 場所……………トイレ、浴室付洋間

○  
愛川悦子さんが本誌のモデルとして登場したのは、今から数えてもう既に五年前ぐらいになるだろうか。当時たしか十九才だと言っていた彼女が、今では、もう二十四才のおばあちゃんになってしまったと自分から問わず語りに喋っているのだから、たしかに、歳月の経つのは早いもので、あれから五年経ったことになる。

その頃、丁度浜村美智子がカリプソ・スタ



イルでバナナポートを歌って一世を風靡していたのを覚えているが、彼女愛川悦子さんもその影響を多分に受けていたのか、髪を赤く染めて、ペーブルメントを颯爽と歩いていたものだった。緊縛に対しての受入れやポーズ等についても十九才の小娘とは思えぬ大



胆さで辻村氏と二人で、彼女のことを「カリブソ」と綽名していたくらいである。

初めて素肌にひしひしと麻縄を掛けた時、一向に驚く様子もなく、羞らいながらも、どうすれば好いポーズが出来るだろうかと、努力している風が見え、二度、三度と回を重ねるに従って益々緊縛モデルとしての真価を発揮してきて、誌上の口絵写真に分譲写真に、次第にファンを増してくるかに見えたのだが



当時は白表紙の復刊号を発行している頃だったので、掲載誌面も多くなり、従って、彼女としては、十分人気を出しきるまで活躍する余地がなかったともいえる。

このようにして約一カ年は本誌の緊縛モデルとしてカメラの前に立ったであろうか。田中芳代嬢あたりと共演したり、或はサジスチ

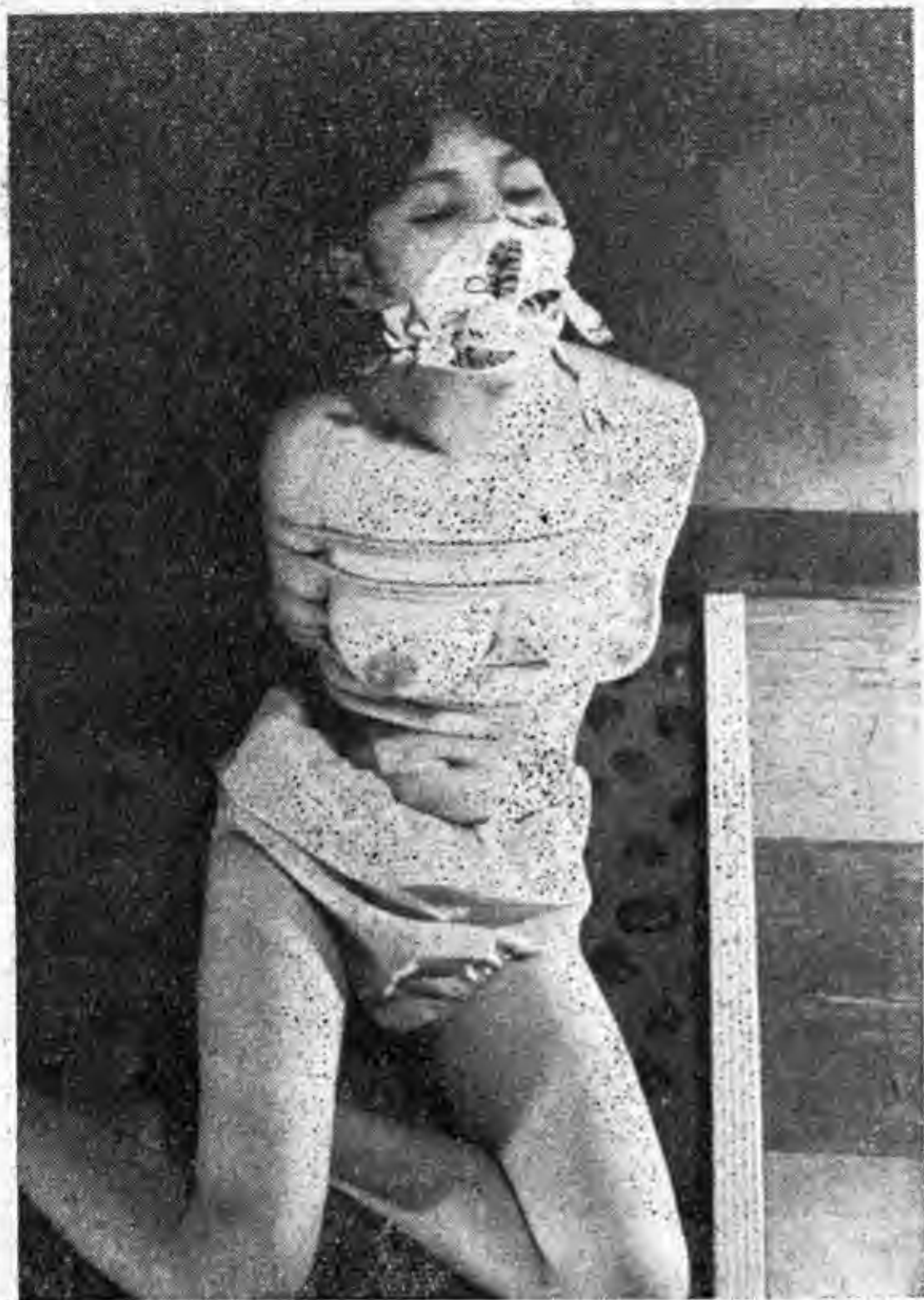
ン春日ルミ女史と組んで苛められ役を果たしたりしたこともあった。梅雨の降りつづく庭で泥まみれになって「泥中の青春」を演じたり野外撮影では、茨の中で素膚を血だらけにしたりして熱演したりしたこともあった。

彼女は、たしかに自分の身体に傷をつけるということに大して気をかけないようであっ

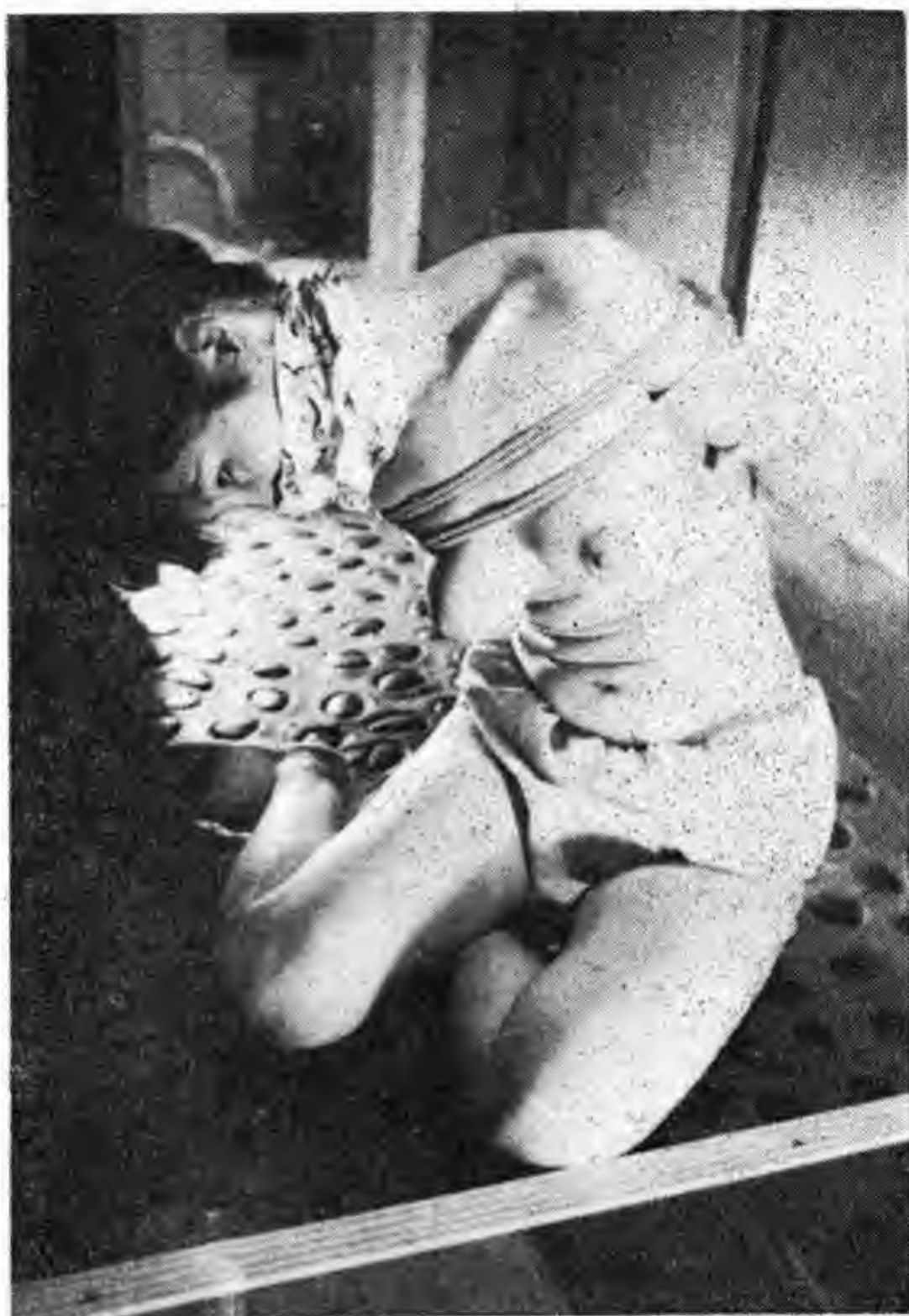
た。と、いうより、どこかしら何時も怪我をしているといったところがあった。僅かの間ではあったが、彼女を緊縛モデルとしてカメラを操作して感じたことだが、彼女の全身になにかしらマゾヒスティックなムードが漂っているように思えてならなかった。

愈々これから、本格的なものを撮ろうと計画していた矢先、彼女は突然、故郷へ帰らねばならない事になった。どういう理由であったかは私の預り知るところではないが、とにかく、アルサロに勤めている友達と二人でアパートを借りていたというのだから、無断で家を飛び出してきて親に呼び戻されたのか、或は結婚話でもあったのか、いずれにしても私達に知らせてくれていた、その連絡先からは忽然と立ち去ってしまったのだ。

それから、何年、突然彼女から電話を貰ったときは、誰からかかってきたのか、名前を聞かされただけでは、その名前をめぐると頭の中で回転させてみても急に誰だったか思い出せなかった。ええと、どなたでしたか？ と、やや暫く考えた末思いだせないままそう問い返したところ、ずっと以前、モデルをしていたことのある——という彼女の返事でやった思い出した。そして、彼女を最後







にモデルにしたとき、濡れたロープを包むために風呂敷を借りっぱなしにしていたことを今更のように思い出したのだった。

七月十二日（金）

何年かぶりで逢う彼女は、どのように変化していたらうかと幾許かの好奇心を抱きながら、再び上阪してきた彼女を緊縛する機会

をもつことになった。

六月二十三日に今年は空梅雨だとの予報が出たその翌日の二十四日から降り出した雨は降りも降ったり、近來に珍しい豪雨となって各地に被害をもたらした。七月になっても降り続いた雨は梅雨特有の降ったり止んだりで蒸し暑いこときわまりない。照り出したかと

思うと、絹のような雨がそのあとから音もなく降り出してくるといった有様で、じわじわとにじみ出てきた汗は、下着をべったりと肌にへばりつかせて気持ち悪いतरらないが、湿度が高いので乾くこともない。

シャーと音をたてて降り注ぐ雨足を眺めていると、はからずも何年か前の梅雨の一日、雨の降る中を野外で撮影したときのことを思い出した。その日は朝から雨だったので、勿論室内で撮影することに予定していたのだが威勢よく庭木に降りつづく雨の降りっぷりを見つめていると、急に雨中の庭で写真を撮ってみたくなった。と、いっても、そんな事をモデル嬢に頼んでも、うんといってくれる筈はない。素裸で縛られて庭へほり出されたら頭から足の爪先まで、びしょ濡れになってしまう。身体の方は、まあ、裸だからいいとしても、髪をずぶ濡れにさせるといふことは、若い女性として耐えられないことに違いないのだ。

しかし、その時の雨中全裸の緊縛ポーズの撮影を敢行したいという私の気持は熾烈なものがあった。そして、独り言ともなく呟いた「この雨の中で写したら素晴らしいだろうなあ」の一言を聞いていた彼女は、快く、「私



も雨の中で濡れながら写されてみたい」と答えたものだ。髪もびしょ濡れになるのだし、素膚は泥まみれになるのだ。場合によっては風邪をひくかもしれないのだが、彼女は、そんな事は一向意に介しない風で、いそいそとワンピースを脱ぐのだった。

私はあの時の撮影のことを思い出して何かしら、彼女に近親以上のものを覚えた。私は

傘をさしかけて貰いながら、シャッターを切ったのだが、彼女は終りまで雨にうたれてずぶ濡れで頑張ってくれたのだった。

今日は蒸し暑いので、冷房のよく効いた洋室を選ぶことにした。室内は快適の気温湿度だが、例によって広くないので、35ミリの広角レンズを装着して手持によって撮影することにした。三〇〇Wフラッド三燈を点灯する

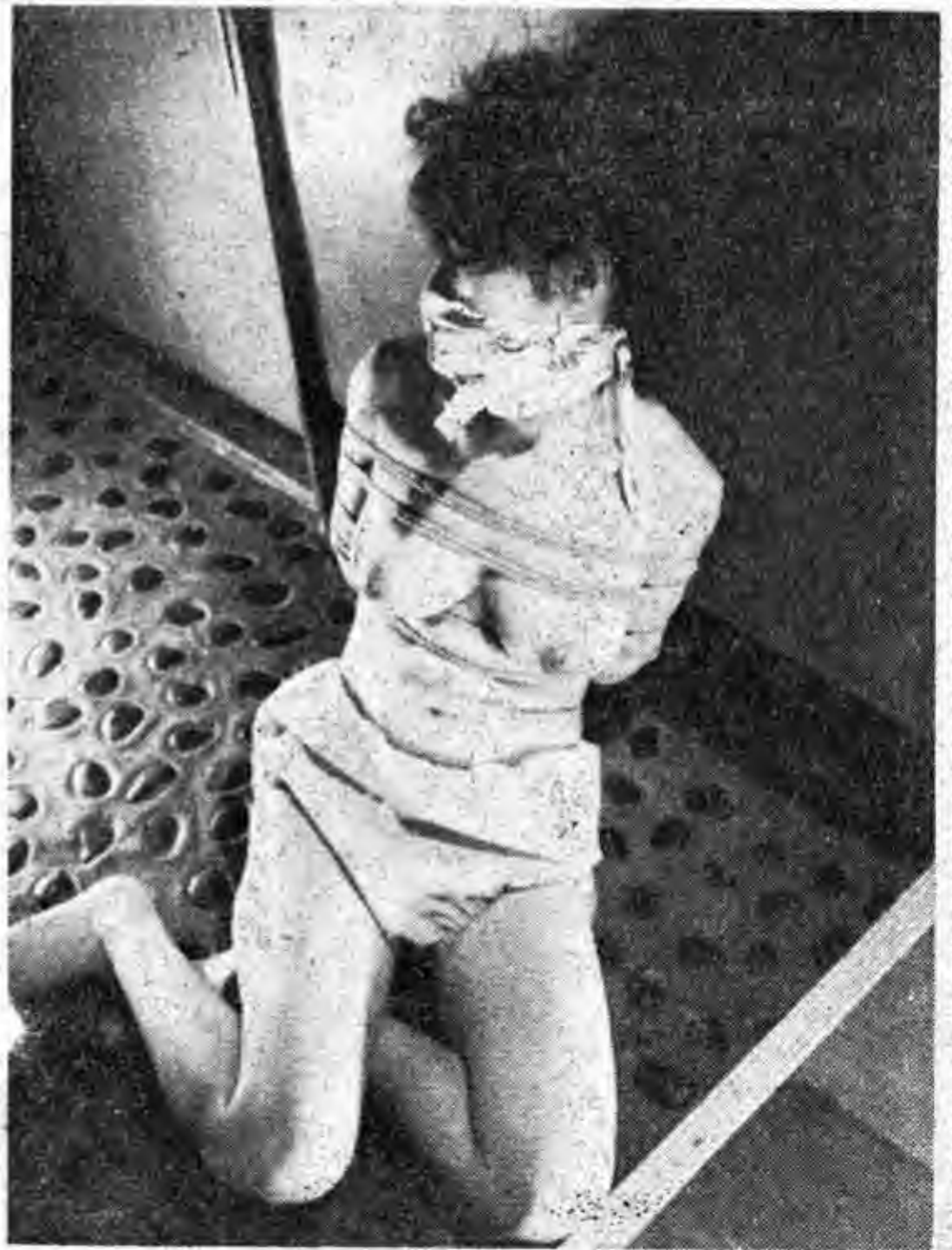
と四方の壁に光線が反対するので、F4に絞って50分の1は十分にきれる光量がある。35ミリの広角なので焦点深度が深く、開放に近くすれば100分1も不可能ではないが、とにかく手持ちの限界を50分の1に置いておく。カメラアングルも自由に駆使できるので、三脚に据えた時と違った味合が出せるのでなかなか面白い。







カメラのひけがなくとも十分全身をつかまえることが出来るのが広角レンズの強味なので、ポーズとカメラアングルに注意しながらトイレや浴室のような狭い部屋の緊縛姿態を



全部をとらえたいと思って、最初この洋間をみたとき四種ばかりのフランを樹てた。ポーズによって、50ミリの標準と80ミリの長焦点の交換レンズを準備してきているので、その都度交換することとして或る程度の幅を持たせたが、ここに掲載した写真は全部35ミリによったものである。

初対面ではないので、緊縛への導入は極めて容易である。以前は縄を持って立つだけで両手首を背後で組んで縛り易いようにポーズを作ったぐらい飼育されていたのだが、その間、幾許かの空白があると、いささか抵抗を感じるのだろうか。やはり数年の歳月は彼女の肉体にも相当の変化をもたらしているのはいなめない。ハイティーンから結婚適齢期に



至る花の盛りの青春とあってみれば、当然といえは当然といえるのだが、当時からみれば六乃至七疋ばかり痩せたのは、ポリウムと張りのある肉体を誇つていた愛川悦子嬢だけに惜しいと感じられる。

殊にあの見事な膨隆を見せた乳房に往年の大きさと張りを失ったのは残念である。しか

し、長身の彼女が更に一段とスタイルがよくなり、全体的に落着きを持ってきたことは今後のモデルとしての芸域も幅広いものになつてくるだろうと期待される。

さて、今日のテーマは、ヌメヌメとしたゴム製のおしめカバーの着用と花模様のブラジャーによる猿ぐつ

わといったもの。緊縛方法は勿論後手しぼり  
高手小手。肩や腕の肉がいささか落ちたので  
両手首をX字に交叉さして縛り上げると肩胛





骨のところまで容易に上ってゆく。これでは従来の悦子嬢の忍耐強さと協力ぶりからすると、相当強度の緊縛にもたえそうだ。以前はなんとしても体重がありすぎたので完全な吊り責めなんか、とても考えられなかったが、この調子では機会さえあれば、そういった希望もあながち夢ばかりではなさそうである。

御自慢の乳房（往年の張りを失っている）

はいえ、やはり大きいことは大きい（の上下を挟みつけるように二筋ずつの縄が通り、ぎゅっと二の腕に喰い込むように絡まっているアメ色のゴムの色彩がモノクロ写真では十分に出来ないのは残念だが、そのヌメヌメとしたタツチだけは、よく分って頂けると思うが、どうだろう。おむつを当ててカバーで包み、冷たい石の上へじかに坐らせておく。身動き

の出来ない女体は、次第に迫りくる尿意に身もたえするが、口にかまされたブラジャーの猿ぐつわは苦痛を訴えるすべさえないのだ。

石の冷たさと時間の経過とは、益々彼女の生理的要求をかりたて、全身をさいない。おむつを当てて、おむつカバーをはかせられているが、年頃の娘として、どうして、このまま排泄することが出来るだろうか。

——といって極限に達してきた尿意は、全身の毛穴を鳥肌だたせ、身ぶるいする悪感がぞくぞくと襲ってくるのだ。目の前にトイレがあるのだが、なんとかしてそこまで這ってゆけないだろうか。せめて自由な両足を動かしてじりじりといざり寄ってゆく。しかし、身体を動かしたので、流石の忍耐もその限界を通り越してしまった。

彼女はただ呆然と放心したように、坐ったままだった。虚脱した全身に、ほっとした解放感が快く感じられたが、落着いて気がついてみると、縛られたままの自分を発見して、ガク然とするのだった。

——といった想定で、ポーズから表情まで工夫してみたのだが、果して、そういった感情がうまく出せたかどうか。



新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

新装一周年記念特大号

1961年10月号

(第15巻 第10号 通刊第158号)





# 読者と奇ク

— 奇クはエロ誌か —

中 谷 正 夫

奇クはエロか

先ず奇クがエロかどうかと言う問題を考えて行く上に、氣を付けなければならぬ点が三つあると思います。

第一に、或る所論が「奇クはエロである可し」と言う主張なのか、「エロである」と言う事実を述べて居るのか。此の主観と客観の区別。

第二に、奇クがエロとは、何を指して言うのか。題材が表現か、或いはその両方か。

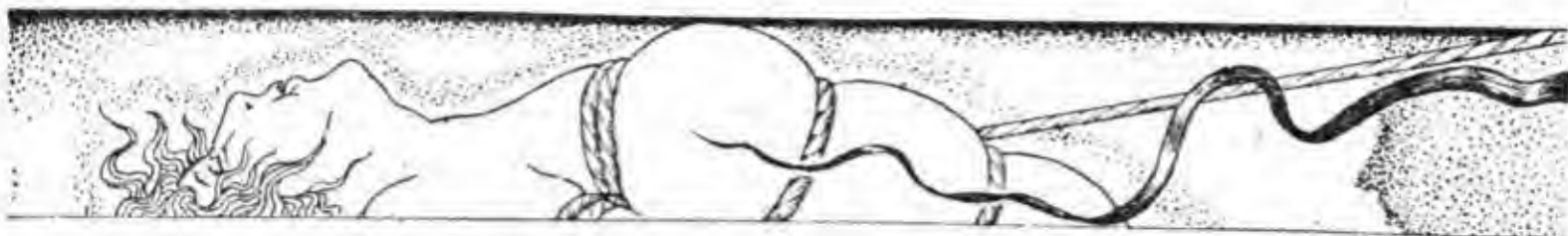
第三に、エロと言う概念を通用語で使うか、或いは芸術的な意味を含めて用いるか。

此れ等の点について、例えば千草氏の次の一節にしても、私がカッコの中で示す様に、色々な意味が含まれて居るわけです。「中谷氏は、奇クからエロを感じ取る人は少いのでは

此の頃、奇クの性格とか在り方に関連して、エロとかどきつさとか言うことが論議されて居る。具体的に言うと、四月号の読者通信で小林孝氏が奇クはエロ本である可きなのにエロ味が薄過ぎると非難されたのに対して、私が六月号で奇クは必ずしもエロ雑誌ではなからうと言った処、更に八月号で千草忠夫氏が奇クはエロである、そうでなかったら何んの意義があるか、と所論を展開して居られるなど。

此れ等の論議は、結論は別としても、論議の過程を通じて、奇クの性格を探り、在り方を求める一つの手懸りにもなるので、論議が交わされると言うことそれ自身だけでも、充分意義のあることだと思います。それで、私も柄になく、此処にもう一度誌上を拝借して、皆さんと共に此の問題を考えて見たいと思います。





ないかといっておられるが、そんな事は断じてない（事実）。若しエロを感じない人があるとすれば、それはすでにこの種の刺戟に麻痺してしまつたからであり（事実）、……奇クはある意味でエロ本（用語）であるべきなのだ（主張）。それが当然なのだ（主張）。ヌードの緊縛写真がある、揮マニア好みの記事がある。切腹の血を流している絵、コプロマニアの手記、サジスム小説、マゾヒスト好みの読み物（題材と表現の問題）——これらが、それぞれ好む者のエロチックな心情を掻きたてないとしたら、一体何んの意義があるというのだろうか（意見、期待乃至主張？）」

### 事実と主張

奇クがエロであつて欲しいと言う期待や、エロである可きだと言う主張は、それとして充分に成り立つ。然しそのことから、奇クはエロであると言う事実も結論も当然には出て来ない。寧ろ、そうした期待や主張が強ければ強い程、反対に、事實はそれに遠い、稀薄であると言う証左になるとも言えないか。小林氏が「本来エロ本であるべき奇クが、実際には純文学書よりもエロでないのはどうしたことか」と言つて居られるのも、此の辺の事情を物語つて居るとは言えないでしょう。か。（尚、四月号所載の此の小林氏の一文は、氏の御意見に賛する人が多いか少いかは別として、思考方法に混乱も無いし、論旨としては良く筋が通つた、整然とした御意見だと思ひました）

### 題材と表現

次に、奇クがエロであるとするためには、その思想や題材で無く、内容の取扱い態度なり、作品に現れた表現なりがエロでなければならぬと思ひます。

此の点について、分り易いためにわいせつの例について考へて見ましよう。例えば、作家が姦通論、強姦論を書く、教科書に医学者が性器の解剖や性交に関する臨床的説明を書く、或いは刑法学者がわいせつ罪、強姦罪の説明を書くなどしても、決してわいせつ行為でもなければわいせつ文書にもならない。題材の取扱い態度、書き方、描写等に具体的なわいせつ性が無いからでしょう。要するに、作品や文書がわいせつであるかどうかは、その思想や題材の問題では無い。それ等の取扱い態度や表現の問題であります。（尤も、昔は、わいせつとはわいせつな事柄や思想そのものを指すとして、苟も不倫事項を扱った記事それ自体が禁圧を受けた時代もあったと言う）

此の点について、明治のなかば、「明治美術会」が催した「裸体画が我国の風俗に害ありやなしや」と言う論題の討論会で、同会の幹事だった原敬（後の首相）が行つた次の演説は参考になりましよう。

「よし本会の決議が風俗に害ありとしても、貴方々の画き方によつては害を無くすることが出来、又、いくら本会が無害と認めても、貴方々の画き様によつては有害にもなるものであります。これは貴方々のやり方が第一番で、画こうと画く



まいと、どちらでも貴方々の御決心、態度次第であります。

…」  
 以上は、わいせつについてですが、私はエロについても当  
 てはまると思います。奇クの題材はエロに関係が深い、これ  
 は、天下に争う人も無い事実。普通に表現すればエロになろ  
 うし、千草氏のみならず読者の多くが奇クからエロを期待し  
 ていることも恐らくは事実。然し、奇クはエロかどうかを決  
 める一番大事な点、即ち奇クの誌面に現実に現われた製作態  
 度と作品の傾向はどうか。これは寧ろ、人々がもどかしがっ  
 て不満も現に出て居る位に、その取扱振りや表現はエロで  
 ない。少くとも稀薄である。勿論、個々の作品（殊に写真）  
 の中には、エロなものもありましょうが、全体としての傾向  
 は非エロ的ではないでしょうか。此の点については、例えば  
 四馬孝氏の作風を例にとると、その題材は恐ろしくエロであ  
 る筈であるが、作品に現われたところは、寧ろ反対でしょう。  
 何れにしても、奇クの題材から当然にエロを期待する人、  
 従って、娼家に上ったつもりだのにはぐらかされた様な不満  
 を感じる人々から奇クに対して、転べ、貞操帯をとれ、と言  
 う種類の抗議は今後も絶えまいと思います。これは、前述の  
 様な奇クに内在する矛盾から生ずる必然的な、奇クに負わさ  
 れた宿命の様なものかも知れません。奇クが貞操帯を外した  
 時は、奇クの死を意味するものかどうかは私には分りません  
 が、今迄エロとどぎつさを追いかけた雑誌は殆んど潰れてし  
 まったと言うことは事実の様です。

## 用語の問題

エロとは元々エロスの神から出た言葉で、元は健康的な意  
 味が主だったのかも分りませんが、残念乍ら今ではエロ本、  
 エロ写真と言え、ワイ本、ワイ写真と同じ意味で使われて  
 居る。それで、奇クに芸術的エロな要素を強くしたいと言う  
 千草氏の主張には私も同感なのですが、ただ現在エロと言う  
 言葉がさきに述べたような意味に普通使われて居る以上、奇  
 クはエロとかエロ本であるとか言うのは、無用の誤解を生む  
 惧れが多いと思われます。

## 読者の声

私の見解は以上の様ですが、ただどちらかと言うと論理を  
 主とし、殊に「題材と表現」のくだりは、法律的とも言える  
 見方が主になりました。然し、法律的な考えは、一つの拠り  
 処にはなっても全部とは言えないし、結局此の問題について  
 一番大事なことは、読者一般が、奇クの傾向をどう受け取っ  
 て居るかと言う事実如何に尽きましよう。千草氏によると、  
 読者一般は断じてエロ本と受け取って居ると言われるのです  
 が、此の点について私は、次に読者通信欄から多くの例を掲  
 げて皆さんの御判断の一助にしたいと思います。（誤解の無  
 い様に申し添えますが、此の例は以前に私が面白いと思って  
 マークしておいたものをその儘挙げるので、私の此の本稿の  
 論旨に都合の良いものだけを拾い出したものではありません。  
 これは、読んで下されば直ぐ分ります）数は、余り少くは





意味が無いので成る可く多く（五十六例）、又主観の入る余地を少くする意味から、私が要約すると言うやり方は避けて、何れも原文の儘を抜萃、引用することと致します。（更に参照の便の為、所載年月を併記）

此れ等を通じて、読者は、奇クがエロであるかの問題もさること乍ら、更に高次の幾多の示唆を得られることと信じます。

「…多くの筆者達が、それぞれの年令、性別、地位、環境といった一切のものを脱ぎすて、日頃口で言えない体験や告白を、心から楽しそうに、そして自由に伸び伸びと表現されるのを読んでみると、そこには一般雑誌にあり勝ちな不健全なわいせつ感が全くないばかりでなく、微笑ましい愉悦と、心よい興奮をつき交せた健康なものを感じるのです。」

（二八・九、FM生）

「…第一頁からむさぼる様に読み始めました。そして発見したのです。…ああ、これこそ僕の求めていた文章です。これは僕自身の書いた文章ではないかとさえ思われました。…ここに僕と同じ趣味の人がいる。その人と僕と違うところは、僕はただ想像しあこがれているだけなのに、この人はそれをもう実行に移している点です。ああ何んと言ったら僕のこの羨望の感情を現わすことが出来るのでしょうか。編集部の方にお願いです。」（三四・九、東京、SR生）

「…はつきりと編集部求めて居るサムシングの輪廓が分りました。生半可なセミプロ作家や机上の空想談の為にのみ貴

重な奇クの誌面を開放されているのではなく、真に市井の塵の中から人間苦に彩られた生々しい人生記録が、止むに止まれず流露する偽らざる無名の労作こそ、双手を挙げて迎え入れようとするその根本方針を確かめ得て、真にこれある哉と膝をたたきました。…大胆な作にさえ、匂うような香気と詩情と親愛感が溢れ、少しも猥雑な趣がないのは、何ういう言葉で説明したらいいのでしょうか。これは奇クの風格ともいうべき、絶対他の真似の出来ぬ事実ではないでしょうか。編集者の意図が漸く読者（投稿者の主体としての）に滲透し共鳴され、度重なる脱皮の苦しみを経た上でなければこのようなリファインに到達することは不可能だったでしょう。正しく一朝一夕の成果ではありません。そして、これは正しく、健康な奇クのアトモスフィアを醸成しているのです。私は思う、……大多数の読者が心から渴望しているものは、無名人の商売気を離れた脈々として赤い血の通う真実の手記ではないでしょうか。そして、このような作品を主流にした編集方針こそが、奇クをマンネリズムから護り、永遠に若々しさを保ちつづけさせる大動脈となるのだと確信します。幸いにして、編集部が…」（三〇・二、和歌山、小竹紀夫）

「…人間性の不思議さに考えさせられています。…しかも、嘘や創作でないことは文章を読めばわかりますし、このような記録を集めているのは奇クしかないのですから文字通り唯一の特異誌といえるわけです。もし奇クというものが存在しなかったら、このような人間性の特殊な生態の実態が闇から闇へ葬り去られてしまいうわけです。おそらく医者だって



性科学者だって、熱心な奇クの読者程にはこのようなマニアの実体の細部までは知らないのではないだろうか。稀少価値だけの価値でなく、人間性研究の一端としての立派な価値が……」(三一・六、藤見郁)

「……先日ある書店で何気なく手に取って見た一冊の雑誌、頁を繰ってゆくにつれて私の頬は紅潮し、胸は怪しく騒ぎ始めました。私のことが書かれている。いや私ではありませんけれども、私と同じ心を持った人の生態が、さまざまに表現されているのです。……物心ついた頃からの私は、死のような孤独感に責めさいなまれ乍ら暗い灰色の日々を送ってまいりました。……私の心は、読み終わった瞬間から、死のような孤独感が、すうっと引くのを感じました。私だけではなかったのだ。友達がいたのだ。同志が呼びかけてくれているのだ。私は希望の光が、さんさんと私の周囲に輝いているのを、はっきりと見るこの出来る人間になりました。私はアブの間間かも知れませんが、真実に生きたい願いは絶えず抱いています。どうか私と同じ世界に住んでいらっしゃる多くの方々の……」(三四・一〇、MK生)

「……神を信じ学術を尊び不正を憎悪する品行方正の一青年ですが、人間性を尊重するが故に小生は自分が秘かに抱いている欲望を決して恥ずべきものと思いません。サド的傾向というものは人間の(特に男性の)心のどこかに必らず有するものと信じているからです。小生、貴誌故に一生、品行方正を持続する自信が生まれました。……」(二八・四、東京、伏住竜児)

「……今迄この様な素晴らしい雑誌は読んだことは勿論のこと見たこともありませんでした。天から私のために特にお与え下さった神の書ではないかと、わななく手で頁をくったものです。……日本にもこの様に素晴らしい雑誌が現実に発行されてるということとは、私にとっては本当に驚異のようなものでした。その内容の素晴しさは私をして夢の天国へ遊ばせるようなものでした。いや私の今迄胸に抱いていた夢、とても実際にはないだろうと思っていた夢でした。日本にもこの様な雑誌が有るのか、いや有ったのかと、今更乍ら驚きと共に嬉しくなりました。きっと、後々の世に残る文献的価値のある雑誌として、後世の人にも読まれることと思います。……」(三五・五、岡山、佐用生)

「……毎月欠号なく新鮮な口絵と深刻な告白に現代人の性風俗をあますところなく率直に捉え、とかく右傾勝ちの時勢に、敢然と性の神秘に、鋭利なメスを振られていく編集部の方々の御苦勞には、ただ敬意を表するばかりです。扱て……」(二九・一一、OH生)

「……類誌の派手でそして安っぽいのに較べて、なんという確実な編集ぶりでしょう。……何よりも本誌には、たしかな倫理とその上に立つ理論があるようです。……」(二九・一一、堀八郎)

「私は東京の有名大学の女子学生ですが、ふと近くの本屋で貴誌を見出し、非常に胸のときめきを覚えました。その時はそのまま店を出しましたが、どうしても口絵写真などが頭の中にこびりついて離れません。それで、妹のメガネを借りてマ





スクをかけて思い切って十一月号を買い求めました。そして内容を一気に読み終ると、今までにない気持が起りました。サドとかマゾとかいうことはおぼろげながら知っておりましたが、実際に目の前に現れるのはやはり非常なショックでございます。今迄新聞などで文字を見ると何か、とってもドキドキして空想ともつかぬ漠とした事が頭の中を駆けめぐりました。又映画などで女優さんが縛られているのを見ましては、とてもいいなあと考えてみた事がございます。そして、貴誌を見るに及んで、私は、そうした事に並々ならない興味を持っているのを知ったのでございます。貴誌を手に入れて何時間もたない中に、完全にとりこにされてしまいました。写真のモデルの方を、とっても羨ましく思います。でも私を夢中にさせるのは……(三五・二、東京、九仁子)

「……昨年五月奇譚クラブという本を何気なくパラパラと目を通して行った時の小生の驚きを御想像下さい。勿論、それ以来、新刊はもとより、機会のある毎に古本屋の店頭を覗き歩いて……大体小生は今迄新刊の雑誌など、ついぞ買ったことがなかったのです。金を出して買う価値を認めず、時にデパートで立読みする程度で充分だったのです。ところが、奇クが小生の生活に侵入するや此の信条も破れ、本当に今迄になく雑誌の発売が待たれるようになったのです……扱て小生は……」

(三〇・五、京都、OT生)

「誰しも生活の重荷を忘れたときがあります。現実の冷たさがやり切れないとき、人間はどうするでしょう。人を殺したり酒に惑溺出来る人は幸福な人です。理性がこの様なこと

を許してくれぬならば、その人は夢の中に逃避するよりほか仕方がありません。想像の世界ならば、誰もサド候爵や暴君ネロにもなつて自分の好ましくない者をいじめてくれますからね。だが一人の人間のイメージの数など知れたもの、絶えず新しい刺激を求めるこの世界では、陳腐なものは直ちに飽きられてしまいます。その泉の源泉としてのK誌の使命は大きなものです……」(三三・八、京都、CM生)

「……実はこんな性癖を持つ自分を……世間の眼は勿論、家族の眼からもひそかに逃れてただ一人……ところが奇クを読んでこうした性向を有する人が案外多いことを知り、大変嬉しく思ひ又一種の安心感すら得ました。……求めて久しく得られず悶々とすごして来た私にとって、奇クは正しく千天の慈雨にも等しい……」(二九・六、福岡、YS生)

「……わななく指先で次々と頁を繰ってゆきました。実際、ミ―チャン、ハーチャン向の出版物を作るのに熱をあげる人は多いのですが、こういった限られた読者を相手にした出版物を作ってくれる人は少いものです。独乙では、こうした特殊な研究には理解を持ち、優秀な人が当たっているということを引きいていますが、現在の日本ではまだまだ継子扱いです。それはさておき……」(三三・九、福岡、木村生)

「……何時も貴誌によって生きる喜びを胸一ぱいに味って居ります職場に働く一女性です。はじめから大変おしつけなお願ひではありませんが、私としましては、切なる願ひがありましてお便り……それは、私の夢に描いております光景を奇クの一隅に載せて頂きたいのです。即ち女奴隷のことなので



す。：世の殆んど凡ての女性は口に出さなくとも、およそ私と同じ気持です。どうか。：」（二九・一一、宮脇礼子）

「：昨年来、ふと本屋の店頭で奇クを買って読んだ時の嬉しさ、四十の声を聞く迄自分がアブであるため友人にも話が出来ないと卑下していた気持を開放され、友は沢山あると知りました。会社の専務として常識も人並に発達していると云われて、少しは政治教育にも関係ある私がアブであるため如何に苦しんだことか。しかし、今の私は朗らかな気持です。結婚して子供が一人。：」（二九・一二、大阪、渉香生）

「：読者と歩み、行き届いた編集態度には、いささか敬服しております。：KKクラブを通じて私のような同好の方が世間には多いことがわかり、いささか心強く、又日々も明るく過ごせるようになり、精神的に暗いところから救われたようになりました。：専門的に解説して頂きたいと思います。空想や小説などでなく、学問的に要約していただきたいものです。：」（二九・一二、兵庫、田中明）

「：今迄長年教職にたずさわっている者として大なるリクリエーション的価値を見出しました。：先ず貴誌の内容については大胆にして率直なる表現には感服させられました。特に此の種雑誌にあり勝ちの軽薄さの見受けられないのに好感が持てました。：或は私の独り相撲の意見かも知れませんが、日本唯一の貴重な雑誌が末長く存続することを願した余り、失礼をも顧みず。：」（二八・五、静岡、盤田生）

「：広い此の世の中に、此の様に変わった趣味を持つものは自分一人の様な気がして、悶々とした日を送っていた次第です

が、奇クを知り、又被縛写真を見てから、私と同じ性向の人達が多く存在していることが証拠づけられ、今迄の社会観、人生観が一変し、何だか自信に満ちたとても云うか、心の安定感を得た様で、日常生活が今迄になく明るく、希望に満ちて生活出来るようになりました。：」（三〇・五、志摩生）

「：私の最も求め、そして最も悩んでいた事等、しかもその写真まである。もう夢かとはかり喜んで：私は生れてこの方：誰にも打明けられず、一人でいろいろ空想したり：貴誌を知る迄は此の日本全国で私只一人がこの様な：と思ひ悩んでいたのですが、数多くの同好者の居ることが分り、誠にうれしく親に会った様な気持で一杯で：貴誌に対して云い尽せぬ感謝の念で。：」（三〇・二、広島、TK生）

「：店頭でふとみつけた奇ク、こんなすばらしい雑誌のあることを今まで知らなかったうかつな私でした。ああこれこそ私達の世界だ。：ああ天下には矢張り私と同好の士がいるのだ。：」（二九・八、江藤恵夢）

「：久し振りに日本を訪れた一外国人の切なる願いをかなえて下さい。：ところで、昨日偶然に或る人から奇譚クラブ一九五四年五月号を見せてもらい、本当にびっくりしました。何故なら、僕がひそかに夢み、そして、あこがれていたことが、そのまま写真とそして絵になって現れていたからです。昨夜は眠れなかっただけでなく、もうたまらなくなつてペンをとりました。具体的に申しあげると、私は女性、特に若くて美しい女性の足に、たまらない魅力を感じ。：」（二九・六一、外国人）





「…奇クの一番興味があるのは人にも云えず人からも聞けない話がタツプリ読めるからで、その点各人各様の性歴や告白が何んといってもトップ記事です。…絶対人から聞けない、人に云えない性の打明け話を続けて下さいますようお願いいたします。…さて先生方の御苦労今更乍らお察しします。軽症の中はよいですが、重症サド、マゾ、ソドミーからルストモルド、フェチズム、尿淫症、糞淫症まで相手にしておられたんでは、精神病院の医師の如く、時にはヘンになるかも知れませんネ。十月号で鬼山氏の言われたように、アブの海は無味乾燥なノーマル砂漠より誠に面白いですが、下手をする到底なし海へ沈んでしまいます。読者の声を聞こうともせぬ独善も困りますが、一部の重症アブニストの御機嫌とりにならぬように…」(二七・一二、小名木貫一)

「アブの通人は、とかく孤独小心の者に多いという原則があるようで、本誌の存在が何れの社会に於てもそれ程害を流すとは考えられず、寧ろかくの如き何パーセントかの人々に、ささやかな安住の地を提供しているという貢献も、改めて認識されなければならぬではないでしょうか。ところで…」(三一・一〇、東京E生)

「…先ず本誌を受取ったら真先に読者通信欄を開けます。そして私と同じ性向の投稿を見出すと、渴ける者が泉を見出した如く一気に読んでしまいます。……この欄を個人的な通信に使用するのには怪しからんと憤慨されていられる方がありますが、私は反対意見で、大いに同好の士と語り合いたいと思うのです…」(三三・六、京都、凡生)

「…俗悪な雑誌の多い中で終始孤高を保ってこられた貴誌に敬意を表します。既に百号を突破するという御誌、この世界に唯一の本格的出版物である御誌を文字通り毎号一頁たりとも見落さなかった私が、必秘かに不満に思っていた一事、それを五月号にて…」(三四・九、大阪、KO生)

「…もう一日千秋の思いで待ち続けておりましたので、封を切るのもどかしく、早速目次を開いて、あッと声を立てる所でした。私の拙い告白が先輩諸兄姉にそッと肩を並べているのです。カーッと顔が赤くなり胸がドキドキして夢中で頁をむさばり読みました。…何んと詩的な題をつけて下さったものでしょう。嬉しくて…」(二八・三、林田澄子)

「…小生は本年二十二才、T大の学生です。…変ったのや、残酷なもの、或は血の出るようなものは性に合わず、専ら自分が女目明しに捕えられるとか、或は自分の家に入った女泥棒を捕えて縛り上げるとかの姿を想像して楽しんでいきます。小生は普段は至ってノーマルな方で、KKの愛読者としては程度の低い方では…」(三三・六、東京本郷、佐藤亮)

「…特に口絵を見る時の期待は格別です。観喜と胸の高鳴り…自分の本能にあったこの世の只一つの楽しみ、骨髓までもとろける様な陶酔を感じるこの本に、今更ながら貴誌の企画と編集の卓越さに…」(三〇・三、熊本、TY生)

「…私は夫を戦争で失い…最初読んだ時は本当にびっくり致しました。……慌てて本を閉じてしまいましたが、でも一冊ゆっくり読んでみると仲々面白くて、いろいろなことを知りました。…お店に来るお客さんの中にも、女の人を縛るのが



好きな方も可成りいらっしやいます。：男の人って、どうしてああいうことが好きなのでしょう。ところが、私も又：」

(三〇・三、中村加寿江)

「：毎日のように本屋へ通い、特に一日千秋の思い。八月二十三日に購入したのですが、発売期日が早く出来ないものでしょうか。それに月一冊では待ち遠しくて耐えられません。最低二カ月に三冊、或いは臨時増刊号のような形式で一冊でも多く発刊されん事を切望。奇クこそは吾々アブ礼讃家にとつて希望の光、生活力の熱源。KK愛読以来、小生初めて人生の幸福を知り得たのです。」(二九・一一、島直樹)

「：いよいよ当局の斯道への圧迫も激しくなりましたが、世の蔭に苦悩する私達の為に頑張って下さい。貴社のお仕事はただ商利の為のみでなく、もしこうした雑誌が全面的に禁止されるようになれば、抑圧された私達の欲情は、街に野に山に、その犠牲を求めてさまよい出るでしょう。その結果がどうであるか、慄然たるものがあります。貴誌はこうした昇華発散させ、未然に防いでいるのです。扱、この様な困難な状態の中で、何んとかして新生面を開いて局面を打開しないと、やがて平凡なエロ雑誌に転落して、読者の魅力を失って：」(二九・一一、大船、吉田三郎)

「：奇クの愛読者になり発渾たる希望が蘇り健全な明るい：感謝いたします。：全く私の良き相談相手となり、悩みを解消してくれ、又理性を養ってくれます。そして思いきり空想の世界へ私を運んでくれ、魂も揺ぶられるほどの胸のときめきと陶酔の淵に私を引き入れてくれ、慰め、英気を養ってく

れます。」(三五・八、静岡、緊禪生)

「：私は奇クを良き友として、心の燈火として生きて来ました。既に三年の間、奇クを手にするや、一番に読者交歓室を見て、同志はいないかと探し、それ許りが楽しみとなつて居ります。」(三二・一、豊橋市、比良沢)

「：人間誰しも異端を好むところもあるものであるから、日常の生活でしばしば自分達の経験する心の妖しい働きが、誰にでもある衝動だと知ったときは、ホッとした安堵に似た気持ちになつてくるだろう。」(三〇・五、淡美一郎)

「：本誌をその昇華の場として一人であるが、過去に幾度か本誌からすら離れようと試みたこともあった。しかしその都度、無意識に遅ましくしている妄想の激しさの増加を意識して驚いたのだ。そして、その一番安全な最良の鎮圧方法として、また本誌に舞い戻っているのが実情である。」(三四・九、藤川力行)

「：私は貴誌愛読者ですが、別段罪悪感を感じてといったわけでもないのですが、いずれにしても私の性向は余り健康的でないことは事実で、出来る事なら忘れたいと殊勝な気持を起して、精魂して編集された貴誌を失礼ではありましたが、全部焼却し、その他フォト等随分色々と大事にとっておいた物をすっかり焼却して決心をしましたが、やはり毎号の発刊を楽しむに、買求めては焼き、買っては焼きを繰り返して参りました。：しかし、私にはよく分つたのですが、はじめ私は、フォトや雑誌を見るから忘れられないと思つて居りましたが、それは全く逆で、フォトや貴誌に自分の性向を楽し





ませ慰められる事によって適度に調節され、健康が保たれる事を知りました。なかなか感じている事をうまく表現出来ません。……」(三一・一〇、大阪、AK生)

「……暗い欲望といわれ、容易に満されない悩み。そして又、他人に語ることの出来ない悲しみは、その道の誰しもが抱くものではないでしょうか。決して人後に落ちることのない教養と理性を持ちながら、それとは全く無関係に自己の肉体の何処かに潜むこの不思議な正体を取り出し、そして抹殺しようとして私自身、どれ程戦ったことでしょうか。しかし、あらゆる試みも徒労に終って、今はただ、自然のままに生れながら備ったものを認めて生きて行く以外に方法はないと考えています。人一倍プライドの高い私には、本誌を通じる以外にその一片をあらわすことは出来ず、ごく通常の生活を続けております。時々本誌を読んだり、又こうして今自分で書いたりしている、何んとかなく気が晴れる様な思いがします。このようなことは、自分のこの傾向を更に助長するのではないかという心配は、私の経験の限りではありません。かえって、激しい抑圧は、その本性をどう変化することも出来ず、苦しみを増すばかりの様な気がするのです。……」(三五・四、東京、斎藤)

「……八月号に告白記を書いて、無我夢中で女だてらに自分の性格の底の底まで恥しいことを打明けてしまった。なんてことをしてしまったのだらうと痛切に後悔しました。そうしてその時はもうこれ限り心身共に健康な日を送らうと決心したのです。……これまでたまっていた雑誌も全部お風呂のたきつ

けにしていきました。……そうして今迄親しんでいた奇クも八月号限り見ないことに心に固くきめてしまったのですが、でも……そして、この間とうとう浅草の書店で九月号を買ってしまいました。理性さえ強く持っていればいいんだと自分自身にいい聞かせながら……」(二八・一一、信太容子)

「……最初この特異な雑誌を発見したとき、写真や活字がまるで生き物のように私の目、いや胸の中へ電撃のように飛び込んできたのを覚えています。活字が活字でないようなあのときのショック。この世の中に、このような雑誌もあるものかという驚き。このとき程、私は言論出版の自由の有難さを味ったことはありませんでした。何故もっと早く発見出来なかったかという悔いよりも、どんなぼろぼろでもよいから一冊でも多くと狂気のようになって古本を買い漁ったあの頃。……この雑誌さえあれば、他のもうどんな欲望も捨て去ってもよいとさえ思った程の打ち込みようでした。あれから数年。しかし、人間の欲にはきりのないもので、ときには物足りなく思ったり、不満に思うことがあったりしましたが、とにかく貴誌は、私にとっては米の飯の次に必要な命の綱として毎月愛読して参りました。……」(三四・三、京都、高縄生)

「……奇クが姿を消したら、私は自殺するかもしれません。或は奇クを迫害する者に復讐する事でしよう。たとえば指一本、腕一本失うより奇クの発展永続を祈るや切なるものがあります。映画、演劇にも実にあくどいエロ、グロなるものがあります。奇クの何処が悪いのでしょうか。自由はもっと真剣に奇クに与えられるべきです。……」(三〇・一一、竹岡金吉)



「…毎月これ程読者に待たれる雑誌は他におそらくないと思います。これは読者の要求を無視しない編集部、誠意と研究の賜だと思えます。読者の希望にこれ程深い注意を払われ、これ程誌面に如実に反映されているのを見れば、読者も又編集に加わっている様で愛情と支持を与えずには居れなくなるのは当然だと思えます。」(二八・一、染田玄)

「…結婚した当初は自分の本心を明かすことも出来ず、味気ない日を送って居りましたが、ふとした事から妻の協力を得て、極めて幸福な生活を送って居ります。そのふとした事というのは、…そして妻も又その縛られた女の写真を見て、言うに言われぬ血潮が騒ぐと云うのです。さて前置きが長く…」(二八・三、愛知県、KM生)

「…御誌は毎月欠かさず拝読させて頂いておりますが、御便りを出す勇氣もありません。失礼致しておりましたが、私は物心ついた頃から残酷な話や文章を読むのが好きで、年頃になってからは、そんな話を聞くと妙に胸がドキドキして困りました。初めは恐いもの見たさの好奇心だと思っておりましたが、娘になってからは、単にそれだけではないように思えるようになって来ました。日常は平凡なサラリー・ガールとして真面目に働いておりますが、このような私の気持は誰にも相談することも出来ないのです、独り自分の胸の中に秘めております。…と申しましたが、私は自分がそうしてみたいというのではなく、自分がそういう目にあってみたいという気持が強いのです。」(三三・六、大阪、久保利子)

「…私は本年十九才のオフィス・ガールでございます。昨日

ふと書店の店頭で貴誌を手にしまして、もう矢も楯もたまらず、本日ここに小為替同封します故、貴誌の旧号全部お送り下さいますようお願い致します。どうか呉々も厳重に荷造りの上…」(…でも九冊の雑誌が私の手許に入ったのでございますから嬉しくて仕方がございません。何度も何度も繰り返えし繰り返えし読みました。そして私は自分の思いを編集部の方に申し上げたい気持が押えきれず、大変はしたないことでございますが、恥かしさも忘れて書き出したわけでございます。…私本当の事を申し上げますと、縛って頂きたいのでございます。」(二八・七、京都、室崎美佐子)

「…過ぎ去りし幾年月。小生国鉄に奉職してより早くも三十七年、五十四才のたん生を前にして、現在は一小駅の助役として楽しく勤めておりますが、十八才の頃可憐な美少女のエプロン姿に魅せられ、以来何十年間、各型のエプロンを求めたり注文して作って貰っては、人知れず服の下に終日かけて楽しんでおりました。三年程以前に、小さな書店にて貴誌を手にした折は、夢かと思う程嬉しく、その後は一冊も欠かさず毎月求めて…尚、現在でも助役の身で、私自身毎日のように制服の下に女給エプロンを二枚、三枚とかけ、多い時には五枚も着こんだ上で楽しく勤めに出ています。自分では交通事故防止に役立っているつもりです。」(三四・一〇、神奈川、早堅杉風)

「…今後も真面目な研究誌として御発展されることを切にお祈りします。…そして、いろいろの方面のものを公平に発表して下さい。誰かがいっていたように、K誌をはじめからア





ブノーマルと考え、罪惡視するのはまちがっています。これらのグループの人々は皆善良な人々です。かえって、他の人の方が心がきたないずる人が多いと思います。」(三一・七、兵庫、FT生)

「…奇クも通刊九四号を数える程沢山に社会へ送り出され、斯道のマニア達は夫々の個性に基いて色々の満足を得て居られるものと思います。私も勿論、毎号手にして楽しんで居ります。本箱へバックナンバー順に並べ、読者通信、編集後記など対照し、好みのものから通読し、再読し更に精読してゆくと、味わいを深くし、興味を新たにして、誠に奇クが存在が心の底から有難いものと嬉しさがこみ上げて来ます。最近特に…」(三二・七、加沢天恩)

「…貴社発行の奇譚クラブを手にした時は、思わず驚歎の目を睜った一人でした。私は毎年新緑の頃になると晴れ晴れとした明るさに全身がのびのびとするような躍動感を感じるのですが、この雑誌ははかり知れない明るさと広さをもって私の心を押し包んでしまいました。手にするだけで、ほのほの心に通う明るさが私をいたく刺戟します。…雑誌総てにみないぎる吸引力は、言葉で言いあらわせない不思議な魅力を、私に与えてくれました。」(三五・七、静岡、森成友)

「…実は最近御誌を初めて手にし、我々の求める処にピタリと来る内容に一驚を喫した処です。私は御誌の持つ使命について若干私の立場から発表させて戴き度いと思って筆を執りました。世上往々にして此の種文献は邪道視され、不徳義呼ばりされますが、私はその様な見方は誤りだと思っています。世

の中にはそれこそ救い難い本質的なアブの人もあるでしょうが、大多數の所謂アブは精神的にも極めてノーマルで只、感覚が多少アブと云われる方面に迄伸びている人々即ち言葉を換えて云えば、精神的肉体的感覚の領域の広い人のことではないでしょうか。私自身、男性として極めて健全な特に精神的領域を持って居ると自覚しています。総ての生活はノーマルに持つことが出来ますし、又、現在ノーマルに持っています。然し他の所謂ノーマルな人に比べて夫れ等が若干サド的であったり、又フェチ的であったりする人があると同様に、自己を診断してみると傾向として多少マゾ的である事を自覚します。骨に滲みる様な冬の寒さに堪えたり、傘も差せない様な暴風の中を歩いたりするのは苦痛であって当然なのですが、私にとっては快感なのです。これは矢張りその様な感覚の発達というより発見ということが前提になると思われます。私が……」(三〇・五、東京、木村冷一)

「…小生は約一年前からの愛読者です。毎度、所謂エロ本の薄っぺらな粗雑さ、やりっぱなしな編集と異り、一貫した学問的裏付けがあり、しかも、興味津々たるエッセイや告白記事、独特の写真等、同類誌に見ない鮮やかな編集振りには……」(二九・一一、兵庫、KE生)

「…小生は教職にあり専門書以外は『改造』『世界』位しか読まず、書店に氾濫する娯楽雑誌は…私どもにはレクリエーション的価値もないのですが、先日当地(長崎)の書店にて偶然御誌を目にとめ、拝見すると一貫性に於て、又狙いて於て十分注目に値すると思いました。風俗誌といっても一つの



「傾向性」について、あらゆる角度から集中的に追求している点がよい所だと思います。同好の人は勿論、必ずしもそうでない人にも他山の石として人生の一部を知る上に有益であり……」（二七・一二、南星）

「……由来私は……その研究と実験を数十年来続けている関係から大いに関心を寄せています。而して各方面から種々の文献を収集して居ますので、毎月来る奇クは一字も余すところなく完全に読破しています。そして私の研究と実験の重要参考資料としています。……」（三二・一、岸木青柳）

「……或いは一時的な企画であって世上に氾濫する煽情雑誌の群と選ぶ所がなくなるのではないかと危惧を抱いていました。が、号を重ねる毎に益々深く追求し、研究され、その異常心理の理解において唯一無二の独得の内容は恐らく戦前戦後を通じて御誌あるのみではないかと思えます。又世上斯くも多くの同一傾向の人達がいる事を知らされ、或る人は外国の文献や古今の書画等により専門的知識、その資料等を集められている事を知ったのは、全く大きな喜びでした。……」（二八・五、大阪、芝札）

「……この悩み、寂寥を慰さめる途、それは、苦悩を共にする方達と手を取り合って慰め合い励まし合うより外はないと存じます。小生は極く平凡……」（二七・八、大阪、小柴智彦）

「……私達は天与の不思議な欲求に忠実であろうと思う。……私達の嗜好は決して人為的な方法によって削減するものではない。……この雑誌は日本語によって考える人々からだけでなく、遠く海外からも協賛の念を伝えられている。細くとも火

を絶やしてはならない。これ以後の世代に私達と同憂の人々が生れて来ないと誰が断定出来るよう。幼時に潜在を始める不思議な萌芽や思春期に他と異った形で發育し、妖しい開花を見せる伝統をもった魂を断ち切る事が出来るであろうか。曾って、私が提唱した様に、特定の時機、特定の場所という原則が守られるならば……単なる悪の華とは考えられないのである。むしろ性愛の方式を第三次元に、その範囲に更に拡大し、性的な愛情の深奥に一步近づくよきすがとさえ思われる。……この雑誌の如く、赤裸々な心と、本能の姿が詳細に述べられる書籍にあつては、その論述は決して煽情的であつてはならない。……この種の出版物を適当且充分に用いることによって、霊薬と化そうではないか。……」（三〇・一一、天泥盛英）

「友人にも両親にも訴えられぬ悩みです。一人毎日悶々として生活して来ました。日常生活の努力も皆、空転の外ありません。自殺しようとも考えました。否その前に自分の性向を……死んだ氣になって努力もしました。……深い自己嫌悪に悩まされ、此の世に生き甲斐もなくなった小生が、生と死の境地を求めつつあつた時、偶然にも『奇ク』を読む機会を得たのです。暗黒の私の心にも一条の光明が見出されました。自分と一緒に欲望が立派な雑誌に、社会に堂々と発表されている。この感激と驚異に思わず御誌を抱きしめて、感謝の涙を流した次第です。私は嬉しさのあまり夜も眠られず、毎日の仕事にも張りが……」（三〇・三、齒車の狂った男）

以上



# 奇ク太平楽



△エロとどきつさ考▽

奇クよ、貴族的なれ

榊

私は今迄読者通信欄なるものは読んだ事がない。読んだ事がないから、投稿した事も勿論ない。八月号の巻頭で、千草忠夫氏の「奇

ク私見」と編集部註とに興味を感じて、既刊号読者通信欄を繰ってみたので、ここに私見を具申したい。

私は昭和廿五年頃からの読者であるが、Sに関して、自分自身相当病膏盲だと思つて

いる。四月号の読者通信に載った小林氏の御意見が問題になっているので、先ずその線から述べてみよう。

第一に表紙であるが、私は以前から、この奇クの表紙が好きである。大正時代のファッションであろうか。カフエー華やかなし頃のノスタルジアにアラベスク模様を感じて、美人の顔の不文律の様な種々の月刊、週刊雑誌の表紙の中で、奇クのそれは一きわ秀逸である。最近一寸変化があったが、出来る事なら、此の表紙構成は従来通りのものを切望する。因に、今迄で一番好きな表紙は、一九五二年の蝶鮫か何かのスキンに包まれた少女のそれである。(ストックの方法に困つてスクラップにしてあるので何月号だったか思い出せない。)

小林氏の文章を追えば、次にモデル云々がある。これは氏の御意見に全く賛成するものである。元来私はSといっても、非常にその幅が狭く、現実的な血とか写真は好まないの、グラビヤ・フォト等は見流す程度だけで、なかには実に泥くさい感じのものがあつて、モデルの人選は重々御考慮ありたいと思ふ。

次に愈々本題のエロについてであるが、六月号の中谷氏、八月号の千草氏と色々その語意等については述べておられるので、私は謂わゆる通俗的な日本語化した意味の「エロ」について奇クを考えてみた。

その前、奇譚クラブは大型であった。エロ本全盛時代のことである。(その奇クが、そのまま現在のものに発展したのかどうか、私の知る処ではないが)当時のそれは、確かに「エロ本」と云われる一般的な意味のものを内容にしていた様に思う。しかし、その後の奇クはエロ雑誌と云われる一連のものとは違ってきている。現在、私の友人関係にしても奇クをエロ雑誌と呼ぶものはいないし、言葉から受ける極く通俗的な含みからも、この言葉は適切でなからう。敢て呼ばせるなれば、「風俗誌」とでも言うのだろうか。勿論私は奇クには「性」(セックス)を感じている。では、「性風俗誌」とでも呼ぶか。だが、この呼び方には、明治時代のニュアンスが漂っている。現在風にいえば「S・Mマガジン」これが一番適切であるようだ。

何はともあれ、私は奇クをエロ雑誌とは思えないことは確かである。

## 二、

編集部に申し上げたい。一度市場調査をされてはどうでしょう。月に何十通となく読者の各々の希望や何かがくる様子。はじめて読者通信欄を読んだが、実に雑多である。なかには私等(私自身Sであるが)が読んでいて、「変態だッ!」と叫びたくなる様な趣味の人がある。お猿の尻笑い<sup>マレー</sup>と云われるかもしれないが、人間、趣味に関してだけは徹底的に我が儘でありたいものだ。

読者の傾向の最大公約数を編集に盛る為にも(特集はとにかくも)マーケティング・リサーチは必要ではなからうか。週刊誌のパズルによくある例の返信用葉書を雑誌に挿入して頂ければいいのだから、S・Mその他の編集部が読者に対して知り度い事項を質問式にして○をつけるのもいいでしょうし、とにかく読者の傾向の統計が出来るだけでも、今後の奇クの発展にプラスすると思う。

## 三、

さて、エロのどぎつさであるが、小林氏は奇クにエロのどぎつさを期待しておられるのだろうか。私は店頭販売の奇クの稀少価値を

云い度い。四月号に編集部の「あとがき」がある。いわく、「この種の雑誌の稀少価値はすでに失われたと言われる」とある。私はこの考えには反対である。奇クには、それにしない独得のものがあるし、又なければならぬ。

それは何か? 奇クは他誌(同類誌)に比較して、その歴史も一等古いし、その内容も一等貴族的である。私が奇クに求めるものはS・Mマガジンの本邦に於ける貴族的存在であってほしいという事である。元来、SもMもその源は貴族である。奇クだけは、その歴史からも一種違った、より程度の高い読物としての、稀少価値をもつべきである。此の趣味の世界は、自由此の上ない本邦の現今、これが続くがぎり今後の発展は遠大である。

その昔、アメリカ西部の大平原をめざして号砲一発、土地の争奪戦に馬車を走らせたフロンティア達と同じである。そして、それは殆んどスタート間もない。奇クはすでに先陣にある。より住みよい、より安定した緑地を早く見つけて建設する事ではなからうか。

私に云わせれば発禁等もつての外である。再度、再度、私は繰りかえし、奇クよ! より貴族的であれ、と声援を送る。



それが奇クに一番ふさわしいし、私もそういう奇クを望むから——。

「どぎつさ」これも語意の見方が色々あるだろうが、私は又これを通俗的に解釈することにして云えば、六月号に中谷氏が述べられた様にS（残念乍ら私はMの事はわからない）には確かに麻薬的要素がある。私のこの世界の独歩も、ずいぶん以前に思える。それは、年々歳々幅を狭め、そして深くなった。一時は殉死してもいいと思った事もあった。ありとあらゆる機関を通じて、文獻書画等をさがして歩いたが結局の処残るのは虚無である。私は現在奇クの文学的要素の高まらん事を切望している。

小林氏は「幸福への招待」を読まれただろうが、謂ゆる一般的な意味のエロス小説である「どぎつさ」の点では、他に類をみない、凡そ、その題名とは似ても似つかぬ内容であるし、勿論、超発禁のシロモノである。おそらくSM関係誌の編集に携わる方の執筆になるものと私は推察しているが、この辺がS小説の「どぎつさ」の決定版であろう。しかし奇ク誌上に、どぎつさが表れては、発禁もさること乍ら、その本質が無残になる事を私は

恐れる。どぎつさは他に求めてないものではない。私は奇クに、それを求めようとはしたくない。

奇クを追っている同趣誌がある。今後も生れるかもしれない。SM文学の探究誌として今一段の独創的進歩を、私は貴族性と云う事で呼びかけるが、共鳴して下さる方があろうか。あれば嬉しい。（余談乍ら価格がキゾク的になるのは、あまり好ましくないデスガ）支離滅裂の太平洋楽を奏するが、私の希望を少し具体化して述べると、グラビヤにピンアップ形式の彩色絵画を一枚ずつ毎号続けてほしいと思う。例えば、アングルの「アンジェリックの習作」、「ドラクロア・クロツス」の歴史画等で十二カ月ぐらいいは続けられると思う。次にフジノカストモ先生の画は奇クにみられない様に思うが、私はこの画伯の絵がとても好きである。金髪の裸女が黄金の翼で大空を飛んでいるのが幻想的である。

ロマンティック・サディズム（こんな言葉があるかどうか知らないが）が奇ク誌にとり入れられたら絶品である。尤も、米国のジョン・ウィーリー画等は相当誌上になったが、これ等はロマンティック・サディズムの本領

だと思ふし、謂わゆる私流の貴族的のそれである。奇クの画については、四馬孝画伯がキヤスティングボードである。今少し幻想的なものが加味されたらメカニズムとあいまっていいと思う。

奇クの誌上、手記随想等の上下にあるカット、これは私の非常に好きなものの一つである。小説に就いては連続の長篇より三カ月ぐらいの中篇小説が好ましく、龍頭蛇尾の長篇小説はいささかマンネリズムの傾向があり、あまりにも大きく広げてしまった為、收拾がつかなくなった様なのは情ない。その点「奇譚三十九夜物語」等のオムニバス形式（小説では何と云うのか知らないが）のものがいいと思う。

#### 四、

愛読者の通信に思うのだが、一体読者の中の何%が、この寄稿をしているだろうか。どなたかの言葉ではないが、「声なき声」の調査の為に、例のマーケティング・リサーチの統計を願ひ度いものだ。確かな統計の上で読者の傾向公約数に合わせて編集して戴き度いと思うのは、私ばかりであろうか。

告白

女装は  
私の  
楽しみです

桃園かおる

告白特集

偏執記録の断層

私は女装がとても好きで楽しくてなりません。鏡に向って女性ホルモンクリームをたっぷり、うりざね顔に溶け込ませ、たんねんに白粉をぬり、ていねいに口紅をつけて、だんだん女になって行くにつれ、胸は喜びに高鳴り瞳には涙が湧いてきて、たとえ様のない桃源境に恍惚として夢見心地になるのです。浮世絵美人のような切れの長い細い瞳、厚ぼったい唇、私は鏡の中に生れた、どのようなきれいな女よりも魅力のある女をじっと見て、それが私自身であることに、倒錯した興奮に酔いしれるのです。

桃色のベンベルグで縫ったレースつきのシュミーズは、妖しい雰囲気をかもし出し、ふくらんだ胸はあえぎます。私は、真白い脚をきちんと揃えて、「私は女だわ、私は女なんだわ」と、鏡に向って目で言うのです。上等の白粉のなまめかしい香りが部屋一杯にこもり、身も心も宙を浮いて現世の苦

しみも悲しみも忘れ去ります。ああ、私は何と幸福なことでしょう。毎夜毎夜が女装の連続。女性ホルモンクリームの大量使用で肌はだんだんきめ細かに白くなり、気分も女らしく優しくなってきたのです。きれいなネグリジェやシュミーズや絹のなまめかしい長襦袢はその日の辛い事も吹き消してくれます。私は、夜だけが女では物足りません。昼も女でありたい。四六時中、いや一生、私は女として暮らしたい。でも、なんと夜の女装の楽しいこととてございましょう。

私は新派の花柳章太郎文を尊敬しています。章太郎文は女の和服をたくさんお持ちでしょう。長襦袢も何枚もお持ちでしょう。当然のことながら、うらやましい限りです。

私は小学校一年頃から女装が好きでした。妹がきれいな着物を着て楽しく遊んでるのがとてもうらやましく、着たいなあ着たいなあ



ほうきで、ちたて、着たい着物を着ればいいのです



とよみち

と、心で願いつづけていました。母の絹の着物を素肌に着てぞろぞろ引きずりながら楽しんだり、押入の中のボロぎれの美しいのを探しだしては楽しんだりして居りました。どき廻りの芝居が毎年一回、必ず巡業にきましたが、私は楽屋をのぞいて、赤い腰巻をはいた男達が化粧台の前でだんだん女になって行き、赤い長襦袢を着、袴を着、帯を締め、かつらを冠って完

全な女になるのを、つばを呑みこみ、わくわくしながら、眺めているのでした。阿呆らしい事とお思っている方も多いでしょうが、此の私には、私を捉えずにはおかない素晴らしいシーンでした。男が女になる！ 皆の見ている前で赤い着物を着、化粧をしている。「いいなあ、役者はいいなあ！」小学生の私は、興行中は毎日こ

うして裏口に廻って楽屋をのぞくのでした。ぬぎ捨てられたなまめかしい着物に私の目は自然と引きつけられたりしました。私の女装への欲望は、天性に加えて、このような機会を得ていよいよ拍車をかけ、強く激しく燃えさかってきました。

正月用のきれいな振袖を妹がつかってもらいましたが、私は皆が留守の時に、飢えた狼の様にダンスの中の振袖に飛びつき、素肌に

まどってひしどだきしめ、鏡に向ってその楽しい表情を確認するのでした。小学校三年頃には、もうこのようにまで発展していたのです。妹のスカートも魅力の一つでした。セーラー服にスカートをはいた女姿に私は酔うのでした。

中学生になると少しは自制心がつきましたので、女装の欲望を或る程度抑圧していましたが、でも潜在意識はくすぶり続けます。学校帰りに書店に寄っても、目につくのは歌

舞伎の本や、和裁の本ばかり、街を通っては、古着屋にぶらさがるなまめかしい長襦袢やシュミーズです。こういうことは恥ずかしいことだ、男らしくないことだと一瞬反省はしてみしても、再び、むらむらと女装したい欲望が燃えさかるのを覚えてくるのです。

やがて一時、父母兄弟と離れて自由になりましたのでさあ大変です。洋品店から肌触りのいい生地

を買い、ピンクの染粉を買って染め上げ、裁縫の古本を買ってスカートや、シュミーズをつくりました。輝くような桃色のスカートは男であって女である私を倒錯の桃境源に誘って恍惚とさせるのです。やがて、古着屋から本絹の長襦袢を買い、絹の妖しい感触に涙を流して女の喜びを楽しむ日が続いたのです。白粉を買う勇氣はまだ無く、メリケン粉をぬって歌舞伎女形のように顔をつくって楽しみました。尾上梅幸丈の美しい女形ぶりに、しばし目を瞠り、「ああ私も女形になりたい、女形になりさえすればああいうきれいな着物が着れるし、かつらもかぶれて完全に女になれる。ああ女形になりたい」と、夜も昼も、それこそ寝ている間も切望するようになりました。

中学生から高校生へと成長するにつれ、女装の欲望は潜在意識としてひそみ、外見はスポーツやって元気を愛する少年へと変って行

きました。高校を終り就職と同時に金銭の自由がきいてきたために潜在意識の女装愛好心は再び燃えてまいりました。書店では、歌舞伎の女形の写真や、和服の色つき写真専門に見て歩く様になりました。そして東京に女装を商売にしている男娼やゲイボーイ等が居るということを知ってからというもの、は、一生懸命になって、それに関する書物を読み漁りました。夢中で読んで行くうちに、ますます女装がしたくなり、街の男娼達をすら羨しいと思う程になったのです。

私は生れつき女性的なのです。小学生時代から、美しい芸者姿に真剣になって憧れました。少年から青年へと育って行くうちに、スポーツによって表面的には男らしくはなりましたが、潜在意識は、只、女装だけでした。間もなく私は上京し、アパート住いの他人をはばからぬ生活をするようになってから、無類の楽しみを再び

始めたのでした。染めるのは面倒です。デパートから一反とか二反の生地を買い、見よう見真似で着物を縫い、女らしさを養成するよう心掛けました。大きい顔をして呉服屋に行き、絹の長襦袢地のいろいろを出させ、一番気に入った模様のを買って、裾を引きずる長襦袢をつくりました。とろける様な色と肌触りは全く別世界に遊んでいる様です。ペンベルグの桃色のを十米程も買い、レースを買って縫うその女らしい楽しさは何とも申し様がありません。口紅も化粧水も平気で買いますが、その減りかたは激しく、夜毎の楽しみにどんどんカラになって行きました。

私は、男が女の着るべき筈の着物を着るのは男らしくないと非難するだろうところの他人には、あなたには、私は私と申し上げます。男の服装が地味で女のが派手で美しいのは社会の習慣で常識です。男は活動的だからズボンが

良い、女はそうでないから着物なぞが良い、これは当然のことです。私は、男だからきれいな着物を着ては気まずいという考え方には反対です。男だって女だって着たい着物を着ればいいのです、常人と異なる行動をする人を好奇の目で見る人達が多過ぎる程、今の人は規格化され統一化されています。言い換えれば個性がありません。私は何の気かねもなしに女装を楽しんでいます。女装はさっぱりとして気持ちのいいものです。きれいでなまめかしくて肌触りがいいのです。私にとっては男物のパツパツはなんともしや気持の悪いものです。パンティは非常にいいのです。和服の場合、腰巻ですと、パツパツとして実に気持ちがいいものです。

本当のことだと思いますが、日本中の男の方々の中で女の和服やその他下着類の美しさ、なまめかしさをきらいだとおっしゃる方々はよもやございますまい。そして



少し女性的な方々は、ああ着てみたいもんだと思っていられるに違いないありません。その証拠にお祭りなんかでは、大の男が長襦袢を着てはしゃぐではありませんか。

ただ勇気がないために、他人がどうか思いはせぬか、などと心配するために、女装することが出来ないのです。女装したくてできず悩んでいる方が数知れないほどいることは断言できると思います。

他人の事を兎や角と噂する島国根性の日本で、異例行為中の第一等の異例行為たる女装を公然とやって居られる花森安治先生や其の他女装を商売になさっていられる方々の勇気たるや、男のくせにと鼻であしらって居りながら、内心女の着物の魅力に捉われている男共の勇気の比ではございません。

服装は自由でございます。着た

い着物を撰べば宜しいのです。男が地味で女が派手、それは昔のことです。男物の種々の着物より女物の方がどれだけセンスの点でも芸術の点でも他を喜ばす点でも秀れているかはかり知れません。ゲイボーイのもつ妖しい美しさ、あの美しさは女にはありません。男の方が女よりきれいなのです。女装したくて出来ず悩んでいられる様な方々は、実にお気の毒だと思

います。私は着物を買うのでもシユミーズやブラジャーを買うのでも平気です。夜は完全な女姿で休みます。昼間はズボンの下には絹でつくったシユミーズをはいています。行き交う女達の誰にも負けないきれいな下着を身につけていることが楽しみや心地良さを倍加させ、一步一步の心地よい肌触りがとても楽しいのです。

軟弱な精神、柔弱な男性であるかも知りません、そうおっしゃりたい方はおっしゃって下さい。私は、女装こそが唯一の楽しみであり、心を安らげる憩いなのです。私は肉体を手術してまで女になりたくはありません。でも私は私の女姿にたまらぬ魅力を感じるのです。今、私は女装専門家として日夜を分け隔てなく過ごすため、研究しています。男姿なんて真平です。色気も何もないズボンなどはくのは真平ごめんです。目もさめる様な長襦袢をあだっばく着こな

し、どんな美しい女にも負けない位に美しく、昼も夜も楽しく暮したいのです。完全な女姿で、男と見破られないように上手に、スリルを味わいながら生きてみたいものです。花柳章太郎文のように早くたくさん着物を持ちたい。絹の下着をたくさん縫いたい。和裁の本もたくさん買い裁縫もできます。ああ、私は、男であって女の生活を望んでいます。女形になり

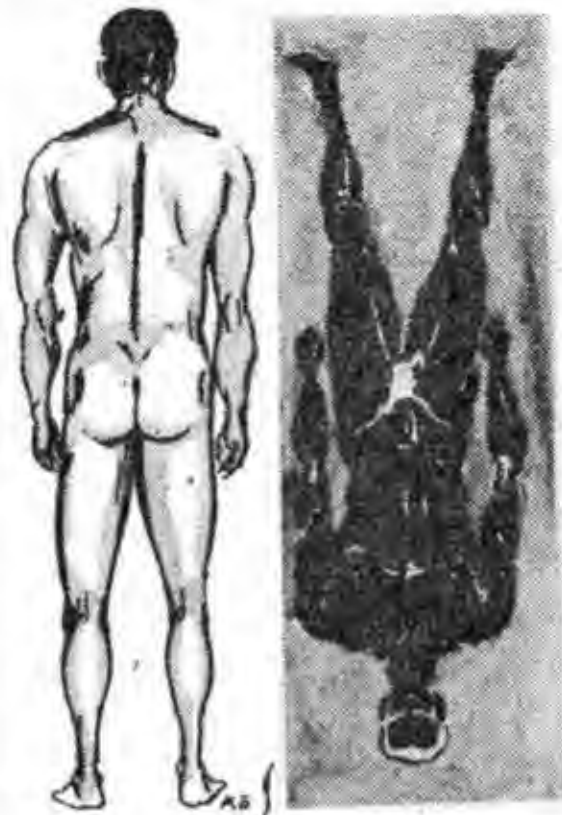
たくて仕方ございませんけど、女形でなくとも、女装してダンスホールでも働けますし、バーのマダムにだってなれます。私は徹底的に女装して、楽しく愉快に生きて居ます。

今は、レースつきのピンクのシユミーズをはいています。もうしばらくすると、長襦袢に着換え、袴を着、かつらをかぶって、買物に出掛けます。

せち辛い世の中で幸福に暮らすには、服装の自由こそ第一です。異常といわれることを敢然と行う勇気が必要です。私は女装愛好者のいろいろの告白や記事を読みました。この文を読まれる方は皆女装に興味ある方でしょう。女装は悪いことでも何でもない筈です。否、それどころか、当人にとってすくなくとも私にとっては、とても役立つことなのです。私はこの幸福をいつまでも持ち続けたいと思います。



《連載小説》



狩 獵 者

(最終回)

佐 度 槐  
新 川 工・画

急 襲

錠のおりている筈の鉄扉が、大きな音をたてて開き、六名の男が第一拷問室へなだれこんできたとき、杉田は、とっさに、警官かと色を失ったが、沈着な山科は、その闖入者が、警察とは無関係な人間たちであることを、一目で見ぬいていた。

「警察じゃありませんよ。グレン隊らしいが、とにかく、応対してみましよう」

司慎之輔の耳に囁いてから、山科は、おちついて前に進んだ。

「お静かに願いたいね。こっちは、いま、とりこみ中なんだ。どこのお身内衆か知らねえが、いきなり踏みこむとは無法だと思わんかね。なにか感違でもしたんなら、早々におひきとり願おう。それとも、遺恨あつてのなく、りこみだと云うんなら、わけを聞こうじゃないか」

「おう、聞かしてやるとも。確かに恨みがあつてしかえしにきたんだ。おう、俺の貌を見忘れたか！」

手にした拳銃を器用にまわすと、ピタリと相手の胸に狙いをつけた葉室五郎は、爆発し

「さては、木島の……」

「フン、やっと判ったか。俺は、木島の舎弟分だった葉室だ。兄哥が殺られたと知ったとき、俺は、必ず復讐してみせると心に誓ったのさ。警察に委せちゃおけねえ。俺は、この手で兄哥同様に殺らさないじゃ気がすまねえんだ。捜したよ。随分捜した。だが、とうとう見つけたんだ。もう生かしちゃおかねえ。」

「そんな怒りを抑えて云った。山科は、もちろん、葉室の貌など憶えてはいなかった。しかし、報復と聞いて思いあたるフシはある。」



覚悟しろ！」

葉室の瞳は、復讐者のもつ、独得の驕慢さと残忍さで、青く底光りを放っている。

「手をあげろ！」

葉室の他に、二人が拳銃を所持していた。

あいにく、慎之輔のピストルは、寝室のサイド・テーブルのひきだしだったし、山科たちが共有しているブローニングも、彼らの居室にあった。当然のことながら、慎之輔は、外部からの襲撃に対しては、まったく無警戒だったのである。

「オイ、身体検査をしろ」

葉室が顎をしゃくると、派手なバルキーセーターやジャンパアのチンピラが、慎之輔たちに寄ろうとする。

「待て！ 俺たちは、誰も武器を持ってはいない」

山科が、叱咤するように云ったが、

「フン、判るもんか。かまわねえ。着ているものを剥いでしまえ。パンツの中まで查べるんだ！」

せせら笑った葉室は、ふたたび命令する。

「疑ぐり深い奴だ。それなら気のすむまで查べたらいいだろう。だが、服を剥ぐにゃおよばねえ。裸には自分でなる」

山科は、悪びれもせず、悠々として、ゆっくり服を脱ぎにかかったが、そうして時間をかせぎながら、事態の収拾について脳をめぐらせていた。

はらわたが煮えくりかえる思いの杉田は、バリバリと歯がみをしたが、銃口の前には、いかんともなし難い。

(クソ！ どうとでもなりやがれ)

杉田は、脱いだものを一つ一つ床に叩きつけて、みるみるうちに裸になった。

標準型の体格で、きわだって発達した部分もないが、全体に均整がとれ、意外に美しい小麦色の皮膚は、若さが薄く脂を浮かせている。

「ホウ、こっちのお兄さんは思いきりがいいね。ところで、そっちはまだですかね」

葉室は、杉田の牀に眼を当てたままで、慎之輔へとも、山科へともなく、催促する。

上衣もワイシャツも脱った山科は、ズボンのベルトに手をかけていたが、依然としてノロノロとした動作だった。

だが、いくら緩慢にしても、脱衣するまでの時間はしれている。

ガッシリとした山科の牀は、壮年の精緻な彫りをみせ、浅黒い肌は、いぶし銀のような

光沢を沈潜させていた。

杉田と山科が裸になると、葉室は、慎之輔にジッと冷たい眼を注いだ。

「オイ、どうしたんだ。親分ともあろうお人が、女学生みてえにモジモジしてちゃあみっともないぜ。スッパリと脱いだらどうだい。それとも、こっちで手を借そうか？」

慎之輔は、無言だった。蒼白な貌は、仮面のように表情がなかったが、よく見れば、瞳の奥に、焦慮と苦悩が、透明な焰をメラメラとたてている。

人眼に裸体を曝すことが、司慎之輔にとって、死に勝る屈辱だとしても、誰がそれを理解できるだろうか。

「兄哥、めんどくせえ。剥いじゃおうか？」

はだけた胸から、白い晒をチラつかせたチンピラが手をだそうとすると、葉室は、

「イヤ、まて、親分にはあとでゆっくりと礼をしてやる。さきにそっちの二人をかたづけよう」

と云って、ニタリとした。

## 惨劇

慎之輔は着衣のまま、山科と杉田は裸で、それぞれに手足を縛すと、葉室は、はじめて、

宙吊りになっている小諸を見あげた。

「兄哥。こいつは、どうするんで——？」

素肌に皮ジャンパーを着た子分が、そばへきて訊くと、葉室は、我しらず見つめていた小諸の裸体から眼を逸らし、

「とにかく、おろしてやれ、いまこいつにかかずらってるひまはねえ。それに邪魔だ」

馴れない操作で緩められたロープは、急激に小諸の躰を落下させ、その衝撃で気絶から覚めた彼は、ふたたび大声で呻きだした。

「うるせえな。助けてやったんじゃねえか。もうビイビイ云うこたアねえだろ」

「痛い！ 肩をやられたんだ。縄、縄をいってくれないか。うう、痛う……た、頼むよ……」

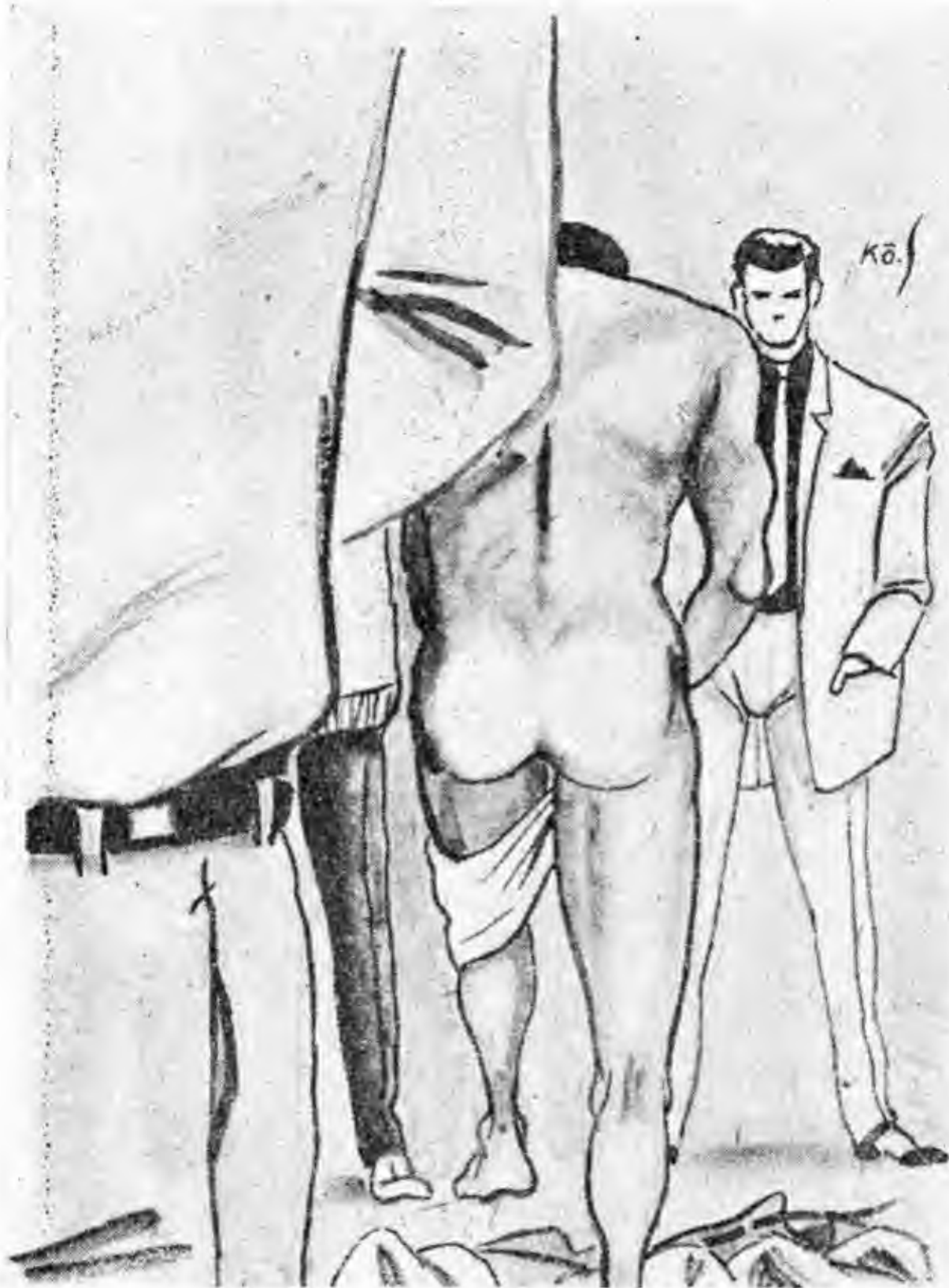
命が助かってみれば、その上の欲がでる。小諸は、疼痛から逃がれようとするよりも、脱臼した肩の手当てをしたかった。明月の試合は無理だとしても、一日も早く恢復してマウンドに立たねばならぬ。しかし、彼の悲痛な懇望も、やくざたちには通じない。一時は小諸の躰に眼をうばわれた葉室でさえ、もう、その存在を忘れていた。「まず、若いほうからだ。吊りあげて打ち据えろ」

葉室の指揮で、杉田は、滑車の下へひきずられてきた。

「助けてくれ！ 俺は、ただ、親分の命令でやっただけだ」

渾身の力でもがきながら、ふと、葉室の後へ隠れるように立っている南をみとめた杉田は、

「南！ 貴様ア、うらぎりやがったなッ」  
歯を剥き、怒りに眼を血走らせて、掴みかかろうとした。





うかつなことだが、慎之輔も山科も、そのときになって、やっと、南だけが除外されているのに気づいた。

「畜生！……」

南の背反は、山科には責任問題でもある。しかも、そのために、いまや危機に瀕しているのだ。

慎之輔には、南の憎むべき行為の裏に潜むなにかを、漠然とながら判る気がした。それだからといって、赦せるものではないが、少くとも、彼の表情を一瞬乱した感情は、怒りというより、悔恨に似たものだった。

慎之輔の抹殺によってのみ、泥沼のような愛の苦悩から脱出できるものと、いちずに思いつめている南は、だが、そのまゝに、最後の欲望を充すことで熱中していた。それは、慎之輔の完き裸身を見ることがだった。見ることは、同時に、犯すことであり、煮つめられた愛の成就にはかならなかった。

南の悲願は、血なまぐさい代償によって、まもなく達せられようとしている。

両腕を吊られ、ぐるりと兇漢にとりかこまれた杉田は、過ぎし日、犠牲者に対して自分がしたと同じように、報復の苛責のまゝに我が身を曝した。

「助けてくれッ！ 助けてくれえ……」

咽喉も裂けんばかりに絶叫する声は、一瞬のまに「ギャーッ」という悲鳴と変る。

やくざたちの得物は、準備室から持ち出した革鞭や櫂の棒、それにベルトなどだった。

棒が肉を打つ鈍い音と、鞭が皮膚を弾く鋭い音が交錯し、それよりも更に高い叫喚が、地下室の澁んだ空気を掻き乱す。

毒々しい絵具を、ところかまわずなすりつけるように、杉田の滑らかな肌には、みるまに傷痕が増えていく。

杉田が、腕を振り、足で床を蹴つてのたうつのも、もう自分の意志ではなく、悲鳴すらも反射的に発しているにすぎなかった。

激烈な苦痛は、脳細胞をバラバラにし、一瞬意識を粉碎するかと思うと、己の絶叫で我にかえり、ふたたび失神しかかると、電撃のような疼痛に呼び覚まされる。

しかし、断続する昏睡に、知覚は次第に麻痺し、ほとんど痛みを感じなくなっていく。

杉田の撲殺死体は、まだ新鮮な筈なのに、すでに腐敗がはじまっているような、不逞な夥しい斑紋に塗りつぶされて、ブランと吊りさがっていた。

葉室は、一人を殺すのに、少々時間をかけ

すぎたことに気がついた。

「次の番だ。早くしろ。あとに大物が残ってるんだ」

山科は、後向きに、壁の鉄環へ両手を固定されて立たされた。

Y字形の裸身は、筋肉の一つ一つが極度の緊張に硬直し、若者のように張りのある臀部がピクピクと痙攣している。

「一べんで死なねえように、二、三発ブチこんでやれ。最後に俺が急所を撃つ」

葉室の声は、山科の脳へ鉄槌の衝撃となつて響いた。

拳銃の安全止めをはずすカチッという微かな音を聞くと、それまで休んでいた悲鳴が、一度に声帯を震動させて噴きだした。

「わあーッ！」と息の続くかぎり吼えては、ダダをこねる小児のように軀を振り、壁に頭や肩を打ちつける。臓器が口腔からとびだしそうな吐き気で、眼が眩んだ。股から脛へなまあたかきものが伝い、足の裏を浸す。

銃声とはほとんど同時に、山科の肩の肉が削げ、コンクリートの壁が砕けた。

至近距離で弾が擦過しただけなのは、恐怖心を増大させるため、ワザと狙いはずしたものだ。

ふたたび同じ拳銃が火を吐き、盛りあがって顫えている大腿部の筋肉が弾けた。

肩の傷口から滴る鮮血は、波うつ背中一面を染め、脚の銃創からも、粗生した脛毛を縫って血が糸をひく。

次の男が右手をあげ、脂汗に光る臀を狙った。

恐怖に慄える大臀筋にめりこんだ弾は、勢いあまって前部まで貫通したらしく、搾りだす苦痛の呻きとともに、血の混った粘液が飛び散った。

もはや、脚で上体を支えることのできなくなった山科は、手首を繋がれた鉄環によって吊られているようなものだった。

葉室が、ゆっくりと標的に向かった。

自動拳銃が続けざまに鳴りわたり、山科は瞬時に静止した。

### 狩獵の果て

パトカーについて黒塗りのシボレーが、司令部の門前に停車すると、制服、私服の警官が機敏な動作で降りたち、吸いこまれるように植込みの中へ消えた。

私服刑事は警視庁捜査四課の課員たちだ。

「大熊組」の幹部を首謀者とする数名のやく

ざが、なぐりこみをかけるといふ情報をえて出動となったものである。

一番あとからシボレーを降りた背の高い刑事は、特別に同行した一課の速水錬太郎だった。

「大熊組」と聞いたとき、速水刑事は、すぐに木島鉄次を憶いだした。連続殺人事件の第一の犠牲者木島は、生前「大熊組」の幹部だった。やくざの社会には、およそ時代錯誤な仇討ち感覚が生きていて、そのためのきつたはったは珍しくない。木島の恩顧をうけた人間が、木島殺害の犯人を知ったとしたら、報復の挙にでることは容易に想像できる。

速水は、あまりに虫のいい筋書きに苦笑したが、捜査の難航しているいまは、藁をも掴みたい気持ちになった。

根拠も確信もなく行動している自分に気がさしてか、速水刑事は、独りで庭前に佇んだままだった。

速水刑事は、不意に地面へ身を伏せた。前方十メートルとは離れていない低い植込みの陰から、忽然として男の姿が現れたのである。

怪しい男は、いったん門のほうへ歩きかけたが、急に踵をかえすと、蝙蝠のように建物

に近寄り、アツと思うまに、窓を乗り越えて室内にすべりこんだ。

息を殺して、そこまで見とどけた速水は、すかさず男の入った窓へ寄ろうとして、制服警官に肩を叩かれた。

「速水さん。こっちへ男が逃げてきませんでしたか？」

「逃げてきたのか、あの男……」

「見たんですね!」

若い巡査は、目撃しながら追いもしない速水の迂闊さを詰るように、声を陰しくした。

「やくざの一味か、逃げたのは」

「やくざは全員逮捕しました。あの男は、もつと大物ですよ」

「大物？」

「連続殺人事件の犯人です」

「なんだって! じゃ、やっぱり」

「あなたの感は当たっていたんですよ」

「そうか!」

「どっちへいったんです? 追いましょ」

「イヤ、待て」

「……?」

「その男なら、家の中だ」

「え?」

「俺の眼で見たんだ。まちがいない」



「そうですか！」

氣負った巡査が駆けだそうすると、

「待て」

と速水は、ふたたびとどめて、

「俺がいく」

「独りでですか？」

「ああ」

「しかし——」

「大丈夫だ。万一のときには警笛で合図する」

「はア」

巡査は不服そうに頷いた。

「あの窓の下に待機していてくれ。俺は玄関からまわる」

司慎之輔は、慌しくシャワーを浴びると、脱衣室の鏡のまえで、己の裸身にジッと見入った。壁一杯にはめこまれた鏡の中には、大理石を彫ったような、冷たく蒼い青年の裸像があった。

そこには、明らかに、もう一人の慎之輔がいたのである。

死の決意に、やや色褪せた、珊瑚色の唇を静かに離すと、慎之輔は、頼える手に青銅の花瓶をとって、熱い息に曇った鏡を、

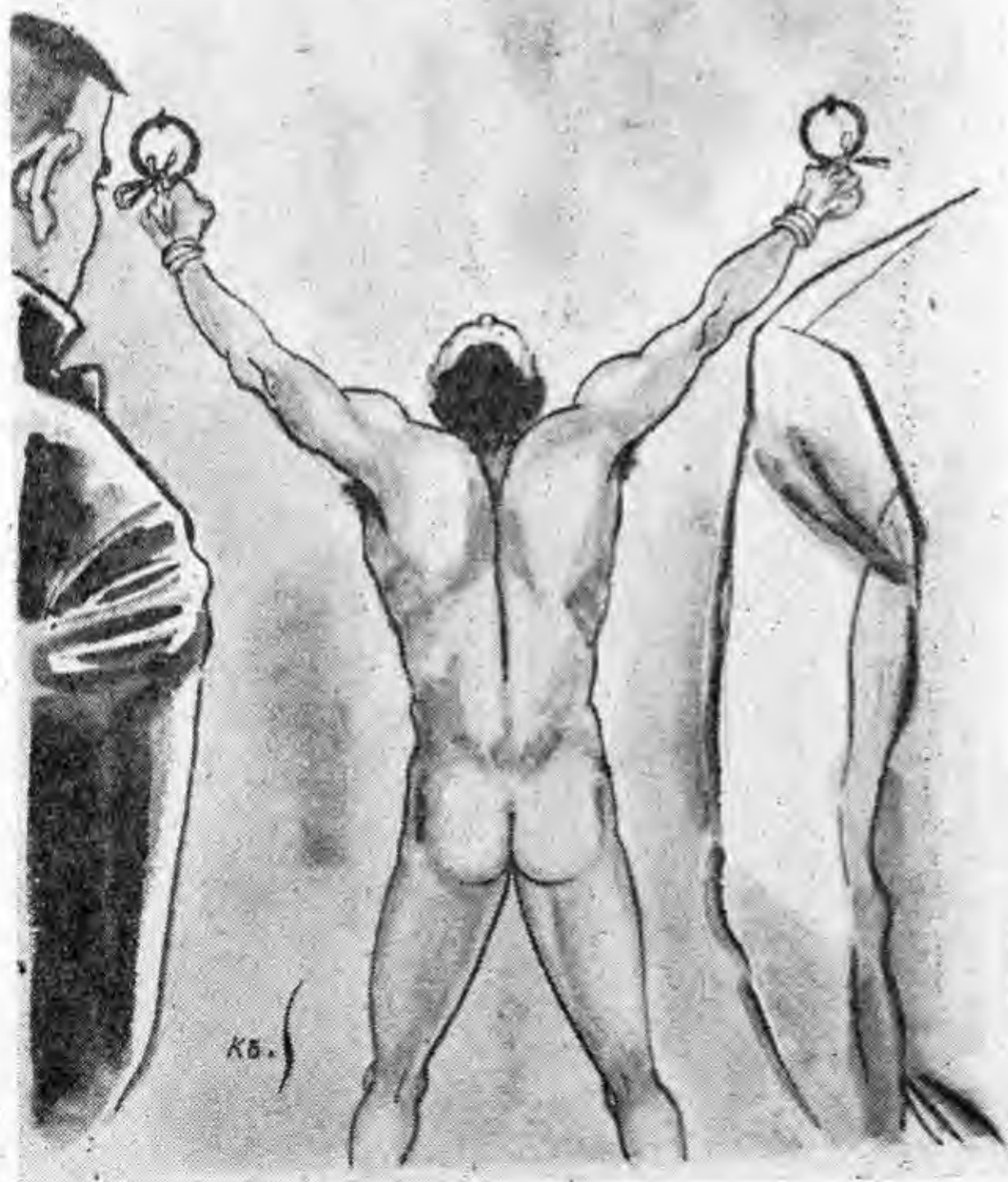
みじんに打ち砕いた。

慎之輔は、素肌に絹のガウンを纏い、寝室にもどると、水差しの水をコップに注いだ。

そして、白いきららのような粉末が彼の口に移されたとき、激しく扉が引開けられた。

慎之輔の貌を一眼見ると、速水刑事は、我にもなく立ち竦んだ。

（この男が、稀代の悪魔なのか……！）  
速水は当感したように眼をしばたいた



が、すぐに職業意識をとりもどすと、

「警視庁の速水だ」

とのふとい声で云った。

慎之輔は、無言でベッドから立ちあがったが、速水のほうへ歩いてこようとして、そのまま倒れかかった。

「毒を飲んだなッ！」

狼狽した速水刑事は、危うく慎之輔の肘を支えると、抱えるようにしてベッドに運び、警笛を唇に当てた。

窓から、さっきの若い警官がおどりこんできた。

「おい、救急車だ！」

「は？」

「自殺をはかった。殺しちゃまずい。早く手配しろ」

「はいッ」

警官がとびだしていくと、速水は腕を組み陰鬱な表情で慎之輔を見おろした。

「水、水を……」

断末魔の手が、宙をまさぐる。

「オイ、しっかりしろ！」

水をあたえると、速水は、慎之輔の肩を揺すった。

慎之輔は、虚ろな瞳で速水の貌を捜すと、

「も、もう少し早く……あんたを発見してい

たら……あんたを……それだけが、心残りだ……」

諭言のように呟いたが、それは、もう、速水の耳には聞きとれなかった。

（死んだ！……）

速水刑事は、ソツとベッドから身をひき、ガウンの乱れをなおしてやった。

ドヤドヤと四課の刑事たちが入ってきた。

「自殺したって？」

「ウム……」

速水刑事は、顔をそむけるようにして窓のそばへいくと、背中を見せて佇んだ。

（完）

告白特集  
偏執記録の断層

国

司

私は本誌の「告白体験」を読ま  
していただいて、私と同じように  
赤い腰巻に熱愛を捧げている方々  
のあることを知り、非常に心強く  
も思い、また告白談をよせられた  
方々を懐かしくも思います。私も  
一度書きたいと思いながらも、と

ところどころ諸兄の告白とそっくり  
のところもありますので書きにく  
く、づい書きそびれていました  
が、私も諸兄に劣らず赤いお腰を  
愛好しており、諸兄の告白に啓発  
され、ただ読ませていただくだけ  
で、名のりをあげないのは卑怯な  
ような気が致しますので、勇気を  
ふるって書くことにしました。

赤いお腰に迷わぬものは、木仏  
金仏石仏、とか、亭主の好きな赤  
お腰、とかいう文句が雑誌などに  
のっていると、私は何回でもそこ  
のところを繰り返し読みます。私  
は赤い腰巻をひとときも傍から手  
離せないほど好きです。現在は妻  
がありますので、妻の赤いお腰を  
いつも自分の腰に巻いておりま  
す。だから赤いお腰はいつも妻と  
共有で、冬はネルのお腰を袴下の  
下に、春夏はズボンの下へ、袴下  
をやめて赤いナイロンまたは絹モ



## 天 腰 お

純 谷 桃

## 《 告 白 》

スのお腰を巻いております。お腰を巻いたら、とても袴下など、きゅうくつではけません。さらっとしたお腰の感触のよさは、とても他の下着では味うことが出来ません。

時々気分転換のために桃色や花模様のお腰にかえますが、なんといってもまっ赤なお腰が一番好きです。この人生に、まっ赤なお

腰ほど美しく、魅力的なものがほかにあるでしょうか。私はもう、あのまっ赤に燃えたつようなお腰を見ると、なんともいえぬ情感におそわれ、うっとりとしてしまいます。赤いお腰と白い肌と黒々とした髪。この三位一体の至全美！至聖美！ああ思い出すだけでも私の体はせんりつし、私の身も魂もとけていきます。どんな美人だって、赤いお腰をしていなかったらその美人のねうちは半減してしまふし、平凡な顔かたちの女性でも赤いお腰をしていると、私には天女のように美しく見えるのです。

我夢中になったものでした。夏の夜の青蚊帳に赤いお腰のとりあわせも、また極度の情感をさそいます。あるとき、女が雪のような純白な肌にまっ赤なお腰一枚をまとうて青蚊帳に入ってゆく天女のような姿に幻惑されて、この世ならぬ美の極致に陶醉したことを忘れることが出来ません。私は馴じみの女から赤いお腰をもらってきて、それを巻いたり、束ねて接吻したりして、やすらかな夢路をたどるのが常でした。ところが、簞笥の抽出にしまいこんだのが七、八枚たまり、捨てるも惜しいし、妻をもらってからも始末にこまり、そのままにしておいたのが、第二次大戦で応召した留守に発見されて、復員後思わぬ赤面をしたことがありました。これも忘れぬお腰の想い出です。

私が六つか七つの頃、一度嫁入りした叔母が戻ってきて一緒の家に暮らしていたことがありました。が、夏の夜などいつも赤いメリンスのお腰一枚でねるのです。叔母は非常に私を可愛がってくれていて、ときどき寝かしつけてくれましたが、子供心にも赤いお腰の美くしさに魂をうばわれたものでした。あるとき叔母は、純ちゃんねぞうが悪くてすぐおなかを出すから、これを巻いてねるといい、と赤いメリンスのお腰を巻いてくれました。いまから三十数年前のことです。足まですっぽりとつつんだ、燃えたつようなまっ赤なお腰。私は、はずかしいような嬉しいような気持でしたが、いまでもときどきそのときの気持を思い出しては、懐かしい追憶に全身がうずくのです。いまでも長いめのお腰が好きで、着物の裾に少しはみ出るくらいが、美しいと思います。だから私は、ねまきを短かくして、お腰の上の白いさらしを一パイの広い巾にし、足のつま先きがかくれるくらいなのを巻いてねます。

話を前に戻して、その当時、私

の叔父のKが田舎からお嫁さんを貰って、二カ月くらいで氣にいらぬと離縁しましたが、その嫁さんが裾をまくって赤いお腰を出して歩いてゆくを見て（以前には町の通りや、田舎道などを女性が裾をからげて赤いお腰を出して歩くのを見かけました）、その頃、私は赤いお腰をしている女の人が一番親切でよい人だと信じていましたから、どうして離縁したのだろうと不思議でなりませんでした。夜ねてからもその赤いお腰を出して歩く姿が目について、その嫁さんの足にすがりつき、泣き叫びたいような衝動にかられて、なかなかねつかれないことがありました。

私の家の隣がお茶屋で、若い女中が裾をからげて掃除をしたり、洗濯をしているのを見たり、また物干竿に二、三枚ずつはしてある、赤、桃、花模様などのお腰の美しさに幻惑されて、どのお腰がどの女中の巻いたものだろうなどと考

えるのも、楽しい空想でした。また十五、六才の頃（これは二十才頃までつづきましたが）近くに製糸工場があり、その側を自転車で通ると塀の中に色とりどりののはでやかなお腰が、他の洗濯ものと一緒にな数枚はしてあるのが見えるのです。私はそこを通るときには、ベタルの足に力を入れ、腰を浮かせてのぞいたものです。そこは、美しいお腰の花盛りで、私の魂をうばい、心の奥底までゆり動かすほどの美観であり、壮観でありました。私はその製糸工場の側を通るのが、その頃の唯一の楽しみでした。ところが毎年お盆の三日くらい前になると、その物干場につづく広場で、女工達が夜になると盆踊りを踊り、一般人に自由に観覧させてくれるのです。常日頃は塀の外から眺めるだけのお腰を、そのときこそ自由に手に触れ、女工さんの肌の移り香を心ゆくまでかぐことが出来るのです。お腰マニアである私にとってこんな絶

好のチャンスはありません。女工さんは朝は暗いうちから仕事をしますが、仕事の終るのは午後五時過ぎか六時過ぎですから、それから洗濯をする人が多く、夜ほしのお腰が夜桜のように美しく並びます。私にとってはお腰の陳列場は夢の花園です。外の人々は盆踊りに夢中で、私はだれにも見とがめられずに、お腰のほしてある中を、匂いをかきながらあちこちすることが出来ました。まだ半乾きのしめっぽいお腰が顔や、頭や、首すじにベタベタとふれる。その感触のなんともいえない、ぞくぞくとするような嬉しさ。抱きしめたり、口にくわえたり。お腰天国とは、あのときのことでしょう。いまはもうその製糸工場もなくなってしまうましたが、たとえばあったとしても、もうお腰の展示会は見られないでしょう。いまならズロースやパンティという、味もそっけもないものになってしまったことでしょうから。

その頃は、女工さんの盆踊りを見ているだけでも、赤いお腰を充分に目でたんのうすることが出来ました。女工さんはきそって、まっ赤なお腰や、はでな模様のお腰を裾をからげて見せながら踊ったものですから。又、以前は畑や田圃でお百姓の娘さんが、着物の裾をからげて赤いお腰を出して野良仕事をするのを見かけたものでしたが、この頃はまったく見かけません。若い娘盛りを赤いお腰にもなじまず、洋装だってんばりでドライになってしまふのは、時代の風潮とはいえ嘆かわしいことです。いまでも、ほんのときたま洗濯をする奥さんや、旅館などの女中さんが掃除するとき、お腰を出しているのを見かけることがありますが、ほんとうにとびつきたいほど、懐かしく思います。

私の里の家の前にいまでも魚屋があります。私が十八九の頃、魚屋に十七八の娘がありました。ある日、私が遊びにゆくとその娘



は、ちやうど家の裏で洗濯の最中  
です。ところがすぐ傍の縁の上に

ネルの赤いお腰がくるくると巻い  
ておいてありました。私はハッと

胸をつかれたように、そのお腰に  
目が吸いついてゆきます。しばらく



く娘と話をしていると、店の方か  
らお客の声がして、娘はとんでゆ  
きました。私はそのお腰をふとこ  
ろの中にねじこみ、大急ぎで家へ  
帰り、早速二階の自分の部屋にあ  
がると、お腰をとり出し、接吻し  
たり抱きしめたり臭いをかいだり  
してから、またもとの縁の上にか  
えしておいたこともありました。  
又、農家の軒に赤いお腰がはして  
あるのをみつけ、ちやうど路の側  
でもあり、私はそのお腰の燃えた  
つ赤に魅せられて、直ぐ近くまで  
いってじっと眺めているうちに、  
思わず手にとって抱きしめ、接吻  
してしまいました。が、あたり一面  
麦畑で、人の見る心配はありません  
でした。しかし、そんな好条件  
のときばかりがあるわけではあり  
ませんから、アパートの窓や、高  
い物干台に、まっ赤なお腰が太陽  
の光線を受けて、壮麗なまでに美  
しく、きらびやかにひるがえって  
いるのを見ると、私はそのお腰を  
自分の自由に出来ないもどかしさ

に泣きたくなってきました。私のせつない慕情を、お腰の持主の若い嫁さんにうったえて、新らしいものの値段でわけて下さいとたのんでみようと思案に考えることもありますが、そこまではなんともはづかしく、ただ思うだけでいえませんでした。

最近よく雑誌の口絵などに、グラマー写真というのか、女性のズロースやパンティー一枚などの全裸に近い肉体美の写真を見ますが、

この種類の写真には私はなんの感興も起りません。裾から赤いお腰がチラリと見えたり、まっ赤なお腰一枚で、お腰と肉体との調和した美しさになんともいえぬ魅力を感じます。これは実際の場合にもその通りで、風呂場などでチラリと見た女性がまっ赤なお腰一枚の姿や、道ゆく女性の裾からこぼれる赤い蹴出しなど、たまらなく私の気持を惹きつけます。風の吹く日、道ゆく女性の裾がまわって赤いお腰が見えようものなら、私は

どこまでも、その女性についてゆきます。そして風が吹いて、サッと裾がまわれる度に胸をときめかし、風よ吹け！ もう一度あの裾をサッとまわってくれ、となんどでも、なんどでも裾のまわれるのを願ってついてゆくのです。私は魂を奪われた夢遊病者のように、その女性の前になり後になりしてついてゆきますが、別れるときの辛さは格別です。

また、雨降りなどに裾をからげて、赤いお腰をまるきり出して歩いている女性を見たときなど、喜びにふるえ、なめたいようなそのあざやかな紅の色に魅惑されてしまいます。いまでは洋装が多く、あまり見かけ得ないのが何よりも残念です。

私の青少年時代には、ほとんど女性は和服ばかりでしたから、雨降りなどはもう裾をからげた女性の赤や桃色や花模様のお腰がみごとに咲く街の花のようにふんだんに見られたのに。私はこの地上か

らテレビもラジオも、自動車も、飛行機も、その姿を消してしまってもよいから、もう一度女性が和服ばかりになって、雨の降る日の街頭に、裾をからげた女性たちの色とりどりのはお腰を出して歩く光景がながめたい。そして物干場という物干場には、まっ赤、花模様、桃色などのお腰の洗濯ものがならんでひるがえる光景が見たいと心から希います。

第二次世界大戦前から戦中にかけて、単服を着て赤いお腰をしている人妻や娘がちよいちよいあったので、単服の裾からはみ出してちらつく赤いお腰の色にどれだけ私は楽しく悩ましく思ったかしれません。あの頃の銭湯屋の正子さんや、うどん屋の俊子さんなど、みな十七八の頃は単服の下から赤いお腰をちらつかせて、私をもややさせたものですが、いま頃はもう、いいお母さんになっていることでしょう。

私は今では「お腰遍歴」と名づ

けて、休日にはお腰の乾してあるのをたづねてまわります。「お腰遍歴」の楽しみにくらぶればとてもパチンコや、麻雀や、野球なども馬鹿らしくする気にも観る気にもなれません。見知らぬ町から町村から村をたずねて、まっ赤なお腰のほしてあるのにめぐりあったときの歓喜。とても筆や言葉にはあらわせません。先日のお腰の折に、あるアパートの前の物干場の高いところにひらめく赤いお腰を発見しました。それが西日を受けて輝くばかりに美しく、だらりと白い縁からたれた二本の紐が悩ましく、私を招いているように思えて、じっとみているうちに、知らず知らずのうちに紐のはしをつかんでひっぱってしまいました。洗濯バサミでとめてあるので二度三度ひっぱっても落ちてはきませんが、夢中になって息をはずませてひっぱっているうちに、まっ赤なかたまりとなってサッと足下へ落ちてきました。私は命がけで愛し



ている恋人に久し振りで逢った想いで抱きしめました。そのとき、背後のアパートの二階から「おい、なにしとる」とどなる声がしました。ハッとして後を見あげると、四十前後の男が、窓からこちらを見下しています。私はびっくりしてお腰をその場へ投げ捨てるをかけ出しました。そのときの辛さは命がけで愛している恋人との抱擁を突然つきはなされたような辛さでした。いまでもそのアパートには時々赤いお腰が高くひるがえっているのを見かけますが、いまでは遠くの方から眺めるだけで、せつない思いをしております。

赤い色が鮮明で、白い縁が純白な紐つきのお腰には身も世もあらず私は夢中になってしまします。以前には白い縁が紐のかわりに長くなっているのに一番心ひかれましたが、お腰のだいご味はやっぱり紐で結ぶところにあり、ほしてあっても紐がだらりとさがっているところに一層愛着を感じます。白い縁のないお腰もありますが、とにかく、ただ単なる赤い布が紐をつけることによって、地下から天上にかけのぼるほどの変化を起し、私の魂をうばうお腰にかわるのですから妙です。

女性が和服で自転車にのっているとき着物の裾からチラチラと見えるお腰の味もたまらぬ魅力で、じっと真向いに見ていると、ハッと気がついて手でおさえる若い嫁さんなどのしぐさは、なまめかしきも、ほほえましい情景です。私は特別に女装こそしませんが、赤いお腰を巻いたまま徒歩で外出したり、自転車にのったりして、こぼれ出るお腰の赤をおさえてかく

そうとしながらも、チラリとこぼれる紅の色に胸をときめかすスリルも、なんともいえない楽しさでやめられません。とかく人生は色気でもつ、その色気とは赤いお腰のことではありませんか。

ここで私のお腰の採点簿を、お目にかけましょう。まっ赤なお腰が百点、赤い花模様が九〇点、濃桃色が八〇点、淡紅色が六〇点、しま柄のもので赤い色彩の目立つもの六〇点、柄物、無地をとわず赤い色彩の目立たないもの三〇点です。私はお腰遍歴の統計を、この採点基準によってとり、記帳して楽しんでおります。しかし、一年間を通じて最高点は桃色または淡紅色で、ピンク系のお腰が一番多く、ピンク系のお腰七枚または八枚をみる間に、まっ赤なお腰は一枚みるくらいですが、それだけにまっ赤なお腰のひらめくのをみる欲喜は例えようありません。

お腰をまくのは娘さんに少く、お嫁さんになってからがほとんどで、若奥さんに赤いお腰が多く、

中年の奥さんがピンク系で、年輩になるほどお腰をしています。ピンク系のお腰ですと五十くらいの女性でもまいてありますが、私の知っているおばあさんは六十くらいですが、まだ肌に艶もあり、淡紅色のお腰一枚の湯上り姿を見ましたが、どうしてなかなかいいものでした。これが茶系統のお腰や、ズロースでもはいていたなら、ぞっとして見る気もしなかったでしょう。腰巻の色彩によっていかに女性が若返り、チャアミングになるかは、おそらく私ひとりの感覚だけのことではないと思うのです。

毎月赤いお腰や花模様のお腰を一枚か、二枚ずつ買いためて（出来あがったものや、家で妻に調製させるもの）お腰のふえてゆくのがなにより楽しみで、部屋のところどころに紐を通してお腰を何枚かひろげてかけ、きらびやかなお腰天国の部屋で暮すのは、尽きぬ悦楽を生み、人生の希望を生じます。



## スナップ対談

## 映画『用心棒』の緊縛を買う……

牧 高 志



男に代って女が女を折檻する雰囲気には  
独特なものがあるという立証

「先ず文句なしに日本映画の最高水準  
を行く作品だと思うんだ。これを高が  
娯楽映画じゃないかと見くびつて観  
て、とても足元へも寄れない傑作だと  
感心するうちはまだ良心が交っている  
とみて差支えないが、萬事綺麗ごとで  
お茶を濁し、いい加減なアクションを  
してミスターハー族の人気をかき集めて  
いた群小のアクター・アクトレス、そ  
れにまた拍車をかけるように乱作を繰  
り返えして、これでも監督サマだと自  
負していた人種はこれ際よろしく反省  
すべきだね。——事程左様に映画「用  
心棒」は豪放にして且、映画の面白ろ  
さを充分計算に入れての企画が見事に  
当たったものと見ていいだろう」

「僕は、女郎屋の女主人公になって女郎を虫  
ケラのように扱った山田五十鈴と、美貌の人  
妻ぬいを演ずる司葉子の登場を高く評価した  
い。昔から女郎屋……否、吉原の界限では人  
の情な（なまけ）ンてものは一切罷通らぬと云われたそ  
うだ。生きた女の身体を全く自由気儘な商品  
にして、助平根生を起した男達から遊金を捲  
きあげる。女は商品だから仕入れの元値を回  
収してええ、後は火事になろうと洪水で押  
し流されそうと蔵の中へ押込み、皆殺ろしに  
したって文句は云えないんだ。こうした主人  
公に山田五十鈴のおりんはうってつけであ  
り、心理的にもそのあたりが判るような気も  
するが……」

「人身御供となる司葉子のぬいを曳きずり出  
して……頭の毛を持ってこずき廻わす最初の



場面と、白昼太い縄で三巻縛りあげられ、藤原釜足の題目名主の絹問屋の多左衛門から縄尻を取られてうなだれて、しょんぼり立った姿は何んともたえのない素晴らしいシーンだったと思うんだ。他誌を引用するのもどうかと思うが、その間の事情を書き記した司葉子の執筆文が目についたので、紹介して置きたい。」

……黒沢明先生の「用心棒」に出演しろという話が来ました。ぬいという娘役（註・確か人妻の誤りだと思うが）で山田五十鈴さんに縛られてギューギュー折檻される場面です。私は有無をいわせず拉致された形でオーブンセットに出かけました。すると加東大介、三船敏郎、仲代達矢その他の錚々たるお歴々が流石に黒沢組の出演とあって緊張した面持でズラリといかめしく勢揃いしているではありませんか。私はおそろおそろテストのつもりで、やってみました。山田五十鈴さんが、いきなり私の髪の毛をわしづかみにして後ろからグイグイ二十回くらい、手加減もなくこづき廻すのですが何んとその痛いこと……。おまけに山田さんは一寸足をくじいていられたので体重を一方の足先にかけてぐいっと締めつけるように引き寄せるのですから

堪ったものではありません。私は半ば本当に泣きべそをかきそうになりましたが、流石に大女優ともなれば遠慮会釈もなくやる点が偉いものだ、と思い直してこらえました。そうしたら、何んとそのシーンはワンカットでOKということになったではありませんか。黒沢先生から一度でOKを頂くなんて……。それに「葉子ちゃん、よくやった、よくやった」と皆さんではめて下さるので照れるより先にジーンと臉が熱くなつてきて、本当に涙ぐんで了いました。でも、いい勉強をさせて頂き、私としては今後何事によらず進んで困難な役におつかり……。云々。（婦人公論、昭和

和三十六年六月号、五十七頁より）

「つまりこの分で行くと、たとえ吊責めであろうと、火責めであろうと、立派にやり遂げてフアンの皆様のご期待に添いたいという覚悟の一端を披歴したと見るのは早計かな？」  
「三船が登場するたびに砂混りのカラッ風が吹くのは浪人風の破れ袴と至極対照的だが、何か黒沢監督の作品となると不思議と無演技な俳優が、まるで旱天に慈雨の如く生き生きとして来るから妙だ。用心棒となる三船の気を曳くため女郎達が裾を捲くって、総天然色映画なら恐らく緋縮緬の蹴出しを大いにチラツカせたであろう処の御本尊女郎の顔付は、



あらくれ男達のまん中に立たされた司葉子のぬいは、さながら雨に濡れた海棠のように一際光っていた。

動かねえなら力ずくでも引っぱって行くぞ、といわ  
んばかりの暴力のさばる無法地帯



一人を除いては、そろいもそろって田舎女の作りであり、また媚びた姿態からは売春婦特有の下司ばった匂いまで嗅がれようとするあたりは作品の余徳だね」

「処で……、女優を本式に後手に縛って演技をさせることは、古来、余程ムツカしいと見えて、大抵の映画はお座なりに誤魔化しをやるとするもんだが、ここでは司葉子のぬいの

腕を背中であから吊るように、着物の上からかなりきつ目に縄をよじって縛り上げ、あッおっかあアだッ……と叫ぶ、子供の声に曳かれて格子に走り寄る斜め後姿で、……このシーンを上映館でスナップしようとするには余程のタイミングが合わないと思われ失敗する。楽屋話をするようだが、十数回シャッターを切った一枚というほろ苦さ。……

：確かに手首の処が縛られている。高い封切料を湯水のように費消するのもこれあるかなであろうが、思えば馬鹿な男さ」

「馬鹿な男だと云えば、何処か抜けたようなフェースで黙々と力演した藤原釜足に手渡しした司葉子の縄尻が必要以上に長く、しかも牛に曳かれて善光寺詣りでもするかのように曳かれる、あの息詰るシーンは一寸解せないと思っていいたら、果たせるかな、これまた何枚かシャッターを切ったスナップの中から腰縄が現われて来たのだ。要するにぬいを後手に縛った三巻の縄とは無関係に、もう一つ別の縄が、つまり女を牛や馬の如く曳いて行く縄が腰に巻いてあったという次第が明るみに出たっていう訳なのさ」

「判つきり出し出しちゃ残酷にもなるが、こんな処にも黒沢作品のリアリズムがあって、無条件に飛びつきたくなる」

「僕はこの映画が成功した一因は、望遠レンズを駆使したことにあると思う。もう一つには色彩映画を蹴って、敢て黒白にした点が観客の気持を統一したことも動かせぬ事実だろう。対談話で徒らにほめちぎったって始まらないが、どうも縛られた女の哀れさを出すには黒白が一番びったりしているような気がし



てならないんだ。仮りに用心棒が総天然色だったとすると、縛りあげた橙黄色の縄目が、余程配色に気をくばらない限り着物の中に融けこんで不鮮明となるし、また腰から下の色気と一緒に一石二鳥を狙ったら、排縮緬の下着の方に眩惑されて肝心かなめな縄の迫力がガタ落ちとなる……なんてことは、識つていて損はないだろう」

「まあそんな現代知識もさることながら、如何に政治の腐敗とは云え博徒の温床と化した関八州の宿場の一つである馬目の宿で、艶めかしくも血祭りにあげられようとした女が司葉子のぬい一人であったというのは、いささか淋しい限りだ。続「用心棒」を是非ともシナリオ化する為には、十数人の女のセリ市位いなところを考えて然る可きではないか……」

「では、劇的效果をより多く挙げるにはどうするか……問題はその内容だね」

「つまり、こうなんだ……。早い話が、例の短気ですぐ腹を立てる居酒屋権爺が喜ぶような仕組み。勿論、風来坊の用心棒だけがめしを食うようじゃ店は上ったりだが、今度は一種の集会所みたいに商売は繁昌している。おまけに女のセリ市とあって、他国者の出入り売る奴、買う奴、間で口銭を稼ぐ奴共が、不

用意にもらすひそひそ談も結構耳にはさんで、思わぬ大金が転がり込むこともあるというこの居酒屋はどうしても必要だが、その隣が衣裳屋だ。女を買った奴は色々な意味合いからそれらしい着物を着せるハメにおちいるだろう。女のセリ市は今の言葉で云うなら或る種のファッションショウと見て差支えないから、売り値を上げるためには馬子にも衣裳だ。この情景は別の観点から色気たっぷりな描写するのも一興だらう。衣裳屋の隣が雲助の群っている道中駕籠屋で、居酒屋の隣が御存知早桶屋はびったりで面白いが、ただ名物の女郎屋は……」

「そんな話より表題の緊縛の方を忘れちや困るぜ。続「用心棒」と緊縛ということになろうが……」

「まず劇の構成で名乗りを挙げていないと由来縛られた女は出にくくなる。で……その女郎屋なんだが、親分の貫禄上からも、また役人の目をゴマカス点からも、私有財産的であり、やっぱり親分の直営するものでなければなるまい。ただ、菊島隆三、黒沢共同のシナ

リオの如く、一方の親分が女郎屋を経営して他方の親分が命知らずの野郎ばかりを抱えているのは如何にもアンバランスだから、仲よく相提携し、女郎屋を開業していることにする。この女郎屋の存在は、取りも直おさず売れ損んじてお茶を引いた女共を二束三文で買い取る方便でもあるのだ。どうだろう、これ位のお膳立て、続「用心棒」は動き出さなかな……」

「この続篇映画も面白く観賞して貰うために



引廻し用の腰縄が帯のまん中あたりでみつかったというシーン

は今回も物語りの筋を一切伏せて置くことだろうナ。ただ、下手をするとお互に女郎屋の跡目相続をめぐる二人の親分が対立するだけでは、まずいから、やはり奇巧好み女の……



子供の声にひかされ、走り寄るぬいの手首、右手はたもとに隠れて見えない。(図参照)



……洋式なドレイ女のせり市でもよい、それを一大パノラマ式に映画のヤマとしてしっこく展開して欲しいんだ。」

「見るよッ……、出て来たぜ。只今、うしみつ刻で御座い……を只今うまの刻で御座いナ、例の提灯持ちの十手野郎、番太の半助がずる賢しこそうに罷り出て、ひどく調子外れな拍子木を打った……。いよいよ、宿場の夜霧か朝霧か知らぬが、拉致、拐わかし、かっぱらい、そして売身の女のせり市が開幕されようとしている……」

「せって買われる女を、まず五人位正面に勢揃いさせる。勿論、値段が折り合えば一種の物物交換だから、反対側の親分衆の側にも

同様五人の女がそれぞれ後手に縛られ、腰縄を打たれて立っている。双方の距離はおよそ五十米……。嫌やなからっ風が吹き始めた。一瞬、誰れも黙りこくって身動かず、じ

いっと見つめている。すると、一人の見立師が飛び出して来た。そして、十人の女達の頭のとっぺんから足の先きまで撫で廻わすように見終ると、片端から頃合いな女を対照的に配置換えをして行く。買主、売主を含めて後見席に陣取った一群から異議の申出でがある。問題の女を一段と高い壇上に押し上げて、「ゼロ地帯」じやないが胸部をおっ開らき肌襦袢をむしり取って玉の肌をあらわに見せる……うちは序の口で、どうかすると砂混りのからっ風を利用するの余り、女の裾をあらり立てる酷たらしさ」

「どいつもこいつも一癖あって気に喰わない連中ばかりだが、今日はハマから毛唐人も来て景気がよさそうだ。丑寅の尻押をしている造酒屋の徳右衛門も最前から、また真新しい妾が手中に入る胸算定面をして悦にいつている。ヤリ手婆に毛の生えたような清兵衛の女房おりん、あいつがコメカミに絆創膏を貼って両の手で小判をチャラチャラし始めたなら、女郎ッ子が増える勘定だ。元気一杯の新田の丑寅に少々頭の足りない亥之吉は、さつきから毛唐の廻りにへばりついて難れようともしない。こんな調子で、有象無象のやつらを挙げてたら限りもないが、用心棒なつてものは



……どうも、やめた方がよさそうだねえ。第一、何時ズドンと飛道具が火を吐くか知ンねえ。聞く処によると、死んだ筈のズドン屋のハイカラ野郎の卯之助がまた舞い戻ったそうさ。そればかりじゃねえ、あんたが死ぬ思いで助けたぬいが、何処で間違えたかまたまた縛り上げられて、おまけに今度は格下げされて、文字通り女郎にタタキ売られるという。どうせどん尻りは鳥送りだろうけど、何んて血も涙もねえ惨らしい話じゃないか……。どうだね、今度もまた、親爺ッ、この宿場が気に入ったぜ、と云いなさるかネ……。それとも前回通りに、さらばって宿を離れなさるか、二つに一つだあネ。親爺ッ……。サア、お出でなすった、あんたは女にはてんで興味が無えンだから黙って格子の間から見てたらいじやないか。いい案配に今日は朝方になって、折檻した女が二、三人死んだという吉報に桶屋は出稼中だあネ。何に？どいつもこいつも斬る？それが、いけねえンだよ。用心棒てものは、むやみに刀を振り廻わすと、手前の方が棺桶の中に入って、またひよ

この時めいは縛られた縄目が痛いのか撮影効果を高めるためか、しきりに肩をピクピク動かしていた。



うきんな野辺送りとなるンだよ。いいから、そのめしでもたらふく食って、ここから眺めていな……。」「おッ今度はどうだ、春には少々早い今日女

達は湯文字一つだぜ。何んだ、風変わりなことをしやがると思ったら、毛唐の買付けだそうさな。

「道理で、前置金の小判がキラキラ光っていやがる。」

「それにしても衣裳屋の善兵衛が早手廻わしに締めさせた、目も覚めるような湯文字の赤さ……」

「毛唐ばかりじゃ無え、日本人だって振るいつきたくなるぜ。」

「可哀いそうに、野盗の類いにでも拐されたのであろうか若い娘達ばかりが荒縄で数珠繋ぎの態たらくで買われて行く……」

「あっいけねえ、三船の用心棒じゃねえ方の用心棒が暴れ出して来た。素裸になった女達が右往左往逃げて行く……のは困るネ。これじゃ、映倫から文句が出る、ばかりか上映禁止だ。」

「公開も出来んような映画は、止めた方がいい。止める以上は即刻手をひくンだね、手を……賢者は宜しく虎穴に入らざるを良しすッてね……」



# おむつカバー雑考

by the author

関

根

彰

by the author

今日、注文していた新らしいおむつカバーが届きました。届けに来た店員は、この特異なおむつカバーの用途を察したのか、にやにやしながら「誰方がお使いになるのですか？」とききました。私は「カリエスの病人に使わせるんです」と、さりげなくいった心算でしたが、額はびっしょり汗をかき、胸は早鐘を打っていました。この店員が若し同じマニアならきっと気づいたに違いありません。

私は早速部屋に籠ると、今届い

たおむつカバーを取出してみしました。こんな奇妙なおむつカバーが他にあるでしょうか。私は自分の着想の奇抜さに感心しながら、その使用具合のよさに、思わずうめきました。そのおむつカバーはこんな具合になっているのです。生地は白っぽいナイロンで、内側に上質の薄ゴムが張ってあります。すが、問題は、その形、構造にあるのです。私はそれを水着型と呼びます。

普通（大人用の）おむつカバー

は、腰を覆って胸の一番くびれた所（大抵へそのあたり）で終るようになっていきます。ところが、私のこの新らしいおむつカバーはそこで終らず、更に四寸程深くなつて、ほとんど胸の下まで届くようになっていきます。その儘では、胸のくびれた所にずり落ちるので、シュミーズやブラジャーのように吊紐がつけてあり、使用の便宜を考えて、前後とも取外し出来るようになっていきます。（写真1参照）

ホックはアメリカ式のように、

殆んど真横近くにつけてあり、両側共、胸の一番くびれた所までに三コ、その上が二コ、計五コ宛でとめるようになっていきます。仕立ては全体にピッタリと体に密着するように出来ていますが、更に密着を良くするため、ウエストにゴムを二本入れてあります。要するに婦人用のシングルの水着を想像すれば間違いありません。

着用して十分もすると、もうじつと汗ばみ、かっ／＼と熱くなって来ました。私のねらいは、見事に当たったのです。この新らしい水着型のおむつカバーこそ、縛りや枷のように、身体を拘束せず、むれるという点と、元来、赤ん坊のあてるものであるという事と、更に何時でも、何処でも、外出する場合でさえも、何等不便を感じず事なく使えるという、主に心理的な或る種の責具なのです。私はフェチシストとして、おむつカバーマニアとして本誌を読み始めて以来、何時も或る不満を感じ



じていました。それは、サド、或はマゾ等にみられる如き、歴史的、系統的な研究が、おむつカバーないしはおむつにみられないのはどういう訳かということです。おむつカバーマニアが、絶対数において少ない事も、その原因かも知れません。しかし本誌に、既に数篇の投稿をされているベテラン諸氏も、この点には触れず、専らその快美感や、恥辱感を追及するに止まっているのは、どうした事でしよう。浣腸マニアの諸兄弟も、もっとおむつや、おむつカバーに関心を持たれて良いのではないでしようか。そこで私は私自身の告白を兼ねて、主としておむつカバーに関するささやかな調査、使用に依り得た結果を書きたいと思いたったのです。

おむつカバーは、その観点から種々に分類されます。

#### 一、使用する防水材料からの分類

A、ゴム（生ゴム、ラテックス  
ゴム、ウールゴム、ビロー

ドゴム等）

B、ゴム引布（羽二重のゴム引布等）

C、ビニール

D、ウール

#### 二、構造上からの分類

A、前開き型

B、ズロース型（パンティ型）

C、腰巻き型

D、特殊型

#### 三、用途の上からの分類

A、赤ちゃん用

B、児童用（夜尿症用）

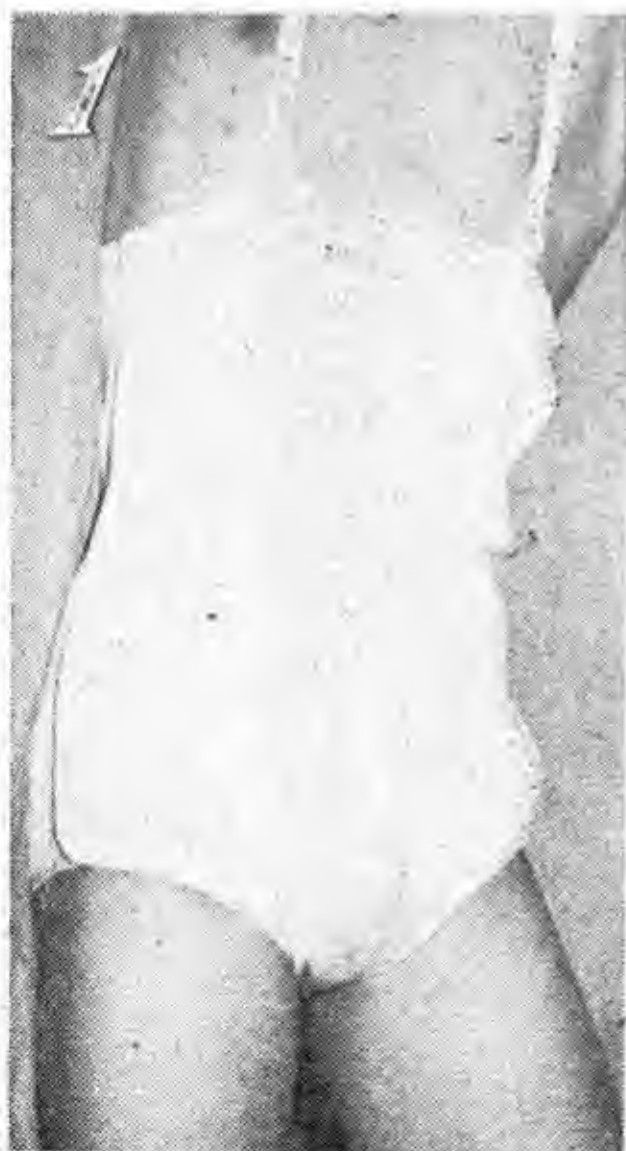
C、大人用（夜尿症患者用、安静患者用、マニア用）

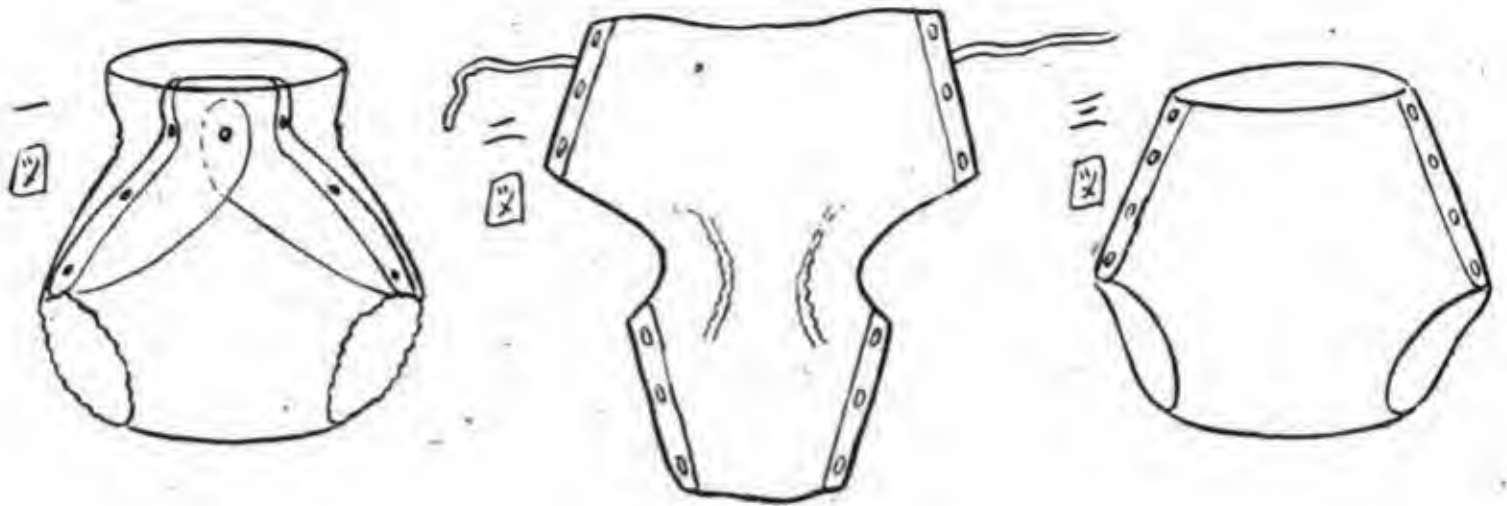
これ等は独立したものでなく、互に重複して実際の市販されているおむつカバーとなっているのですが、各項目別に考えるのは煩雑なので、それについて簡単に考察し、それから実際に市販されているもの、或は、マニアの欲するものについて代表的なものを探り上げてみました。

#### 一、防水材料について

ゴムは最も普通で昔から使われているものですが、使用感、耐久性等矢張り一番です。近年ビニールの品質向上は目覚ましく、可成りゴムの分野に喰い込んで来たものの、おむつカバーに関する限り、王座は矢張りゴムのものでしよう。殊に我々マニアにとって、は、ビニールは使用感の点においてゴムとは比較にならぬ位い劣るようです。ゴムにもヌメヌメした生ゴム、或はラテックスゴム、メリヤスゴム（ウールゴム）ビロードゴム、等がありますが、使用感の点からは、生ゴム（ラテックス

最近はいくなくなりましたが、羽二重ゴム引布を一枚でおむつカバーにしたものがあります。利点としては薄いこと、従って軽いこと、洗濯、乾燥等に便利な事が挙げら





れますが、バサ／＼と音がする点、色彩、模様などが割合少ない点、耐久力の点などから影が薄いようです。

ウールは、保温、通気性の点からは誠に具合が良いのですが、防水性の点でははるかに劣るので、新生児以外には、ほとんど使われていないようです。

## 二、構造について

何といっても、圧倒的に多いのは、前開き型で、現在市販されているものは、九割以上、この型であるようです。この型はおむつの取り替えに便利なので実用的ですが、この型も細い点では種々異なった型があり、打合せの部分が二重になったもの（図一）、おむつのずれを防ぐため、股の所にゴムのひだをつけたもの（図二）、ホックが真横にあるもの（図三）、胴回りにゴムを入れて紐をつけないもの等、種々型があります。又、太股の部分にも、柔かい純毛をつけたもの、スポンジゴムをつけた

もの、ナイロントリコットをつけたもの、内側のゴム（またはビニール）を外側に折りかえして、その中にゴム紐をいれたもの等、股ずれの出来る所だけに、種々考えられています。

ズロース型（パンティ型）は、あまり市販されていませんが、ビニール製品が一部出ているようです。

尚ズロース型といっても、実際には、ショーツ、或はブリーフのような型（図四）で、ズロース型（図五）のものは実際には市販されていません。私はズロース型のと、ショーツ型（図六）のおむつカバーを持っていますが、実際に使用してみると、カバーとしては余り完全とはいえないようです。尚、この型は、私にとっては、甚だ魅力のある型で、総ゴムのズロース、総ゴムのパンティなどは、入手したいものの一つですが、ゴムは滑りが悪く、とても一気にははけません。市販されているのが

ビニール製ばかりなのも、このあたりに原因がありそうです。

腰巻き型は、内側に防水材を張った布を、おむつの上から腰巻と同じように巻く訳ですが、寝てばかりいる新生児や、半身不随の病人には使用出来ませんが、動作が出来ないので、少くともマニア向きではありません。

特殊型は、あまり出ていませんが、現在市販されているのは図四の様な形で、内側に防水材をはった袋のようになっていて、中におむつをいれ、真中にあけた円形の穴を中心に、ふんどしのように紐で括るようになっています。この型の特徴は防水材或はおむつの直接に当たる部分が中央だけに限られるので、全然むれず、おむつかぶれなどを起さない事ですが、少しずれたりすると、完全に失敗するのが欠点です。尚フランスには、この型に属するものとして、巾十五センチから二十センチ位のビニールをあてて、テープで連絡した



型のものがあるそうですが、私はまだ見かけたことはありません。写真でみると、この型は丁度、一番簡単なメンスバンドと、そっくりな形をしており、女性に黙って見せれば、きっと間違えると思います。私の考案した水着型のおむつカバーも、この型に入る訳ですが、重複しますので省略します。

### 三、用途について

圧倒的に多いのは赤ちゃん用。これが本来の用途ですから当然なことですが、意外に六〜七才位までの児童用（夜尿症用）が、可成り容易に入手出来るのには驚きました。普通の洋品屋さんでも、頼めば仕入れて呉れると思います。が、その方の問屋さんに聞いてみますと、大抵あるようです。六〜七才用ですと可成り大きいので、その中で大きめのを選べば、少し小柄な大人なら使用可能です。大人のものは流石に少い様ですが、薬局あたりを丹念に探しますと時々ぶつかることがあります。

大人用は当然大きい訳ですが、私の好みとしては少し大きすぎることが多く、もっとピッタリ体に合ったものが欲しくなります。某婦人雑誌にも、大人用（患者用）おむつカバーの広告が載っていました。

以上のような事から、おむつカバーの実用上の要件として、次の様な事が挙げられます。

一、防水性の良いこと。  
二、通気性があること。

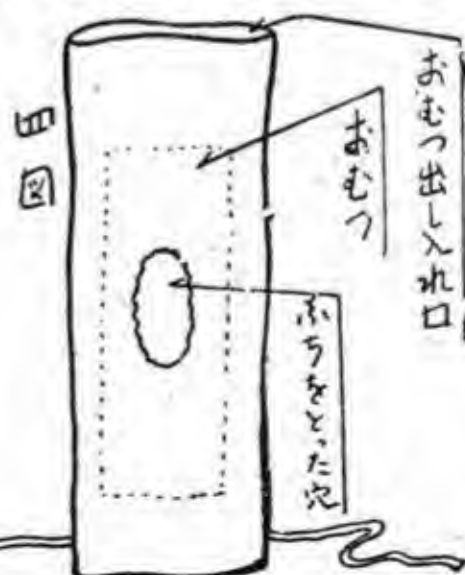
三、股上が深すぎないこと。従来の日本のおむつカバーは股上が深すぎて、お腹の上まで、覆うようになっていたものが多く、必要以上におむつかぶれ等を起す原因になっていました。実際に使用してみた結果は、せいゝ臍の所位いで充分です。

四、前開き型のうち合せの所は（図1のように）二重になっている方がよい。これは、横向の状態で使用すると、ホックの間から流れ出すことがあるからです。もっ

とも赤ちゃん用は、その量が少いのであまり心配ないかも知れません。

五、股下の充分広いものであること。これは、実際に尿等を吸収するのは、この部分のおむつであるので、充分広い事が必要であるのと、運動をしたときおむつカバーと足の間にすき間が出来ないように充分なものが欲しい訳です。只、あまり広すぎると、だぶついて却って具合が悪いようです。

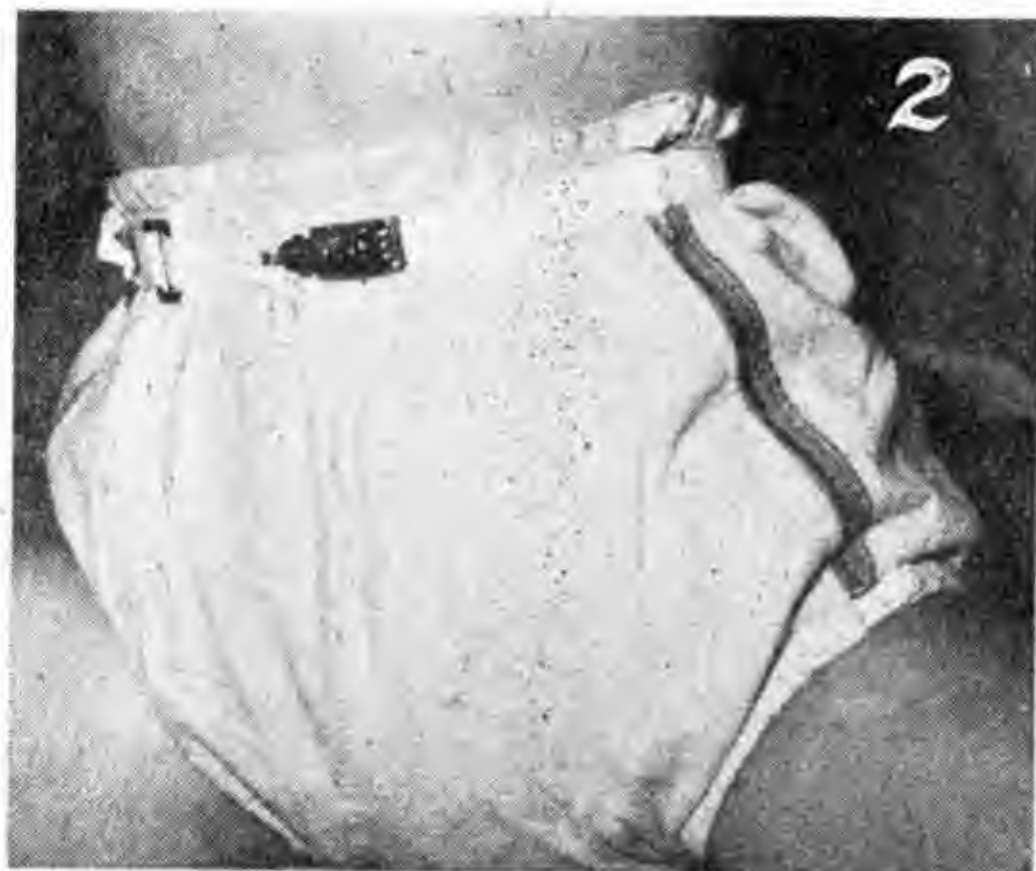
六、股ずれしない工夫。これは太腿を締めつける部分ですが、ピッチリと締めつけると快感もあり、他の衣類を汚す心配も少い代りに、太腿が股ずれを起します。従って、柔かい材料（ウール、スポンジゴム、トリコット等）を使って、中にゴム紐をいれたりしたものが、実用上具合が良いようです。只、マニア用としては別問題で、むしろ、古くからある型の、中のゴム布を外側に折り返して、その中にゴム紐を通した型の方が



締めつける快感もあり、また、ゴムの作り出す微妙なひだが味わえて楽しみです。うっかりすると一晩で、太腿の周囲にみみずのようなゴムの跡をつけてしまします。

七、防水材がゴムの場合、その厚さに注意する。内側にはるゴムが厚い場合は、あまりのびないので、丈夫であり、変形したりする事は少いのですが、股ずれを起したり、あてた感じが、ゴワゴワして好ましくありません。薄いものほど、あてた感じは快適ですが、ゴムがのびて、長く使っていると内側がダブダブになります。

八、ホックがしっかりしていること。ホックは何千回と開閉するので、しっかりしたものを選ぶと、案外早く駄目になります。



### 夢のおむつカバー

私の現在所有するおむつカバーは、全部で十五枚ありますが、その内訳は、ナイロンにゴムを張ったもの四枚、(内、水着型一枚)木綿(ネルを含む)にゴムを張ったもの九枚(内、ズロース型、パントリー型、三枚)ネルにビニール

を張ったもの一枚、ビニールのみのも一枚となっています。生地の色、ゴムの色など様々で、見ても飽きないのですが、私の好きなのは、ピンクのナイロンに黄色の薄ゴムを張ったもの、ナイロンの水着型のもの、ネルに鮎色のゴムを張ったものなどです。変わったものとしては、ホックでなく、チャックで脇を開閉するようにしたものがあり、チャックを引き上げて、スライド金具についた紐をバンドに通して鍵をかけると、もう絶対脱げません。(写真2参照)

現在私は、次のようなおむつカバーを作り度いと思つて、研究中です。

### A、おむつカバーコーセット

パントリーコーセットの内側に全部ゴムをはって、おむつカバーコーセ

ットとする。そうすれば、本誌六〇年五月号の「ガラスとゴムの思ひ出」にて、原由貴子さんがいつて居られたような、コルセットと生理バンド兼用のおむつカバーが完成するでしょう。流石にメーカーには頼めないもので、目下手製で試作中ですが、ウエストをしめつけた状態にしてゴムを張るのが難かしく、仲々完成致しません。

### B、スリーインワンおむつカバー

コーセットにウエスト・ニッパ、ブラジャー、ガードルなどがついたものに、すっかりゴムを張って、ピッタリした全身用? おむつカバーはどうでしょう。胸までゴムで覆ったら、肉体的な苦痛を伴なわぬ立派な貴具——一種のゴム衣です。しかもそれがその儘、盛装の基礎になるのです。華やかなイブニングドレス。そしてその下には全身をピッタリ包んだおむつカバー。これこそおむつカバー



のデラックス版です。

### C、皮製おむつカバー

柔かいなめし皮の内側に、黄色か飴色の純良薄ゴムを張って、腰の所に鍵をつけ、絶対安全なおむつカバーを作ってみたいと思っています。黒か濃い茶色の、ギシギシいう皮の内側に、黄色い薄ゴムがピッチリ張られ、一部のすきもなく腰部を包みます。なめし皮の匂いと、ゴムの匂いが、快く鼻を刺激することでしょう。是非作ってみたいものの一つです。

D、ゴムのみズロース、パンティ  
サモンピンク、飴色等の生ゴム、ラテックスゴム等で、ズロース、パンティを作ってみたい。只、これは滑りが悪いので、右か左の片側をチャックかホックで開くようにしておかないと、はくとき困るものと思います。私は現在パンティ

イの内側に総ゴムを張ったのを持っています。これをはくときいつも苦労しています。出来れば、共色のゴムのブラジャーも欲しいものです。

なお、今持っているのは、ほとんどメーカー製のため、裾口の所には何もついていませんが、今後私の作るものにはレースやフリルをつけたり、アップリケをつけて、可愛らしい感じのものにしたいと思っています。ウイクリーパンティならぬ、ウイクリーおむつカバーが出来上るのも、そう遠くはないでしょう。

### おむつについて

扱て、最後に、おむつについて一言触れておきますが、マニアにとって、一番困るのがおむつと、その処理ではないでしょうか。おむつで最も一般的に使われて

いるのは、浴衣をほどいて作った、木綿のおむつで、また、使った感じも柔らかで具合が良く、廃物利用の意味もあって、まだよく使われるものと思われれます。マニアにとっては、模様が可成り感覚を刺激する面もあって、使ってみたいおむつの一つです。

浴衣のおむつに対し、最近可成り普及して来たのが、アメリカタipesの白いさらし、またはネル等です。これは吸水性が良く、肌ざわりがよいように、ソフトに織られてあり、模様もつけてないので、汚れが良く見えて清潔の面からも好ましいものです。最近登場した貸おむつ屋さんは殆んどこれで、十枚位ずつポリエチレンの袋に入れて届けてくれます。

この二、三年来、新しく登場したのが紙おむつです。これは薬局やデパートの育児コーナー等には必ずみられますが、柔かい吸湿性の大きな紙を八、十枚位重ねてあり、一番下にパラフィン紙等をつけてあります。メーカーにより、ポ

リエチレンの補助ミートをつけてあるものもあります。この紙おむつは、紙を漉く時に、水溶のてん着剤を使ってあるらしく、最近女性の間で多く使われたしたルナテックス、コルテックス等のように、水に溶けやすいので、水洗便所にも流せるようです。私も実際に使用して見ましたが、その結果は、千切れてよれてしまう。ベタベタになって体やおむつカバーに附着しやすく、紙おむつの上にガーゼかさらし等を使わねばならない。また、紙おむつで充分な量を使用するとゴワ／＼した感じになる……などの欠点が判りました。結局、その量が極く少い、新生児や旅行の際の補助おむつとしての使用が（価格の面もあって）、適当なようです。

外国製のおむつ、おむつカバーの紹介をして呉れた貴重な文献として「暮しの手帳」一九五六年三四号「人生初の衣裳」の頃は、一般の方にも可成り参考となるようです。

(終り)

告白特集  
偏執記録の断層



## 素足

オフィスの天井のケイ光灯がこのところ、少々、具合がわるくなり、ちょっとした震動で消えてしまう。そのたびに、女子社員たちが代る代るデスクの上にあがって、ケイ光灯をつつく。そのデスクは、営業部長のものだから、一日に二三回は、幸運にもそのデスクは、美しく、匂いたかき脚に踏まれるわけ。

——ホラ、また消えた。

みんながはやす。きょうのケイ光灯当番の小宮さんが、はずかしそうにスリッパをぬいで、デスクにのぼった。

愛<sup>マ</sup>好<sup>ニ</sup>家の<sup>ア</sup>記録<sup>ノ</sup>

## わが唇は喜びにふるえる

## とやまかずひこ

まっしろい、食べてしまいたいような美しい素足が、目にまぶしい。

ケイ光灯がつき、彼女が下りて、五分ほどたつと、セカセカと営業部長が、外出先から帰ってくる。

——オイ、茶をくれ。

気の短かいかれは、大声で云い、無意識にデスク一面を撫で廻し、その手を、顔へもってゆく。これがクセなのだ。

小宮さんの、足の脂、足の汗は、手を通じて顔へ……そして、そのうちのいくらかは、口にも運ばれるわけだ。

何もしらない営業部長は、くちびるをなめ

まわしている。あるいは、塩からかったかもしれない。とにかく、そしらぬ顔で、美女の足のうらの汚れを舐めさせられている様子をながめるのは、おもしろいものだ。

## 足の仕事

週刊文春誌7月3日奥付グラビヤを開いて目をうばわれた。

タイトル腕はなくとも。足で幸福をつか

んだある女性。

美しいアメリカのマダム。といっても、年は24才のメリー・クルツ夫人は、生れつき両腕がつけ根から無い不幸なひと。



だが、不幸にも負けず、足で、楽器のマリンバを叩き、足のおやゆびと人さしゆびを使って、口紅をさし、皿を洗い、買物に出かけ、赤ちゃんのおむつをかえ、アイロンまで使う。足が、手の代りをしているのだが、サラを洗う足の形は美しいし、リアルな情感(?)をかんじさせる。食べ物のをせるサラを、両足で洗うところに、なにかおもしろさがある。この文章が、読者の眼にふれる頃には、掲載誌は入手困難の実情にあるのは、残念だが、週刊誌には、仲々すてがたいものがある。記録だけはしておこう。

### なりわい

別冊文芸春秋の第七十五号、丹羽文雄の小説「なりわい」をおもしろくよんだ。

主人公は、清掃車の助手半田青年。

テーマがテーマだけにはじめから終りまでくさい話で、臭いのために失恋するのだが、文中水商売の女たちが、自分たちのものを清掃する二人にたいして、いらなくなったパンティを二階から放りなげてよこす。

「何かを拭いたように汚れていた」と描写しているが、使ったご当人が、頭上から降らして、犬にモノをやるように投げだすところな

どすばらしい。

下着フェチの人には、一読の価値があるだろうと思う。

### ピンデー

ベッドでそのままつかえるインスタント・ビデのアイデア、商品名ピンデーが、東京のあるメーカーから発売され、婦人雑誌に広告がはじめた。

ビデについては今更説明の必要はないであろう。

広告から推すと、この器具の用い方によつては、おもしろいことになりそう。これ以上くわしく説明するのは、さしさわりのあるが、面白いものが生れたものだ。

### 草むらにて

会社の厚生施設のひとつとして、ことしも江の島に海の家を借りることになり、交渉のため現地にいった。レジャーブームとかで、めばしい家は殆んど予約々々だったが、旧友をたずねていったおかげで、首尾よく条件にちかい家を契約できて役目をはたした。

足のついでに、借りた家を見せてもらい、ついでに、橋をわたって江の島へゆく。案内

についてきてくれた、家主さんの若おくんは、まれにみる美ぼうの女性で、仲よく肩を並べて海べに廻り、しばらくは世間話に打ち興じる。こちらが、せいせい、お気に召すような話題をもちかけたので、若おくん、ごきげんである。

海水へ足をつつ込んで、冷えたのか、かの女がもよおしたらしいのは、それから、じきのことだった。

——困ったわ。

事態は切迫したらしい。

とどのつまり、松林のおくで、用を足してくるから、見張っていて、という。

こちらは、望むところとばかり、お役目大事に、人目を見張る。

五分ほどして、サバサバした顔つきで、出てきた彼女に、家の方から、お手伝いさんらしい女性が迎えにきたので、かの女、再会を約して、帰っていった。しまった。

かの女の姿が、消えるのを見届けて、松林へ見当をつけてはいつてみる。

さがすほどのこともなく、アッター！アッター！初対面ながら、美しいひとの面影をおもいださせる。

われをわすれて、草の上にすわり、その女

性が、おいていってくれたものに惹きつけられて幸福感に酔いしれた。七月八日午さがり、誰にも知られぬ、自分だけの秘めたたのしみ。

### ショートショート

七月十五日発売の『別冊宝石』、ショートショートはたのしい本である。なかでも、同誌八ページの星新一作「鏡」はすばらしい。

主人公が、ある方法で「悪魔」をつかまえて、ツボのなかにとじこめる。悪魔は、ネズミよりいくらか大きく、ネコよりは、いくらか小さい。これを、夫妻でイジめて、たのしむ、とくに、おくさんの方は、一日じゅう部屋にとじこもって、抵抗力をいっさいうばった悪魔をいじめた。たとえば、ハンドバッグから太い針を取りだし、悪魔の体に力いっばいつき刺し、これを何回もくり返す。

とにかく、お二人のいっさいのウツプンはこのとりこを、いろいろの方法でいじめぬいて、晴れるというのだからたまらない。

作者は、おくさんの加虐性を認めているのだから、何ともたのしい。Mのひとも、Sのひとも、ゼヒ一見をすすめたい。

### サニスタンド

なにげなく開いた週刊誌の片すみに、飛びあがるほどすばらしい文章や、絵、シャシンを見つけたときの喜びは大きい。

週刊文春七月二十四日号二十六ページの、小さなシャシンがそのひとつ。

サニスタンドー婦人用立小便器。その名を知ることに久しいが、実物にはお目にかかれなかった、あそこがれのサニスタンドが、チャンネルで紹介されている。

まさに、その形は、わがイメージにピッタリ。ヤプーの生便器をおもわせる。幸福そうなサニスタンドのすばらしい恰好は、かずひこの眼のおくに焼きついてしまったことだった。

### ヘヤー

「ちょうどいいところへ見えたわ、一と風呂あびてらっしゃい」

——仕事の上で、いろいろとお世話になっている、池田夫人。このひと、四十前の若さで、未亡人となり、億ちかい夫の財産をうけついで、あちこちの社の出資者となり、男そのこのけの実業家タイプの女性。

さいきん、邸の一角に、豪華な、温泉式の風呂をこしらえ、きのうから使いはじめたというホヤホヤのところへ、仕事の報告にいったかずひこは、つかまったわけだ。

ご自慢の風呂にはいれという。

「わたし、いまはいったけど、でも、いいでしょ。汗を流してらっしゃい」

出資者のごきげんは、適当にとっておかねばならない。

あと、一、二軒、顔出ししなければいけないのだが、とにかく日のたかいうちから、一と風呂あびさせていただく。

実に、デラックスの、快適な風呂だ。目をつぶって、しばらくは、昼の風呂をたのしむ。

フト、気がついたら、湯のなかに、一本のヘヤーがただよっているのを発見した。うぶ毛のように細いヘヤーだ。

夫人と、若いお手伝いさんの二人しかいないこの家の風呂にただよっているとしたら、かの女らのうちのどちらかのおとしものにちがいない。思わず、いとしくなつて、このヘヤーを口に含んでしまった。

(了)





外 誌 紹 介

(PHOTO-FICTION)

# 麗わしき争奪

BATTLING BABES 誌ヨリ

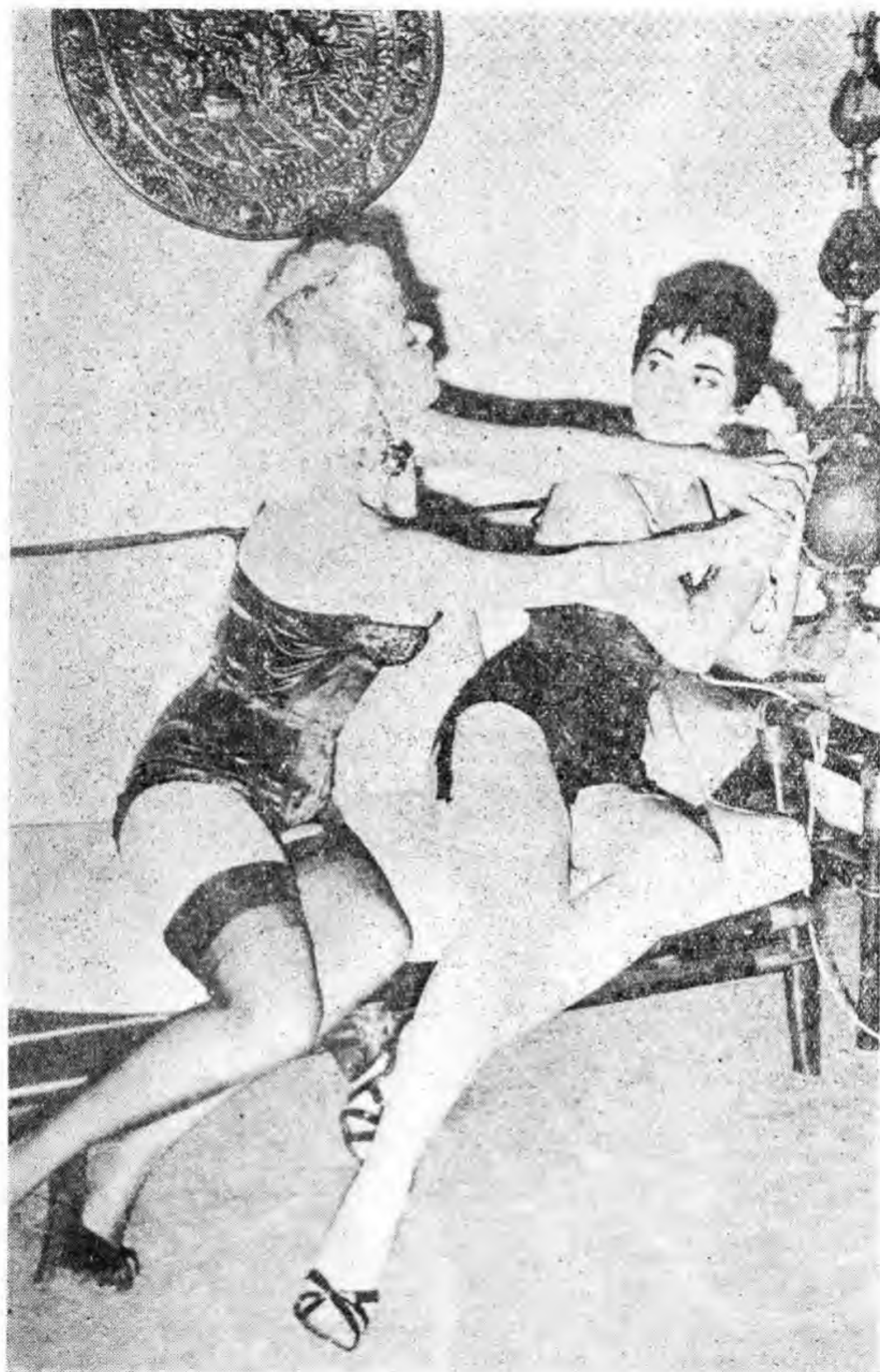














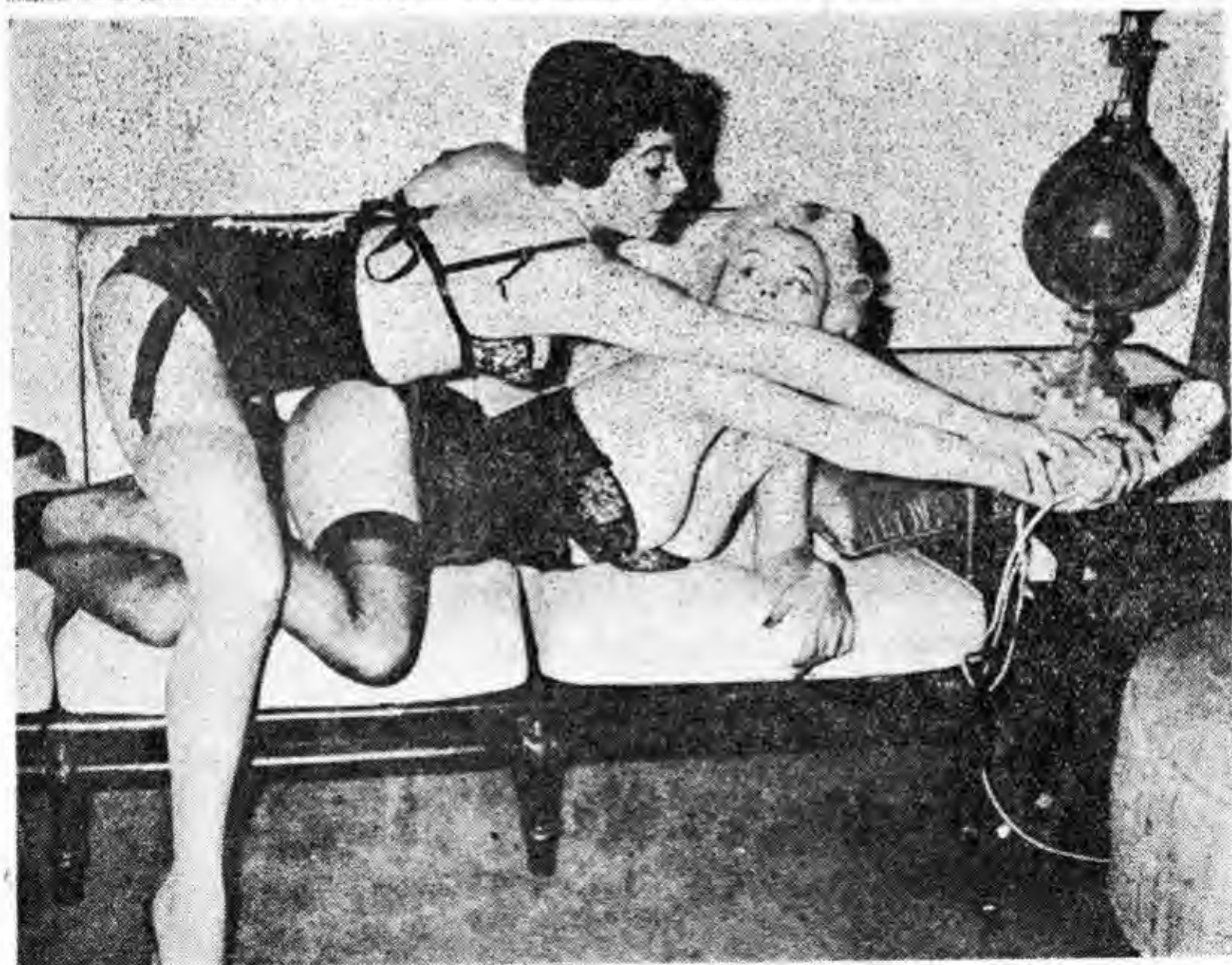








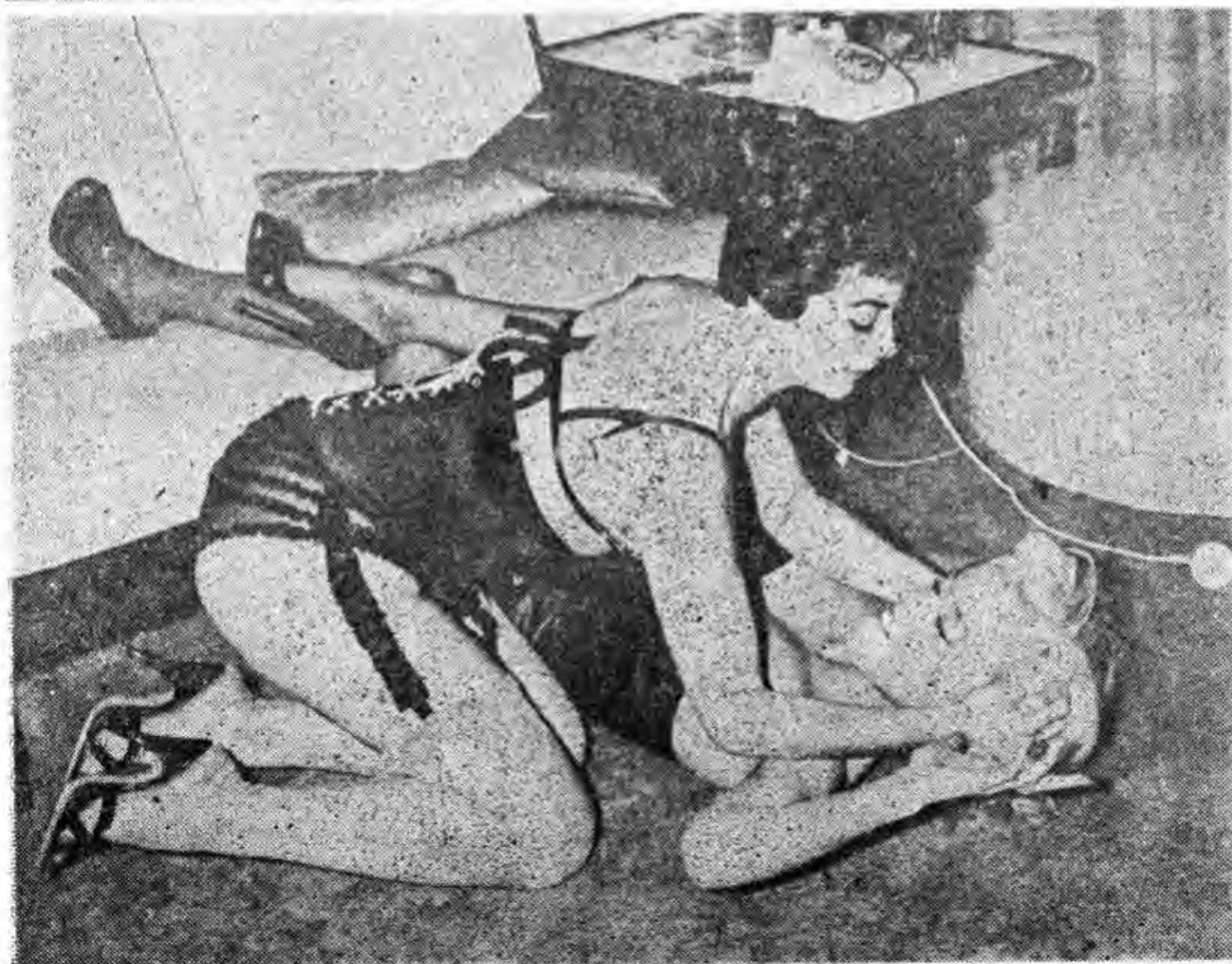












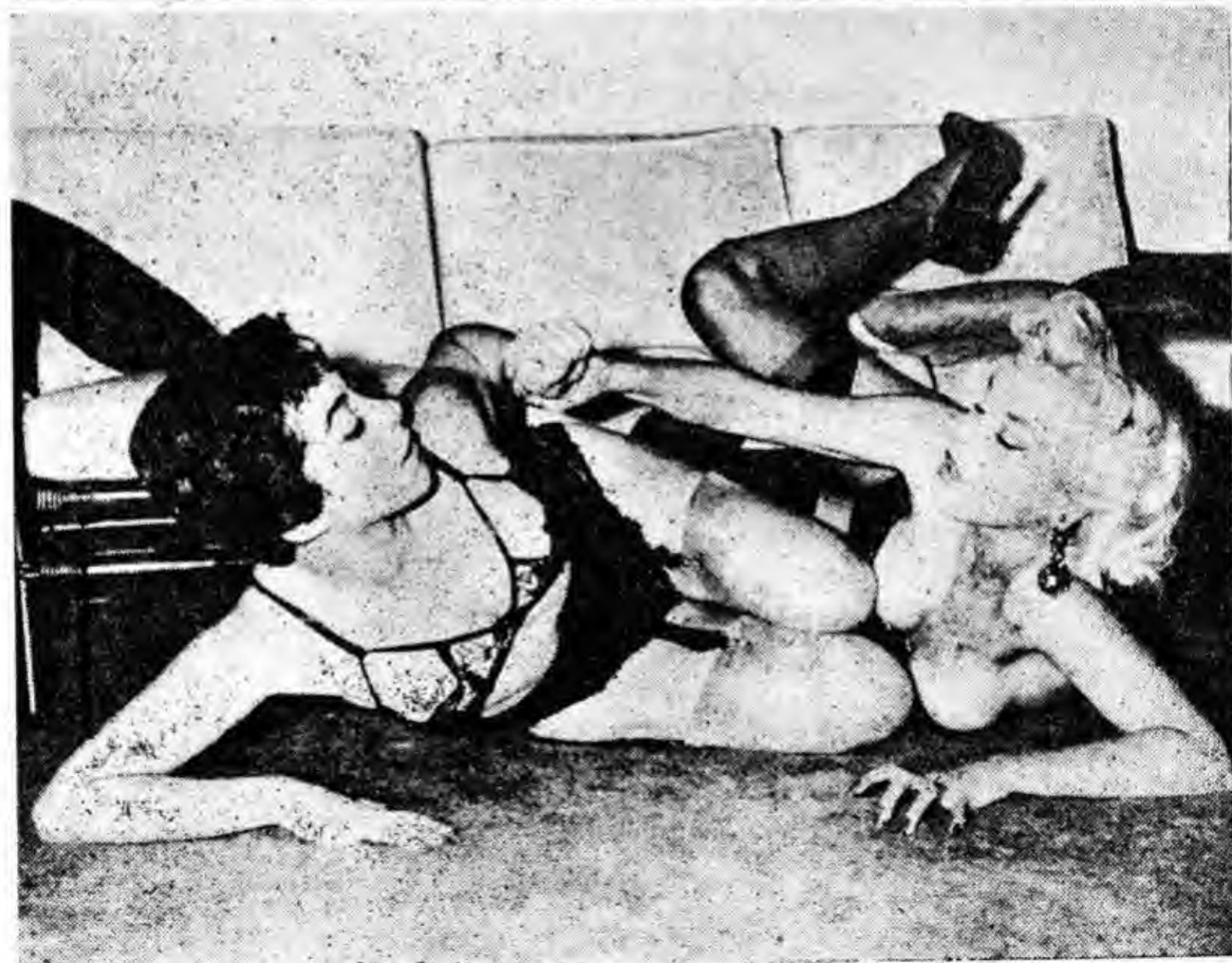




















# 女性 の 切 腹

・・・女性は何人ぐらい

切腹したただろう・・・

数 寄 咲



小泉八雲（ラフカジオ・ハーン）は、日本文学の底を流れるものとして「忠義の宗教」というものを見出しています。日本人の心の中には、潜在的に「忠義の宗教」があるというのです。

ところで、その「忠義の宗教」を形づくる三つの要素というのは、切腹（ハラキリ）と、殉死と、敵討（カタキウチ）だと言っております。

八雲は「殉死の風は、日本人の忠義の宗教の一つの側面を現わしています。もう一

つ、殉死のほかに、よしそれ以上といわれな  
いまでも、それと同様に意義の深い風習があ  
ります。——それは切腹（ハラキリ）です。  
ハラキリを、一つの風習として、はじめてや  
ったのは武士階級で、昔は敗軍の将や、包囲  
軍の猛攻に陥った城の守将が、敵手に落ちる  
恥辱を受けないために、割腹したのです。  
——このハラキリは、現在（明治時代）でも  
日本人の間に、さかに行われている風習で  
す——と言っています。

八雲はまた、「ハラキリについては、特

に記憶しなければならぬ重大な事実があり  
ます。サムライ階級では、男でも、女でも、  
いつでも切腹できるように要求されていまし  
た。これは、名誉と忠義の心のためです。」  
——と、たいへんに「切腹」を讃美しています。

八雲が明治時代の日本の風物を描写した文  
の中に、切腹のようすを書いたものが、いく  
つかあります。それによると明治時代には、  
男も女も、切腹して自殺することがかなり多  
かったようです。男性はとにかく、女性の方  
だけでも、年に何人ぐらいの女性が切腹した

ことでしょうか。正確な数字は勿論わからないでしょう。

エンサイクロペディア・ブリタニカ（大英百科辞典）の、大正の初めに輸入された版に切腹した日本人の数が出ています。これは、英国人が、明治の初年に、たぶん日本の政府筋からでも手に入れたものでしょう。一年間の日本人の切腹自殺の数です。勿論既遂だけで、未遂は入りません。その数は男女併せて、一年間に三千五百人の日本人が、切腹して死んでいると報じています。勿論男性の切腹の方が、数は多く、女性の切腹は、数百人と記しています。

明治初年といえ、まだ封建の風習がたくさん残っていた時代ですが、それにしても日本人の総人口が、昭和の今日から見れば、半分位だった時代に、年に三千五百人も切腹したということは、日本人が、どんな

に切腹がすきで、切腹にあてがわれていたかの証明になると思います。

もっとも、明治の初年には、今日のように睡眠薬や、農薬などの毒薬自殺の手段がありません。鉄道自殺もできなかったでしょう。他に自殺の方法といえ、縊死か、水死かです。ですから、切腹が重要な自殺の方法であったことはたしかです。

大正から昭和の初め頃の新聞の三面記事には、まだまだ切腹自殺の記事は、たくさんあります。男女の心中の記事によると、腹を一字に切って死ぬ人たちは、相当の数にのぼっています。腹を十文字に切ったり、大小腸を露出したりすると、それを大きな活字で見出しに書いて、重要なトップ記事として扱っています。



ただ、心中の場合など、他の自殺方法と併合する場合もかなり多いようです。深夜、待合で、男の客と芸妓とが、切腹心中して、死に切れないで、裏口から抜け出して、近所の川に投身したというような記事があります。男の学生と女給さんが、ボートの中で切腹して、投身し、遺留品をのせた無人のボートが湖面にただよっていた、などと書いてあります。したがって、切腹だけの自殺統計ということでは、実際には、手に入らないだろうと思います。



ある大学の法医学の教授から、こういう話を聞いたことがあります。教授の説では、切腹死は出血多量によることは勿論ですが、その外に、急性腹膜炎による死が、非常に多いそうです。

幕末の話です。新選組に十九才になる少年隊士がいました。色の白いハンサムな少年でした。祇園町の遊女で、この少年と二世を誓った女がありました。ちょうど、非番で、少年は祇園の妓楼で、恋人の遊女のお酌で酒を飲んでいました。

「あんたは、優さ男やから、切腹なんて、できしまへんやろ」

少年は、恋人の手前、強そうに力んで見せましたが、恋人のその遊女は、笑って否定するばかりです。

すると少年は、いきなりもろ肌を脱いで、真剣の短刀をぐさっと、左の下腹につき立てました。もちろん、勇気のあることさえ恋人



に見せればいいのですから、ほんとに死ぬ気はありません。短刀の切先を浅くして、見た目には実に見事に、腹を十文字に切ったのです。

それを見て、恋人の遊女も、自分が男に切腹をけしかけた手前、男の手から短刀を奪って、自分も腹十文字にかき切ってしまいました。そして二人は、また平気な顔をして、料理を食べ、お酒を飲んでいました。

驚いたのは女中です。鮮血にまみれた二人

のお腹を見て、びっくり仰天。早速、床をしいて二人を寝かせてしまいました。

早速に医者が招かれましたが、二人は元気ですので、簡単に手当して、傷は浅いからといっていました。

あくる朝、二人ともなかなか起きて来ないので、女中が室をのぞきにいった、再び仰天しました。

二人は床の中で、絶命していたのです。

急性腹膜炎で死亡した、いい例です。——と教授は教えてくれました。

明治以後の切腹の調査については、田谷敬生先生の、立派な御研究があるように聞いております。わたくしのような、奇クの新しい読者のために、中康弘通先生や田谷敬生先生の御研究を、たくさん載せていただきました、お願いもうします。

告

白

# 浣腸器

を

買　　う

長　瀬　栗



## その一 イチジク浣腸

私は商用でよく旅行する。珍らしい風物、変った食物、得難い郷土人形等、求めれば旅には興味津々たるものがある。

ところが私は、もう一つ旅に楽しみをもっている。それは軽便浣腸を買う事だ。旅館での独り寝の寂しさをまぎらすのは、勿論浣腸である。唯独り誰にも気がねすることなく、鏡合の角度を適当に変えて我が身を写しながら夜更けに浣腸器をまさぐる時、鏡台に写った我が手が、或いは幼き日の母のような、或いは病院での看護婦の手のように錯覚し、思わずも羞恥に取りつかれるのもマニアならではのことであろう。

さて、はじめはグリセリン浣腸器と、一〇cc入りのグリセリンを入れた小罫をそつとスリッケースの底に忍ばせたものだが、どうも不便で仕方がないので、最近では宿泊地で軽便浣腸を買うのを常と

している。それがなかなか面白いのであって、この楽しみをのべてみよう。だが、最初に一言、何時になっても「浣腸を」という時、そこはかとなない抵抗を感じ、頬が赤らむ思いを敢えて平然を装い、しかもあわてて薬局を、後も見ずにとび出すのは、我ながら大人気ないと思いつつも、どうすることもできないのを告白しておく。

先ず第一に、私は今夜泊ろうとする目的地の駅についたら、先ず最初に目に入った薬局に必ず入る事にしている。というのは、はじめの頃、お客がいたり、特にそれが若い女性であったり、或は矢張り若い女性が店番をしていたりして入るに入らず、三十分以上もうろ／＼した苦い経験から、たとえどんな条件の下でも敢えて羞恥に我が身をさらすべく決意したのである。

さてここは東海道のS市に着いた。駅前広場の向う角なる文化堂薬局のネオンが目に入るままに足





を運ぶ。間口は五間もあろうか、半円弧をえがいたウインドケースが螢光灯にまばゆく光っている。一寸珍しい位いのデラックス薬局。さすが駅前だけあるなと感心しつつも、外からうかがっただけでも十人近くの客のあるのには、我ながら一瞬足がすくんだものである。

しかも悪いことに、化粧品を買うのであろうか、オフィス帰りと

思われる妙齡の女性の客の多いこと、従って応待するのも女店員ばかりである。いささかこれには弱ったが、最初の店で、と決心している以上、入らずんばあらずとばかりに、決然として一枚ガラスの扉を押す。

「いらっしゃいませ」

目ざとく客とみて声をかけてきたのが、手すきのこれ又二十二、三の一寸十人並以上の女店員ではないか。一瞬見渡した所、他の店員は——男子店員二名も含めて——皆、夫々に客の応待中とあれば、私は今声をかけたその女店員の前に進まざるを得ず、又彼女もそれが当然であるが如く微笑さえ浮べておじぎするのである。

「何をさし上げましょう」

「えーと」思わずも、私は口ごもってしまった。いけない、どきま

ぎしては。わざと平静を粧って、こんなことは当り前といった顔をしないで、と心に言い聞かせるが、あせればあせる程カーツとし

てきて、

「えーと、アノ」と、小声で繰返すばかり。見かねたように、女店員は、

「どこかお悪いのでしょうか。症状おっしゃって戴ければ、御相談申し上げますが……」

もういけない。下腹に力を入れながら、

「あの、イチジク浣腸ある？」とわざと横柄に聞いた。一瞬、その女店員の顔から微笑が消えたと思つた瞬間、今度は軽侮——それは私の僻目であつたろう——とともされる微笑が再び浮んだ。

「ハイございます。大人用でございますね、一つでよろしゅうございますか」

「いや二個」

「ハイかしこまりました」

奥へ消える。その瞬間、私は隣りのBGらしい二人連れの、見るともない視線を左頬に痛く感じ——或はそれはクスリといった笑いであつたかも知れない——あわ

てて薬の並んでいる高い棚を、丁度、水原監督が三塁コーチボックスで腕を組んで高いスタンドをながめるように、わざと知らん顔をしてながめるのであつた。

「お待ちどう様でございます。有難うございました。あの、それから、お済みになりましたら、出来るだけ我慢なさいますように。効果がございませんから。どうぞお大事に」余計な事を言うなとばかり、私はくるりと背を向けて足早やに外に出ようとする時、又しても「お大事に」の聲が追ってきて、それはあたかも全員の視線のように私の背に突きさされるのであつた。

第二には、軽便浣腸の種々相な楽しみがある。一応、あまりにも普通名詞化した「イチジク浣腸」と言つて求める。しかし、地方都市に於ては、イチジク浣腸を置いていない店が少くないのだ。大体関西、特に九州方面では、ハート十字浣腸が多く、東北には東宝浣

腸も少くない。大正製薬のリスクンにぶつかることも、又、さくら浣腸といったものにもお目にかかる。果して何がとび出すやらという楽しみ。

そして第三に、使用後、空になった軽便浣腸に、帰宅後マジックインキで、場所と日付けを記入して、蒐集箱に保存する楽しみがある。余人がみれば、又、何と馬鹿げたことをと思われるだろうが、マニア諸兄姉にはよく分って戴けると思う。

## その二 グリセリン浣腸器

中学生の時、浣腸器がほしくてたまらず、何度か薬局の前をゆききした挙句、やっと「浣腸器買ってくるようにって」と嘘をついたところが、

「あいにく切らしてしまっただすよ、イチジク浣腸で間に合いますでしょう」って言われた時のくやしさは今でも忘れられない。以来、何本割ったりこわしたり

して買い求めたことであろう。おもむろに茶ボールのケースから取り出し、嘴管の先に左手の人差し指を当て、右手で内筒をピストン運動させて、空気がもれないかを試してから包装する薬局店主の仕事は、どこも必ずといってよい程変らない。これが毎夜私を嬉しく苦しめるのだなど、よもや想像もしないだろうとは思いつつも、受取ってから店を出る迄の時間の長いこと。その間、相手は何とも思っていないだろうに、私は羞恥心で一ぱいなのである。

或る時、丁度空気もれを試している時、女学生が風邪薬を買いに来たものだ。おやし早くしまえばいいのにとこっちはやきもきしているのに、

「これは一寸甘いようですね、他のにしましょう」改めて嘴管を押さえてテストしながら、

「お嬢さん、何に致しましょう」と、やっているのだ。一瞬、私と浣腸器を見較べるようにした彼

女は、次の瞬間、半身になって私の方に背を向けたまま、  
「今年のカゼにはどれが良いんです？」という。いたたまれない気持とはこの事と、しみじみ感じたのであった。

グリセリン浣腸器に関し、グリセリンについて一言ふれたい。私はグリセリン液は薬局では買わない。幸い近所に某メーカー——といつてもごく小規模な零細企業だが——の工場があつて、そこで局方グリセリンを製造しているからだ。というのも、一度、薬局で買ったところ、レットテルで近所で製造されているのを知ったので、近所を幸い、直接に買いに行っている。その第一回が大変だった。元来小なりとはいえ、メーカーは小売権を侵害しないため、直接小売はしないものである。

「町内のものですが、グリセリンを少し分けて戴けませんか」  
「小売りは致しません、町内の方ならばねえ。で、どちら様でし

よう」女子事務員は如何にも事務的である。

「三丁目ですけど」私はとっさうそがでた。丁度初冬の頃だったのである。

「うちは印刷屋でね、これから冬に向うと職工がヒビやアカ切れで大変なんだ、機械油のついた手をガソリンで洗うんでね。で、グリセリンを薄めて手につけさせるんだが……」途端に奥の方から男の声で、

「ああそれならベルツ水がいいですよ。浣腸かなんかならグリセリンですが、手のあれにはベルツ水がありますよ」そのものズバリと言われ、一瞬どきんとしたが、そこはあわてずに、

「ベルツ水はもったいないんですよ、数が多いんだから」というわけ、うまく五〇〇グラム入りを一ダース仕入れたのである。而も生産者蔵出し価という安値で。以後私は、町内の者という事で、とグリセリンに関する限り、一向



に不自由しないのである。

### その三 エネマシリンジ

これを手に入れる時にはいささかとまどった。私は常々注意深く薬局のウインド、棚、ショーケースをながめたのであるが、凡そこのエネマシリンジを発見することは出来なかった。尋ねてなかったら恥をかくばかりだ。そこで確実な所で医療器械店を選んだ。しかも、注射器専門、レントゲン専門、手術用具専門などあるので、医療ゴム専門店に目星しをつけたのである。ここでも一芝居、

「浣腸に使うとか聞いたんだが、真中のゴム球をシュツシュツとやるやつ、あれ何というのかな。私の所は化学薬品なんだが、薬を見本罐に入れるのに便利だって聞いたから」一息に、浣腸ではないぞ

とばかり言い切ったものだ。

「ああ、それだったらエネマシリンジというのです。これですよ。ホラ、こうしてこのゴム球を押すんですよ。こっちから水が入ってこっちから出ます。一方通行ってわけですね。よくおもちや屋がゴム風船ふくらますのに買いにきますよ」

「成程、うまい考えだね」不図みると、箱の中に、黒い小さな付属品が入っている。

「これは何？」

「それは、これを付け換えて鼻を洗うのに使うんですよ。こっちの長い方をつけると浣腸でさあね。お宅の場合は浣腸の方でやるんですね」

「鼻も浣腸なんかもどうでもいいよ」こういういながら、我ながらうまうまいったと独りほくそ笑んだのである。

である。それにしてもゴム風船用とは気がつかなかった。今度買う時にはこれに限ると考えたことであつた。

### その四 イルリガートル

もう何年前前になつてしまったが、どなたかの手記に、それは女性であつたが、何とも恥ずかしくて買いに行けない。そこで薬局に電話して、「××医院ですが、イルリガートルがあつたら包装しておいてほしい、使いのものをやるから」そして自分で使いになりすまし、何くわぬ顔をして買取るといふのがあつた。

この記事を早速私も利用させて戴いた。そのままの繰り返しになつて恐縮だが、

「新町の山本医院だが、君の所に二〇〇〇cc入りのイルリガートルあるかね」医者らしい威厳をもたせるのに苦労したが、顔がみられないとは何と安心なことである。う。それにしてもテレビ電話ができたらかうはゆかないなどと考

る余裕すらあつた。

「ハイ、ございます。付属品は一通り、リンゲル、浣腸、洗滌、みんなお付けしましょうか」

「そうだね全部つけておいて呉れ給え。これから使いの者に金を持ってやらすから、頼むよ」

といった具合で、最もむづかしかるべきイルリガートルを、付属品一切を添えて、いとも手軽にわがものとしたのである。

最近ではポリエチの破損しないものが出廻っている。これも蒐集したいと思ひながら電話するのも何かこそばゆく、差し当ってガラス製で充分間に合うだけに、そのままになつてゐる昨今である。

かくてマニアなら当然ながら、私も一通り揃えることが出来た、幾多の迂余曲折を経ながらも。浣腸という行為それ自体と共に、コレクションをそつと出して眺め、その手入れ、つや出しに精を出すのも、亦、マニアとしての尽きせぬ喜びである。



## 連載小説

## 宇宙のどこかで

……／＼或る奴隷囚の告白／＼より……

佐 治 麻 造

## 第八号囚の話

首都の郊外にある陸軍監獄で約二年半程苦役した彼は、或日、A要塞へ移送される旨言渡された。連鎖される囚徒は男四名、女三名、その女囚の中に彼は妻の姿を見出した。A要塞は、南へ突出した大きな半島の最南端にある。鉄道の駅から約十軒はなれた陸の孤島の様な不便な所で、海岸は峨々たる絶壁で、船の寄るすべもなく、大きな軍用道路が一本野を越え山を越えて駅と結んで居る。約二〇〇〇名の軍が常駐して居り、数十門の火砲が海峡を扼している。地下の監房内には二十名程の男子の囚徒と、三十名程度の女囚が繋がれて居る。陸の離れ小島に数百人の若者が集まって居るのだから、女

囚達の用途は至極明瞭である。

彼等の追い込まれた貨車は家畜車兼用の貨車で、貨物列車はのろのろと走り、急行なら十時間の行程を丸二昼夜かかった。一隅にある添乗者の室で寝そべって居る二名の看守は、境界の窓から時々鋭い視線を飛ばせた。家畜の糞尿の臭いに満ちた床に正座させられた囚人達は、二昼夜の間、飲まず喰わずで、垂れ流しのまま、隙間から吹き込む娑婆の風を素肌を感じ、自由な世界を垣間見乍ら呻吟するのであった。駅毎の停車時間の永さ。昼間は、ホームを行き来する人々のざわめきを、身を切る思いで聞き、隙間から覗き込む物好きな人の嘲笑を受けて、口の中の鉄の塊りを噛みしめる。夜は向い側の旅客列車の気配を耳にし乍ら、隙間から星空を仰いで、第四種



手錠足錠の残酷ないましめに身悶えして苦しみ、飲物を売る売子の声にみじめな我が身の悲哀を味うのであった。よろめき乍ら貨車から降りた彼等は、そのまま更に十軒の道を歩かされる。脛に喰い込んだ第四種足錠の残忍さ。前の囚人の腰と、その後ろの囚人の鼻環とが連鎖されて居り、誰かが倒れても立止まることは許されない。

彼の後ろの女囚は、彼の妻である。いや、彼の妻であつた女である。舗装道路に鉄鎖が鳴って、其の女囚が倒れた様子で、彼の腰枷が柔らく後ろへ引かれた。鎖の先の妻の鼻環を感じ取って思わず歩みをゆるめた途端、今度は自分の鼻がグイッと引張られる悲しさ。飛んで来た看守の鞭が太腿に鳴り、彼は身を切る思いで腰の鎖を引っ張った。嵌口具から洩れる苦痛の悲鳴を背に、彼は涙で頬を濡らした。倒れた女囚は、続く男囚の不自由な足で助け起され、死力を振り絞って歩き出すのであった。号令一下、道ばたに土下座して額を地べたにつけさせられた彼等の頭上を、隊幹部の家族を乗せた乗用車が二台走り去った。

営門の外で激しいホースの水を全身に受けて洗われた彼等は滴を垂らし乍ら門を潜った。女囚に注がれる淫らな衛兵達の視線。暑い夏の午後の陽を受けて三十分程直立のまま放置された。漸く出て来た保安係の下士官の指図で受渡しが行われた。額と胸と背中の中の番号が刷直される。但し女囚は背中だけで、他は消し去られた。女囚は二桁、男囚は百号以上で彼は一二三号である。監獄と同じ戒具に換えられた彼等は地下の監房に曳かれた。中央の通路を挟んで片側に女囚の独房、反対側に男囚の独房が向い合つて並んで居る。男囚は全部出払って居たが、女囚は概ね全員が泥の様に眠って居た。彼の房の真向いの房に妻であつた女囚十一号が蹴込まれるのを見て、彼

は嬉しさと怨めしさが混つた複雑な気持だつた。男囚達は、いう迄もなく、鋼鉄の首環、第三種後手錠、足錠、そして腰枷と嵌口具で締め上げられ、今迄の級別に拘わらず全員一律に胸鎖をつけられ、そして、男性用のあの残酷な錠を嚴重に嵌められて居る。女囚達は、男囚より錠が一個少いのは当然として、更に嵌口具をも房内では嵌められて居ない。その上、頭髪を伸ばしてさえ居た。用途が用途であるから、容貌に対して払われて居る考慮からであろう。

それにしても、眼前に女囚の身体を眺め乍ら、その様な事柄を想像することさえ許されない男囚達の情けなさ、苦しみ、まして、嘗て妻であつた女の体を毎日身近に感じて苦しみ悶えた彼の悲哀は想像するだに哀れであつた。唯、女囚達は其の用途上、夜は房に居ないことが多い事がせめてもの救いであつた。

男囚達は朝曳き出されて要塞内の雑役にこき使われる。以下彼の話の内、いくつかをお伝えする。

### (便 所 掃 除)

要塞内の便所掃除はすべて男囚達の仕事である。強力なポンプで海水を汲上げて清水化する装置が完備して居て水洗式であるのは非常に有難いことであつた。僅かの掃除洩れがあつても舐め取らされるのは勿論であつたが、それ迄の監獄に於いても其の様な事は当り前のことであつた。新入りの彼は約二カ月の間と云うものは毎日毎日、方々の便所の床を這いずり回ってピカピカに磨かされた。

「お退きよ!! 邪魔じゃないの」

或日、婦人便所の前の床を磨いて居た彼の頭が、入つて来た婦人将校の脚で蹴飛ばされた。

「あら、他のところが空いてるじゃないの？」

連れの婦人将校が云った。

「私ね、ここに定めてるのよ。おや、何と云う眼で睨んでるの？」

用を済ませた彼女は、保安係の下士官を呼んで彼の嵌口具を外させた。

「ウン、ここは未だの様ね。えーと。あの便器がいい様ね」

隣接した男子用小便所に追い立てられた彼は、最も汚れて居る小便器を舐めて綺麗にする事を命じられた。全然手をつけて居ない便器の汚物を舐め取らされるのは、掃除洩れを舐めるのとは訳がちがった。排出口に痰がドロリと溜った便器を鼻先に見て、彼はみじめさに胸が熱くなった。命令は絶対である。全身に湧き上る激しい嘔吐感と屈辱の思い。遂に彼は便器に顔を押当てたまま男泣きの声を挙げてしまった。

(使)

(役)

様子では日曜日らしい或日の朝、彼と女囚十一号とは鼻環を繋ぎ合わせられて、一人の下士官に引渡された。

「俺を覚えてるだろうな？ え？ おい」

手荒く鼻鎖を引かれて、二人揃ってつんのめり乍ら下士官の顔を見て彼は頭に血が上るのを感じた。彼が立派な士官だった時代に、一年程彼の従卒を勤めた男なのだ。

「奥様の方もお忘れではございませんでしょうな？ ハハハハ」

「ハイ、よく……存じ上げて居ります」

嵌口具を嵌められて居ない女囚十一号は、うなだれて唇を噛み乍ら細い声で云った。

「来い!!」

鼻を繋ぎ合わされて居る二人の体が互いにおつかり合い、彼は全身がおののいて呻いた。行き交う将兵達に淫らな言葉でからかわれ乍ら、丘のふもとの下士官用官舎の小さな門を膝でいざって入った。縁先に回され、立ったまま待たされた。小じんまりとした家の中で幼児の泣声が聞え、やがて下士官夫妻が現われた。洒保に出入りして居た飲食店の娘であった其の女房は、嘗ては彼の宅へも雑用等を手伝いに来た事があった。

「此奴等がそうなの？ へーえ、自業自得とは云うものの、ずい分変り果てた姿ねえ。鼻に鎖つけられて、けだものみたい。フ、フ、フ、フ。ちよっと、そっちの奥様、どお、御きげんは？ ずい分お高くとまっていたらしたけど……。いいさまだわ」

「こらッ、不動の姿勢だッ、身動きするな」

「ねえ、あんた。仕事させる前に少しからかってやらない？」

「ハ、ハ、ハ、好きな様にしろよ」

「じゃね、後手錠外してやって。そして男の方の嵌口具も取ってちようだい」

二名の囚人は、重い手枷を両手首に嵌められたまま向い合って直立不動の姿勢を取らされた。鼻環と鼻環を繋ぐ四十センチ程の鎖。彼は、女囚の黒い両眼に湛えた涙と、白い胸の鞭痕を見て、逆流する血に思わず喘いだ。

「二人で、お互いの頬ぺたを撲り合うのよ。ホラ、新兵さん達がよくやってるだろ。最初に右手で、次に左手で。分ったかい。始めッ」  
命じられた事は如何なることでもやらねばならない懲役囚の身。此の下士官の女房が、何の資格でこんな事をさせるのかと怒りがこ





み上げて来たが、勿論その様な気振りを示す事さえ出来ず、哀れな二人の囚人はお互いの頬を撲り合うのであった。手首の鋼鉄の枷が顔に当たらない様に気を付けてやるのが、せめてもの心やりであった。

「もっときつく!! もっと早く!! 手加減すると承知しないよ。それッ、左右、左右……。やめと云う迄続けるのよ」

縁側に腰掛けて脚をブランブランさせ乍ら、女房は声高く笑って眺め入るのであった。

「ああ、もう、堪忍して下さいまし……」

痛さとみじめさとに顔をゆがめた女囚は悲痛な声で哀願した。嘗て妻であった女囚の両頬を、心を鬼にしてビンタし続ける彼の両掌は涙で濡れた。鼻を繋ぎ合わせた鎖が弛んではピンと張り、女囚の首が左右に揺れ、彼の頬に加わる打撃が弱まった。五分間以上も続けさせられたろうか。

「お願いです。お、お慈悲を。自分はいいが、これが、これが可哀想で……。お赦し下さいましッ」

手許が狂った女囚の手枷が頬骨にガツと当り彼は呻いた。

「此奴等まだ夫婦気取りで居やがる。女が可哀想だと? 笑わせやがるなあ。ハハハ」

「お前達、音が悪くなった様ね。性根入れてやらないといつ迄でも続けさせるわよ。ねえ、あんた。此奴達が勝手にやめたらどうするの? どんな罰があるの?」

「ハハハハ、やめやしねえよ。どんな懲戒が待ってるか、骨身に泌みてらあな」

「あんた。タバコ一本おくれよ。お前達、私が此のタバコを

吸い終る迄一生懸命おやり。いいかい？」

ゆっくりとタバコを吸いつけた女房は、紫煙をくゆらせ乍ら小気味よさそうに笑を浮べた。

「よし、やめっ。二人共こちら向いて気を付け!!」

「おいおい。まだ何かやるのかい？」

「あら、いいじゃないのさ。いけないの？」

「いや、別にいけないって云う訳じゃないが、女囚の方は使役に引張りだすのに保安の奴を拝み倒したんだからな」

「それがどうしたのよ？ 懲役囚じゃないの。気が済む迄いたぶってやるわ」

庭下駄をつっかけた女房は囚人達の前に立った。

「お坐り。そして上向いて……」

小憎らしい女房の顔を見上げて、八裂きにでもしてやり度い衝動に彼は駆られた。

「ホホホホ、大分顔がはれて来た様ね。口惜しいかい？ え？ 情けないかと訊ねてるんだよ。返事しないつもりかい？」

「ハ、ハイ。自分は、懲役囚でございます。口惜しくは、ございません……」

「そう。そっちの女囚の方は、どうなの？」

「ハイ。当り前の、当り前の事でございます。あ、ありがとうございます。いました。」

「仲々神妙だわね。じゃ、褒美に葉をやるから顔につけるといいわ。は、れ、が、ひ、く、よ」

二人の囚人の仰向いた顔にペッペッと唾液が吐きかけられた。

「よく顔中に擦り込むのよ。足らなきやいくらでも上げるからね」

余りの屈辱に彼は男泣きに泣いた。

「泣いたって仕方ないじゃないの？ ああ、そうか。嬉し泣きなのね。そら、次は此の草履をくわえて庭を這うのよ」

脚え上げた古草履は、便所で使用したものと見え、悪臭が鼻をついた。鼻環を繋ぎ合わされたままの二人の囚人は四つ這いの尻を蹴られ、鉄鎖を鳴らして庭の周りを這い始めた。

「小さな庭で物足りないだろうけど。十回まわるのよ。そうね、時間は五分間だよ。それ以上かかると、もう十回やらせるから」

縁側から遠くへ離れた時、彼の左側を四つ這って居た女囚十一号は、激しく嗚咽し始めた。

「草履を落すなよ。見てるからね」

「ええ、ああ、ほんとにみじめなものね。手向いたら、死ななきやならないわね。ああ、もう、ほんとに憎らしいったら……」

二人の囚人は、古草履を脚えたまま、不明瞭な言葉で話し合った。

「おい、少し急がないと……」

「ハイ。でも、もう膝小僧がすり剥けてしまつて……。咽喉が乾いたわねえ。あと何回？」

「あと三回だ。ああ、くそっ、辛いなあ」

漸く回り終えたが、一分間以上余計にかかったと云われた。本当かどうか知れたものではないが、どうする術もない。

「申訳ございません。もう十回まわらせて頂き度うございます」

「フン。よし。じゃ今度はね。二人共腹這いになって……」

地べたに腹這った囚人達は両脚を背へ曲げ、両足首を繋ぐ鎖が引掛る様にして、第三種手錠を自ら腰枷の後に嵌め込んで固定した。これで脚を背へ曲げたまま伸ばせない。



「よし。出発」

無慈悲な言葉を掛けられた二人の囚人は、芋虫の様に胸、腹、そして僅かに大腿部を使ってじりじりと地面を這い始めた。啣えさせられたままの古草履の臭い、地面に時々引掛かる胸鎖と腰枷の邪魔さ加減、彼は自分の姿のみにじめさを思うと胸の中が煮え返る様に感じた。

「ああ、もう、私、とても、駄目だわ」

二回目の半ばで女囚はネを挙げて止ってしまった。

「お乳が痛くて……。それに腰から下が棒みたい……」

「おい、草履が落ちたよ。くわえて、な、頑張っておくれ。辛いけど、これが懲役と云うものなんだから」

縁先を這う度に二人の囚人は悲痛な声で哀願し、落した草履を啣え直し嘲笑と罵声を浴び、死力を振るって這い続けるのであった。

「これで何回目かしら？ 五回目位ね。もう退屈したから勘弁してやるわ。あそこに井戸があるだろ。体を洗っておいで」

「あ、ありがとうございます。お慈悲の程、忘れません……」

「あ、そうか。手錠解いてやらなきゃならないのね。面倒ねえ」

「お手数をかけまして、ほんとに申し訳ございません」

「自分の体だけじゃなしに、戒具をよく洗うのよ」

「ハ、ハイ……」

「女囚の方は家の中で働かせるんだから、綺麗におしよ」

冷い水を浴び、盗み飲みした二人の囚人は生返った様に感じた。

「何をいちゃついているの？ 一緒にお風呂にでも入ってるつもりかい。フフフフ。こっちへ来て、脚を少し開いて、両手を上げて」

下士官の女房は、いつの間にか手にした革鞭を振って二人の囚人

の背、胸、脇腹、そして尻や大腿部を交互に楽しそうに鞭打った。濡れた肌に加えられる革鞭は一しお痛かった。

「どお？ 少しはシャンとしたかい。これっ、身動きしていいと誰が云ったの？ フフフ、口惜しかったら手向いしてごらんよ。手は自由にしているわよ」

「お手向いする等、飛んでもござい……」

ピシッ。

「ヒーツ。ありがとうございます」

「今度はこの女の脚ね。どこにしようかしら」

ピシッ。

「クーツ……」

膝の裏側の辺りを鞭打たれた女囚は身をよじって呻いた。

「さ、じゃね、お名残り惜しいだろうけど、鼻の鎖を解くわよ」

社会通念としては先ず当然ではあるが、当の囚人としては理不尽極まる屈辱と苦痛を一応受け終えた二人の囚人は鼻の鎖を解かれて離され、手足の鉄枷を外された女囚は家の中へ、そして男囚は再び嵌口具を嵌められ、両手を二十センチ程の鎖で結ばれた。

「お前はね、先ず庭の掃除を。さっき這いずり回った跡をよく手入れするんだよ。女の方はこっちへおいで」

女囚の鼻環にカチリと革紐がつけられ、グイッと引かれた。

### (射撃クラブの標的)

次の日曜日の朝、彼は実弾射撃場へ連れて行かれた。標的の直ぐ前に約十米程の間隔で木柱が建てられ、地上二米半程の高さでワイヤーロープが渡され、鉄の輪が一つ、ロープにブラ下げてある。彼

の鼻環と、その輪とが鎖で結ばれて吊られた。これで彼は柱と柱の間を往復することは出来るがロープの下を離れることは出来ない。

「一二三号囚!! お前は本日実弾射撃の標的をつとめる。いいな」

実弾射撃の標的と聞いて彼は震え上った。

「ハハハハ、恐ろしいか? しかしな、射手は射撃クラブの御婦人連だ。距離は二百米近くあるし、うまく動き回れば案外助かるよ。けど、何発射ったらお飽きになって止めると云われるか分らんかな、沢山射ちゃ何とやらだ。さんさんもがき回った末、お佗仏ということになるかも知れんな。おい、此の鞭を膝で挟んで気を付けだ。暫く待っとれ」

人気のない射撃場の標的の前で、射手台を遠くに眺めて約一時間、直立不動の姿勢で立たされた彼は、此の理不尽な処置を訴える術もない我が身のみじめさに嵌口具の頬をしとど濡らした。やがて副官夫人を交えた五人の若い婦人達が狩服姿で現われた。

「ね、脚はどうしとくの? 自由にしといった方が余計面白いんじゃない?」

「ハハハハ、奥様方の腕前じゃ、走り回られたらちょっと無理じゃないですか」

「まあ、失礼ね」

「じゃ、両足は一応自由にしときまして、片方に鉄丸をつけときましょう」

彼の両足首を繋いだ鉄鎖が解かれ、右足首に鉄丸が五十センチ程の太い鎖で結び付けられた。

「駄目じゃないのさ。ちゃんと御慈悲を受けないと、動けなくして射つわよ。動き回ればひよっとすると助かるかも知れなくてよ。」

ホホホホ」

最後迄加えられる屈辱を、針の様な視線と共に受け終えた彼は、両手が後で錠される音を悲しく聞いた。ハイポンの注射がなされた。やがて射手台に一人の婦人が腹這ったのを眺めた彼は右足の鉄丸を引摺ってロープの下を或いは早く、或いは遅く往復し始めた。

ヒューンと云う弾音に次いで発射音がダーンと響いた。

二発、三発、狙い射ちは続く。四発目は焦げる熱さと共に頭上を掠め、思わず身を縮めた途端、鼻環の痛さに呻いた。五発毎に射手は交替し、彼は恐怖に背筋を凍らせ乍ら必死に動き回った。嘗て受けた射撃訓練の経験が大きく物を言ったとは云え、二百米の距離に全身を晒して受けた廿五発の狙撃を逃れ得たのは奇蹟であった。射手の婦人連は、今度は五人共射手台に伏して一斉に狙い始めた。前後、左右、そして頭上、足許を掠める実弾の音に、彼は何度か絶望を感じて立止り、そしてつき上げて来る死の恐怖に駆られては、遮二無二歩き出すのであった。数分間とも数時間とも思える時間が過ぎ、轟々たる発射音も微かにしか聞えなくなった。突然鼻に強い衝撃、そして彼はフラフラと倒れてしまった。弾丸が偶然にも鼻の鎖を切ったのだ。彼は立上る気力もなく、地上を更に掠める十数発の弾音を茫然として聞いた。静寂が場内を掩い、やがて多勢の足音と共に彼の頭は蹴飛ばされ、鞭が肌に炸裂した。

「起きろっ、此の野郎!!」

「とうとう掠りもせず仕舞いね。嫌になったわ」

「ほんと。けど此奴、うまく動き回ったものね」

残酷な遊戯に興奮して上気した御婦人連を仰ぎ見て、どうやら助かったらしいと彼は思った。全身の震えは未だ止らない。



「もう飽きちゃったわ。どう？ 皆さん。一服してから、もう一回やる？ それとも助けてやる？」

「もういいわ。助けてやりましょうよ。けど余程こわかったのね。眼がおちくぼんでしまってるわ。未だガタガタ震えてるし……」

「奥様方。お助け下さってありがとうございます。御慈悲の程、決して忘れません」

「分ったかい？ じゃ赦してやる。あ、その軍曹さん。此奴にね、そうねえ三日程してから夜は窄衣着せといてよ。私がいいと云う迄、毎晩よ」

三日経って心身共に稍々恢復した彼は、それから約二十日間というものは、苦役を済ませるや否や、胸鎖の上から革の窄衣をギリギリと締めつけられ、毎晩々々、息絶える程の苦しみを味わさせられたのであった。

### （乗馬クラブのお伴）

実弾射撃の標的にされて射撃クラブの御婦人達のお慰さみ物にされ、魂が宙天に消え飛ぶ様な恐怖を味わった日から一カ月程経った日曜日のことであつた。其の日は彼の月一回の免役日に当り、二十日間に亘って毎夜窄衣で締め上げられ痛めつけられた体を休めることが出来るものと、楽しみに思つて居た彼を、無慈悲な保安掛り下士官は朝食後監房から曳き出した。鼻環にカチリと曳き鎖が付きグイと引っ張られれば嫌も応もない。

「今日はな、乗馬クラブの奥様方が遠乗りなさるからな。荷物を担いでお伴するんだ。分ったか」

鎖鐐を締めつけられた。鎖鐐というのは名の如く鎖製の鐐で、一

個の連結金具から三本の太目の鎖が出て居り、其の中の一本の先が腰枷の後部に嵌め込まれ、両脚の間を潜つて、連結金具からY字状に分岐した他の二本の鎖の先が、腰枷の前部の錠孔に左右少し離して嵌め込まれて、グッと締め上げられる構造のものである。

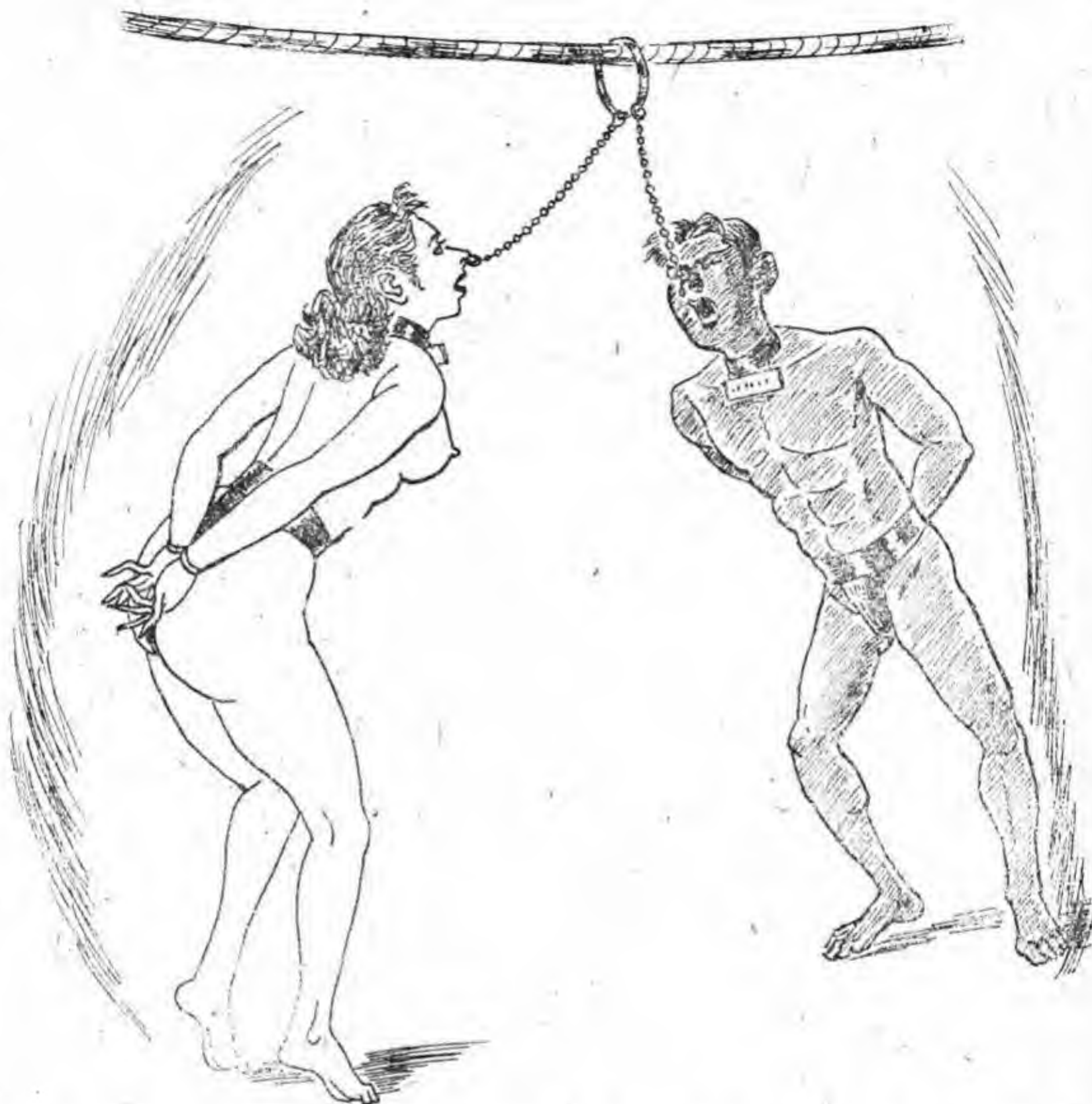
「奥様方のお伴するんだからな。ちつとはキチンとした恰好をせにやな。ハハハハ」

更に真下の連結金具に別の鎖で「歩行姿勢矯正器」がつけられ、彼の両脚の間にブラ下げられた。矯正器と云えば体裁はいいが、つまり責め道具である。直径十センチ程の金属球の全表面に七、八ミリの鋭い注射針がビッシリと植え込まれてあり、その注射針の先端を押すと内部に蓄えられた薬液が適度に滲出する構造のものである。そして其の薬液は皮膚内に滲入すると持続数秒間の間、痛覚神経を強烈に刺激する。陸軍監獄に居た時、獄外に労役の際に二回程此の矯正器を施された事のある彼は、今日一日の苦痛と、みじめな恰好を想像して、我が両足の間にずっしりと吊られた鬼の様な球丸を呪つた。両足首を繋ぐ鎖は少し長いものと取替えられ、その鎖の中央を上方へ吊る鎖の先端は、腰枷の前部の錠孔から抜き取られて例の金属球の下端につけられた。

嵌口具、首環、胸鎖、後手錠、そして腰枷の検査が済むと

「来い!! 奥様方がお待ち兼ねだ」

曳かれる鼻鎖のままに足を踏み出すや否や、鉄鎖の音と共に金属球が揺れ動き、注射針が腿の内側の柔かい部分に当るのを防ぐ術はない。チクリとしたかと思うと鋭い痛みが筋肉を貫き走って三、四秒の後、足裏と頭の先とへ抜ける。乗馬クラブのテラスで冷たいソフト・ドリンクを飲み乍ら談笑して居た四名の婦人は、膝を拡げて



曲げ腰を振ってよたよたと歩く彼を鎖の音で気付いて、その珍妙にして且つみじめな恰好を眺めて吹出した。四人とも皆、キリリとした乗馬姿で、革の長靴が朝陽に光った。

「背負わせる荷物、大きいのよ。後手じゃまずいわねえ」

後手錠を解かれた彼は荷物を顎で示され、鞭を尻に受けて、大きな袋の革バンドに両腕を通して背負った。三十キロは充分ある荷物に押し付けられた胸鎖は背中中の肉に喰い込んだ。

「軍曹さん。手枷を外してよ。私ね、手錠持って来たの。ホデ」

若い婦人が、乗馬ズボスのポケットから冷く光る第一種手錠を取出した。第三種手錠の重い手枷がガタリと両手首から外された。

「後へは回せないだろ。前で嵌めたげるわ。手をお出し」

婦人は、風に乱れるおくれ毛を白い指で優雅に掻き上げ乍ら、揃えて差出した彼の両手首に手錠を嵌め、腰枷の前部に固定した。あらゆる拘束の場合を考えてある腰枷の錠孔の便利さ加



減。

「では奥様。これが腰枷の鍵であります。手錠の鍵はお持ちですね。其の他の鍵はいらないと存じます。飲食物は何も与えないで下さる様お願い致します」

「あら、嵌口具嵌めっ放しで、どうしてやれるの？ 大丈夫よ。面倒だから水一滴だって飲ませはしないわ。じゃ皆さん出掛ましようよ。いいお天気で結構なこと」

彼の鼻環につけられた長さ五米程の革紐の先を左手に持った婦人はヒラリと馬に打乗った。軍曹のお追従笑いを後に、四匹の馬は軽やかに並足で進んだ。しかし、いくら並足でも馬のこととて人間とは格段の差、まして肩に喰込む重い荷物を背に、重い足鎖で歩幅を制限され、その上残酷な矯正器によって一步毎に苛烈な苦痛を味わねばならない彼は、馬上で愉快そうな御婦人達を恨めしく仰いで懸命に走ろうとするが、所詮鼻の革紐は次第に強く張ってしまうのであった。

「初めから、こんなじゃ、全く仕様ないわねえ。プッ。ちよっとあの恰好でろんなさいな」

振向いた彼女達は、憐れみ等、一かけらもない嘲笑を浴せた。

「ぐずぐずしちゃ駄目じゃないの。お前は懲役囚なんだあう。その位の縛られ方は当り前のことじゃないか。ほんとにだらしないいったらありゃしない」

婦人の右手に振上げられた乗馬鞭が彼の胸に炸裂した。

「ね、あなた。鼻紐を放してお仕舞いになったら？ 逃げる気遣いはないだろうと思うわ」

「そうね。これ、お前。じゃね、放してやるから、ついて来るんだ

よ。私達を見失ったりしたら、又標的にしてさ、今度こそ本気で射つわよ。分ったかい？」

「私達のお伴が出来るなんて、分に過ぎた事なんだよ。元将校だったから特に選んでやったんだから、有難いと思わなくちゃね」

年かさの副官夫人が黒い乗馬用長靴を鎧から外し、その先で彼の額を小突き乍ら煙草を吸いつけた。

乗馬の一团は情容赦もなく遠去かり、長い鼻紐を首にグルグルと巻付けられて突放された彼は必死に跡を追うのであった。

要塞から離れるにつれて田畑で働く人々もあちこちに見え、鍬等をかついだ農家の人々にも行き合った。

「可哀想なもんじゃねえか」

「ほんとだ。体中、金縛りにされて……。生地獄だべ。フフ、あの歩く恰好!!」

遙か彼方の御婦人達の乗馬姿を見失うまいと死物狂いの彼の耳には人々の憐れみとさげすみの声も殆ど聞えなかった。精魂尽きて樹陰で立止り、そしてあの実弾の飛ぶ音を想い起しては、ガクガクする膝を踏ん張り踏ん張り再び鉄鎖を鳴らし始めるのであった。小高い丘を越えた彼女達の姿を見失った彼は、矯正器の激痛もものかわ、必死に登った丘の頂上で四辺を見回して途方に暮れた。道は二条に分れて下って居る。乾いた小石混りの地面には蹄の跡さえない。目をつむって左手の道を下って暫く進んだ彼は、右手の森に嘶きを聞き、今下ったばかりの急坂を又もや引返した。森の中で休憩して居る御婦人達を、汗でかすむ眼で見付けた時の喜びに彼は思わずガクリと膝をついてしまった。

「矯正器を地面に当てちゃ駄目よ。薬が無駄に出てしまうじゃない

か。馬鹿!!」

此のみじめな姿で、喘ぎ喘ぎ死物狂いで跡を慕った苦しみをねぎらって貰え様等とは露思わないが、いきなり罵声と共に乗馬鞭の雨を受け、押え切れない口惜しさと情けなさと思わず両手を動かそうとした彼は、グッと両手首に喰い入る鋼鉄の環の痛さに、微かに兆した反抗心も消え飛んで、ヨロヨロと身を起し、両膝を開いて立ちすくんだ。

「荷物を下ろすのよ」

手錠を外された彼は背の荷物を下ろし、飲物の缶詰を取出した婦人達は美味そうに飲んだ。再び荷物を背負った彼の両手を手錠が噛み、又も彼の苦行が始まった。

陽は高く昇り、小川のはとりに馬を繋いだ彼女達は、渴きで目も昏みそうな彼を追い立てて炊事をさせた。久しく口にしたことのない人並みの食事の匂いに彼の全身は震え、涙するのであったが、勿論一滴の水さえ与えられる筈もない。それは彼も覚悟して居た事であるが、若い婦人は、その端正な容貌にも似合わず、意地悪くも彼に鉄砲手錠を施し、少し離れた陽溜りの中でこちら向きに立たせたのであった。ゆっくりと食事を味って済ませ、おしゃべりにも飽きた彼女は、全身に脂汗を浮べて立ったまま苦しんで居る彼に近寄ると、長靴の先で矯正器の金属球を左右に蹴り動かして彼を更に苦しめ、からかい続けた。

「さ、赦したげるから、馬に食事をやって、水を吞ませるのよ。馬の体もよく洗っておやり」

鉄砲手錠を解かれた彼の両腕は意のままには動かないが、そんな事は理由にはならず、乗馬鞭で所構わず鞭打たれ革長靴で腰や尻を

蹴飛ばされ乍ら、彼は担いで来た荷物の中から餌を取り出して四匹の馬に与えた。馬達の食事の間に御婦人達の乗馬長靴を手入れさせられ拍車を磨かされた。

「次は馬に水浴びさせて洗っておやり。皆おとなしい馬だけど、お前の矯正器が当たったら蹴殺されるかも知れなくてよ。お前なんかどうなろうと構わないけど、馬が可哀想だからね。注意しといてやるわ」

水浴を済ませて気持よさそうな馬達に混って、後手錠にされた彼は、太い枝に鼻環を吊られて立たされ、激しい空腹と渴きとをじつと耐え忍ぶのであった。涼しい樹陰の敷物の上で快い昼寝を楽しむ婦人達を眺め、余りのみじめさ辛さに彼の両眼は涙で霞んだ。極度の疲労に立ったまま居眠りしかけてよろけ、腿の内側に加えられる鋭い痛みに目覚め、又も耐え切れずにとろとろしては吊られた鼻環の切なさ身悶えするのであった。約一時間の後、追い立てられて食事の跡始末をさせられた。彼の両手から外した手錠と鼻紐とを左手に持ち、右手に乗馬鞭を握った若い婦人の命じるまま、素手で穴を掘らされ、たっぷり残った飲食物や空缶等を埋めさせられる。

「よく土を掛けとくんだよ。フッフ、恨めしそうな目付きするんじゃないの!! 次はね、大分軽くなったらうから袋に石を入れて」

鞭で指し示された大きな石を袋に入れようとした彼は、こみ上げて来る口惜しさと情けなさの余り、石を地面に拗り出し、打伏して全身を震わせて慟哭した。

「おや、反抗するのかい?」

足蹴と鞭の雨が浴びせられた。

「ね、あなた。勘弁しておやりなさいよ。折角軽くなったと喜こん



でるらしいのに……」

小柄な浅黒い婦人が憐れみをかけて呉れた。

「フッフ、じゃ、特別のお慈悲で赦してやるとするわ。敷物やなんか納って……」

袋を背負った彼は、うなだれて両手を揃えた。手錠を持って近寄る意地悪い婦人に対する恨めしさと、我が身のみじめさに、彼の両手はおののいた。

「今度は、こうしといてやるわ」

ポケットから小さな錠を取出した彼女は、彼の手錠と鼻環を結んでしまった。

馬の跡を追って鉄鎖を鳴らし始めた彼は、鎖鐐に擦れる痛さに嵌口具の咽喉で呻き、鼻環手錠の両手の指先で眼頭を拭いた。

暫く行くと激しい夕立ちが野道を包み、彼は雨滴を頭から浴び乍ら、嵌口具の僅かな隙間から口中に入る雨水を貪り啜って甦った様に感じた。

漸く帰り着いた彼は、遅いとして叱りつけられた。第一種手錠を解かれ、荷物を背から降ろし、我が両手を第三種手錠で後手に固定した彼は、御婦人達に対して地面にひれ伏して、お伴させて頂いた御礼をさせられ、保安係下士官に鼻鎖を曳かれて監房へ追われたが、乗馬クラブのテラスに坐った彼女達は、既に一顧すら彼に与えなかった。

## 軍事施設建設の苦役

要塞監獄で約四年間苦吟した後、彼は南方の島へ送られて軍事施設建設のための苦役を課された。毎朝、革の袋を被せられて顔の上

半分を掩われて目隠しされ、鼻環を繋ぎ合わされて作業現場へ追立てられ、十時間、日によると十二、三時間もみっちり汗を絞られる。毎月、数名は過労で倒れるが、それらの囚徒は慰安所の雑役に回された。苦役の辛さもさり乍ら、慰安婦達の慰さみ物にされて追回されるのも情けないものであった。二カ月程経った或日、疲れ果てた彼は、ツルハシを振り上げようとして重い連鎖に腰をあふられて倒れてしまった。革鞭を加えられ尻に焼烙を当てられて疲労の度合いを調べられた彼は、翌々日から慰安所へ回された。劣等感をもって居る慰安婦達は、自分達より更に下等の人間、それも男性が浅間しい姿で這いずり回って働くのを、さも愉快げに眺め執拗にからかい辱かしめるのであった。彼女達は運動のためと称しては鞭を振り、食物を少しずつ投げ与えて犬の様に口で拾わせ、そして自分達の小便を飲むことを命じて笑いこぼれた。雑役そのものは懲役囚としては軽過ぎる位のものであったが、毎日毎日彼女達の暇つぶしのために加えられる屈辱は、彼にとっては全く死ぬるものなら死んでしまいい度い程のもので、日暮れと同時に軒下に鼻環を繋かれ、毎晩男泣きするのであった。慰安所の雑役に回された囚徒が丁度彼一人であったのも不運であったし、彼が元将校であった事も彼女達の優越感と興味を倍加した様であった。

「餌の時間だよ。そら……」

残飯をこね混ぜた古鍋を与えられ取締りの中年婦人に嵌口具を外して貰った彼は、ひる過ぎの庭に出て、我が両手を後手錠にし、地べたの古鍋に口を寄せた。突然罵声と共に古鍋が蹴飛ばされてひっくり返った。スリッパ一枚で彼の頭上に立った女は、一見して内地人ではないと分る婦人であった。恨めしげに仰ぐ彼の顔に唾が吐き

かけられ、頭を蹴飛ばされ、ぶざまにひっくり返った彼は無念さに号泣した。

「あら、あの人、今朝のことで懲役囚に当り散らかしてるわよ」

「ほんと。けど、あんな女にあんなにされてさ、口答え一つ出来ないなんて。意久地なしだわ」

縁先の声を聞き乍ら、土にまみれた残飯を口で拾い食いする彼は全身が熱くなり、せめて片手だけでも自由だったらと、思わず両こぶしを握り締めて腕をもがいた。

慰安所に回されてから十二、三日経ち、更に一名の囚徒が弱り切った体で曳かれて来た。彼は、それから一週間程の後、再び苦役に帰らされた。

「そ、そんなに、鼻鎖を振回らないで下さいまし」

日暮れも近い一刻、化粧に忙しい慰安婦の部屋々々を、取締りの中年婦人に曳き回された。

「馬鹿ね。鼻鎖は引張るためにつけてあるんじゃないか」

各入口で額を床にすり付け大声で繰返して回る。

「いろいろありますがございました。お気に召さなかった点は何卒お赦下さいまし」

「おや、お別れかい？ お前は中々洗濯が上手だったわね。ベッドの世話は下手糞だったけど。又、あの地獄みたいな仕事させられるのね。ま、仕方ないわねえ。いろいろいたぶったけど悪く思わないでよ。フフフ」

憲兵に曳かれて帰る彼は、既に三々伍々慰安所へ急ぐ兵隊達とすれ違った。

基地化を急ぐ島での苦役一年半の後、彼は再び本国の陸軍監獄で

刑を受けた。永い刑期が漸く終り、或朝彼は鉄鎖から解放された。

「其方の刑の執行は昨日を以て完了した。依って釈放するが、なお三カ年間兵役に服する。いいな。言う迄もないが二等兵だ。戒具は外してやるが、刑余兵のマークを刷込んでおく。整形手術を受ける事も禁ずる。いいか。師団から受領しに来られるから、連れて帰って頂け。生れ変って勤めるんだぞ」

十五年間というものを、苦しみ抜かれた鋼鉄の戒具が重々しく外されて行った。首環を除かれた時の解放感。そして鼻環を抜き取って貰った時には、万感胸に迫って声を挙げて泣き出してしまった。胸と背に(刑)のマークが黒く刷られ、兵用の古衣服一揃いを与えられた。十五年振りに皮膚に触れる衣服の感触は異様なものであった。階級章もなく帽子もない。跣に慣れた足には軍靴はむしろ苦痛であった。体を動かすと、今さっき迄加えられ続けた革鞭の痕がずれて痛かった。師団からの受領者が来る迄、事務室の壁際で直立不動の姿勢をとらされた。

「お、そうだ。おい、手を出せ。引渡す迄は囚人だからな」

十五年間嵌められ放しだった第三種手錠の鉄枷の痕も無残な両手首に、鈍く光る第一種手錠がガチャリと嵌められてしまうみじめさ。頭を動かしたと云ってはビンタを喰い、膝が離れて居るとて向脛を蹴られる。

ひる近くなって漸く師団からの婦人憲兵が一人現われた。指紋と写真の照合が行われた。

「さ、ついておいで。手錠は外して貰ったわね？」

室を出るや否やビンタを喰った。

「何故黙って出るの？ 馬鹿!!」



あわてて扉の所で這いつくばろうとした彼は腰を蹴られた。

「もう、そんな恰好はしなくてもいいんだよ。服が汚れるじゃないか」

立上った彼は嘲笑を受け乍ら大声で、刑の執行に対する御礼を云わされた。

「おとなしくついて来るんだよ。さもないと」

婦人憲兵は上衣のポケットから手錠と捕縄を出して彼に見せた。

「ハイッ。おとなしくお伴致します。お願い致します」

監獄の門を出た彼は娑婆の空気を深々と吸った。

「何だか歩き方が妙じゃないの。まだ何か戒具をつけられてるのかい？」

「イ、イエ、その……。何分長いこと嵌められて居りました足枷や鎖がないものですから。何だか軽くて、フワフワする様で……」

「ホホホホ。成程ねえ。けど御苦労だったよ。辛かったろうね」

人間並に衣服を着て、はきものも穿いて、乗物の座席に腰掛けることが出来た彼は嬉しさに眼が熱くなった。衣服の下には刑余兵のマークを刷られ、これから未だ三年間自由のない生活を送らねばならないのではあったが、兎も角嬉しかった。婦人憲兵が体を動かす度に、ともすれば其の手から延びた鎖が鼻について居る様な錯覚に陥って苦笑いすると共に、心身にしみついた囚人の浅ましい習性とみじめさに、我が身をいとおしくも感じたことであった。

駅弁が与えられたが、箸を使う能力が失われて居る自分を見出し、てうろたえる彼を、婦人憲兵は憐れみとさげすみが混ったまなざしで眺めた。



## 新兵生活

彼が嘗て少佐として羽振りをきかせた師団で、今度は二等兵としての生活が始まった。

彼を見知った人々は殆んど居ないが、四十才も半ば過ぎての新兵生活は身にこたえた。内務班長を始め意地悪い上級兵達は、名を呼ばないで、「刑余兵」とか「懲役帰り」とか呼んで、彼を辱かしめいじめ抜いた。

懲役で受けた苦痛や屈辱とは比べものにならないが、それでも嘗て将校として見て見ぬ振りをして居たリンチが、こんなにも苛烈なものとは想像外であった。まして彼はマーク付きの刑余兵である。ビンタ程度で済む落度でも容赦なく捕縄を掛けられて営倉にプチ込まれた。月に一回、憲兵司令部へ出頭して取調べを受けねばならない。

「五分も遅刻してどうしたの？ 理由は？」

婦人憲兵の前で不動の姿勢をとり、息を弾ませて喘いで居る彼に冷然とした叱声が浴せられた。ギリギリ迄難用を命じた意地悪い古兵達のせいであるが、そんな事を口にすれば如何なる目に遭うか身に泌みて居る。

「申訳ありません。自分が悪くありました」

「そう。そりゃそうと、お前の勤務振りは駄目じゃないの。此の前の時注意しといたろ」

「ハッ」

「少し性根を入れてやろうかねえ」

「ハイ。お、お願い致します」

「服を全部脱いで。褌だけにおなり」

婦人憲兵は太いロープで彼の背や尻や腿を散々撲った。

「少しはこたえたかい？ さ、手を後へ回して」

二カ月振りに手首に喰込んだ手錠は、恐ろしい監獄を思い出させ、彼の全身は戦慄した。婦人憲兵は更に丈夫な紐を、彼の鼻の隔壁に未だ残ったままの孔に通して結び、両肩に振り分けて背中を持って行き、後手錠に結んで吊り上げた。

「窓から見てるからね。庭を駆け足で回るのよ。始めッ」

みじめな彼の姿をいぶかしげに眺めた人々も、胸と背のマークと、全身に残る枷の痕を認めて嘲けり笑った。足がもつれ昏倒せんばかりになる迄走らされた彼は、漸く赦されて婦人憲兵の足許に身を投げ出して慈悲を乞うた。

「よし。では正座おし」

縛しめのまま床に正坐し、内務班長の報告書に基づいて取調べられた。

「いつ迄もこんなじゃ、監獄へ送り返すよ」

「そ、そんな……。そんな事が出来るんですか？」

「おや。出来るか出来ないか。やってやろうか？」

「お、お赦下さいまし。飛んだことを申し上げます」

彼には外出はもとより、通信すら許されなかった。

「おい、懲役帰り。ホラ見ろよ。ここにお前の女房から手紙が来てらあ。一つ二つ三つも。読みたいだろ。え？」

或日班長室で長靴を磨かされて居た彼を班長が嘲けった。彼より三年早く出獄して居る筈の彼女の消息は彼が最も気にして居ることで、日曜毎に外出する同僚達にひたすら頼むのであったが、誰も面



倒がって引受けて呉れる者はなかった。

「お前も、せめて普通の下ぐらいの勤務振りをしてないと、いつ迄経っても駄目だぞ」

「ハイ」

彼は長靴の底の土を舐める様に拭い乍ら唇を噛んだ。それから半月程した日曜日の朝、ガランとした宮内で古兵達の洗濯物をみじめな気持で洗って居た彼は班長室へ呼ばれた。

「俺は今日当直だがな。少し息抜きに外出して来る。そこでだ、お前も少し可哀想だから一緒に連れて出てやろう」

「ほ、ほんとうでありますか。ありがとうございます」

「嬉しいか。ひょっとしてお前の女房に出会わないものでもないぜ。しかし勝手な行動は許さんぞ」

「ハイ。それはよく分って居ります」

「よし。では気を付けッ。服を脱げ。靴もだ」

命令のままに禪一本になった彼は、禪の後の結び目に捕縄が結ばれるのを感じて思わず身もだえした。

「気を付けだ。此の野郎」

煙草の火を尻に押し付けられて彼は飛び上って呻いた。

「駆け足。進めッ」

## ◎ 最近撮影新版マゾヒスチック・フォト分譲◎

モデル—女サド役（絹川文代）マゾ男（愛読者、海野弘三）

大手札型印画紙（9×13センチ）焼付、各組三枚一組 三〇〇円（送共）

### 全部未発表の

#### 極最近撮影のM・F。

圧倒的人気にて注文殺到の好評

広く寄稿家や愛読者の中から募ったアイデアを元にして、最近誌上で募集した新しいMモデルを使用した全く新しいMフォトです。左の通りマゾヒスチックな素晴らしい場面を展開しております。

顔乗り（略号かお）遠慮のない女御主人様

ふっくらと肉づきのよい足の裏がM男の顔にぴったりとふさがり、やがて全体重がかかる。鼻も口もひしゃがり塩辛い足の指が口に入る。荒縄で後手に縛られているので、只、顔を振って呻くだけ。

足舐め（略号あし）さげすみの冷酷な視線

「この横着犬奴が」と、さんざん鞭で仕込まれた挙句、女御主人様の素足の指先や足の裏を舐めさせて貰う犬男。無理矢理、口の中へ押し込まれる足の拇指、しかし首輪を持たれた犬はどうもできない。

首締め（略号くび）容赦のない締めつけ

すらりと長く伸びた白い脚がM男の首をがっつきと捕える。後手首を揃えて括られた男は這いまわって逃げるが、執拗な脚はしなやかに動いて首を締めつける。今や断末魔の恍惚境が訪れるのだ。

犬の芸（略号いぬ）厳しい犬に対する仕込

首輪を締めて鎖を持たれた可愛い犬男、女御主人様の前でチンチンをし、お預けをし、ムチうたれながら仕込まれる犬の芸。うまく覚えたら女御主人様の食べ残しを足の指に挟んで貰って頂く。

尻敷き（略号しり）誇らしげなサジスチン

勝ち誇った生々とした美女と、女の大きな尻の下に呻吟してもがくMの醜男の哀歎と喜悅とを織りませて、絶妙のコントラストをもって描いた快心のMフォト。是非Mの慰安のために一組を。

縄尻を手に自転車に跨った班長は号令を掛けた。ゲラゲラ笑う營門の兵達の声に口惜しさがこみ上げた。自転車の左前方をはだして走る彼に班長は後から道順を指示した。次第に駅の方へ近付き、道行く人々も繁くなり、恥かしさで彼の全身は火照った。

駅前の自転車置場に自転車を立て、彼の腰縄をハンドルに結んだ班長は

「こちら向いて。此の棒を膝に挟んだ気を付けしとれ。ハハハハ。恥かしいか？ 泣くな泣くな」

棒切れを彼の膝に挟ませた班長は更にポケットから荷札を取出し、細い針金を彼の鼻の孔に通して結び付け、二三回ビンタを与えて、近所のトルコ風呂の建物の中へ消えた。

「これ、どうしたの？ 可哀想な新兵さん」

「胸の印は何だろ？」

刑余兵のマークに就いて知ったかぶりに説明するお節介者も現われ、人々の視線はさげすみに変った。

「あの鼻の札は何て書いてあるんだろ？ 御自由にお摸り下さい、か」若い男が現われて面白そうに彼にビンタを加えた。絶えず七、八人の人々にジロジロ見物されて、じっと不動の姿勢をとり続ける彼の心中は怒りと悲しみで溢れた。

「まあ、あなた。何と云う……。ね、私よ。あなた……」

突然聞えた懐かしい声。そして質素なみなの妻の姿が目に入った。

「一体どうしたの？ もう刑は終ってる筈だと云うのに」

「お、お前。会いたかった。元気か？ どうしてる？」

「手紙見せて貰えなかったの？」

彼等二人は、もはや人眼もはばからず涙声で話し合い、人々も同情して呉れて立去って行った。

「私ね、復籍の手続済ませたのよ。だから私達は今でも夫婦よ」  
「それは、ありがとう。お前のことが気になって気になって……」  
「私の責任だわ。こんな風になってしまったのも、私が悪かったの。赦して……」

彼女は出獄後、嘗て師団に出入して居た商人の家に女中として勤めて来たのであった。そして二、三日「面会させてやるから日曜日の午前十一時に駅前に来る様に」との知らせを受け、喜び勇んでやって来たという訳であった。

「こんな、こんな恰好にさせとくなんて……あんまりだわ。それに此の痕!! 今でも鞭打たれてるの？」

彼女は彼の体を撫でて口惜しがり、彼はおののいた。

「ね、待ってるから、辛抱して動めてね。ヤケ、起さないで」

班長がニタニタ笑いながらやって来た。

「ほう。うまく会えたもんだな。おい懲役帰り、よかったじゃないか。え？ ハハハハ」

「ハイッ。班長殿の御蔭であります。有難とうございます」

「ありがとう存じました。あの……何卒……此の……男をよろしくお願い致します」彼の妻も唇を噛み乍ら札を云うのであった。

「ハハハハ……。ああ、いい気持になった。トルコ風呂はいいですね。では、奥さん、じゃないおかみさん、気の毒だがこれで……。来い!! 駆け足。」

妻の眼前で五、六回ビンタされ、禪に結んだ捕縄を引かれた彼は涙をポトポトこぼし乍ら自転車の前を走り出した。力を入れ続けて居た膝がガクガクしてよろけた彼は、革長靴で蹴倒されて地面に転び、グイと禪を引張られて起上って走り出す。再び罵声と共に蹴倒されて地面に這った。遠去かる彼の哀れな姿を、彼女はいつ迄もじっと見送るのであった。

(未完)



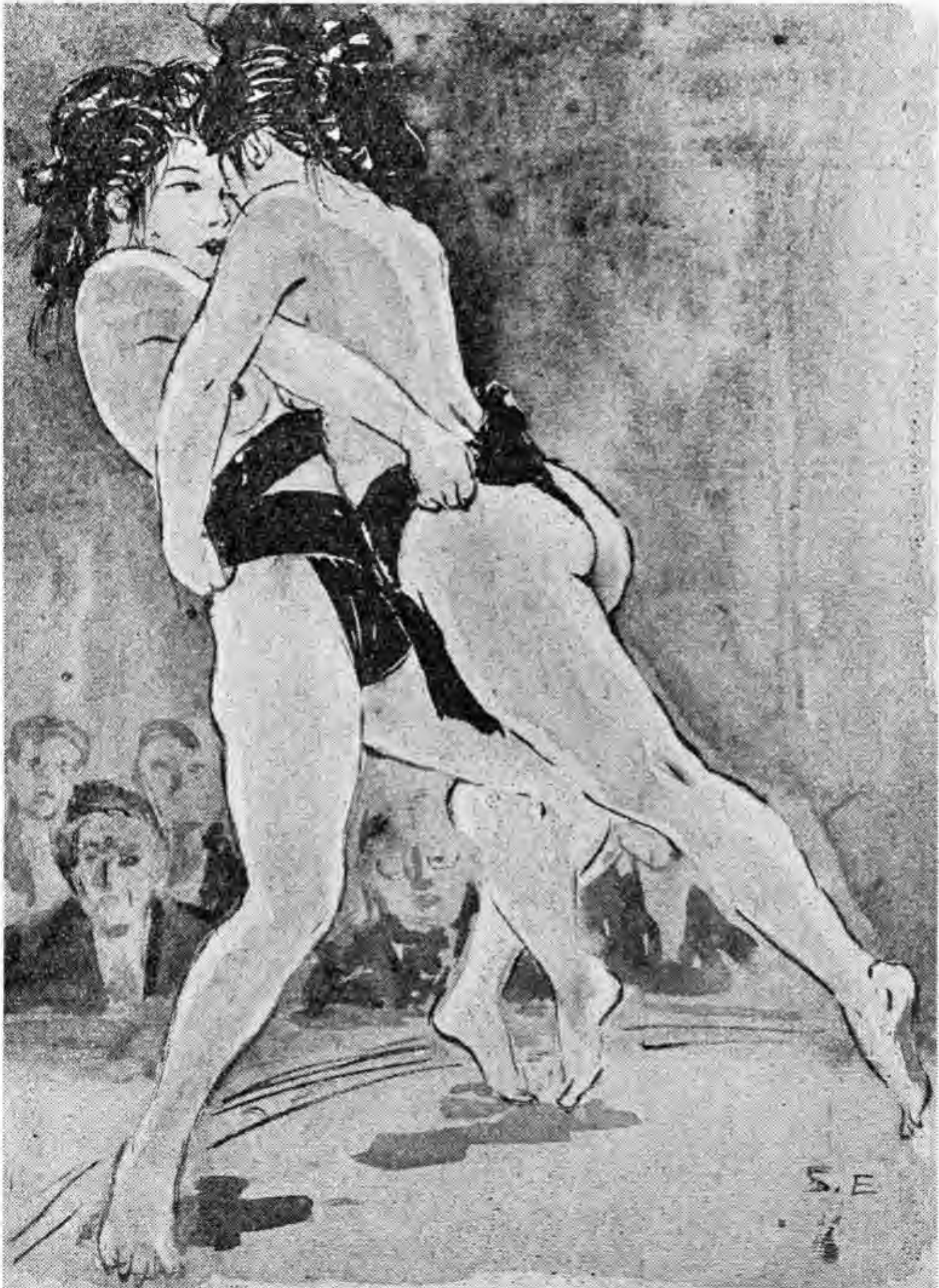
女斗美絵巻  
シリーズNo. 4

「土俵際の攻防」

提 供

雪 崎 京 人

一気に寄り出そうとするのを、グッところえる。  
白肌を朱に染めての攻防は正に女相撲の華。





サド・マゾ・フェチ・女装・

切腹・自己愛の異常性に

憑かれた男の告白

## ふんどし 悦

衣 軍 一

(一)

私が「ふんどし」に異常な興味を持ちはじめたのは小学校の二年生の時、生れて初めて時代劇映画を見た時からだった。映画の題名は覚えていないが白井権八が多勢の御用役人に追われて行くうち、着物の裾前がはだけて帯広裸となり、そでがらみで袖をち切れられ、ほとんど半裸のさんばら髪で、白い晒の腹巻に、ふんどしの「たれ」をひるがえして奮戦する悲壮な姿に、私はかたずをのみ、息を殺して見守っていた。そして六尺棒や十手、刺股（さすまた）はしごなどで四方八方から痛めつけられた権八が、そのうえ首や腹に捕縄をかけられ、ほとんど身動きできなくされながら、さらにくり出してくる「そでがらみ」を、足を蹴上げて防ぐ瞬間に、ふんどしのたれがまくれ上り、権八の尻にくい込む白い従帯がチラリとみえた時、私は心臓を締めつけられるような強いショックを受けた。それ

は瞬間であったがために一層強烈に私の網膜に焼きついてしまった。その時の俳優がだれであったか、またどんな顔をしていたかも、私は忘れてしまった。しかし顔や名前はどうでもいいのだ。御用役人と斗う白井権八の純白の「ふんどし」、それだけが私にとって、その映画の主役であり、すべてであった。

以来私は「ふんどし」のとりことなった。

(二)

それからというものは、時代物映画や小説のさしえなどをみて、まず目がゆくのは、「ふんどし」であった。映画の忠臣蔵なども討入りの場面で吉良方の清水一角や小林平八郎が赤穂浪士を相手に泉水上で戦う時、袴などをはいていたのでは私にとってはみる価値はないのだ。寝間着の上に女の着物を羽織っただけの平八郎が、やや大き目のふんどしのたれをなびかせて浪士と激しくきり結び、



ついに槍で腹を突かれて、その柄を握ったまま仰向けにくず折れ、

ふんどしをみせながら雪の上に最期をとげるといのが、私の期待

する討入り場面なのである。各映画会社の長い間の数多くの忠臣蔵

の中には、このような私の期待を満足させてくれる作品もあった。そんな時、私は何回もその映画館の前へ行って、スチール写真のふんどしに見入ったものだった。どんな映画でも、ふんどしのみえるものがあれば私は何回も映画館の看板をみにいった。

### (三)

そのうちに私は自分でふんどしがしてみなくなった。しかし私の家にはふんどしをしているものがいなかったし、子供の私には適当な長さの布も手に入らなかったのだ、私は某夜ひそかに白地の手拭いの一端を紐に結びつけて速成越中褌を作り、家人の目を盗んで、ふとんの中で腰に巻きつけたりしてみた。手さぐりでぐっと締め上げると、股にくい込む木綿の感触がたまらなく、私は次第に息がはずんでくるのを覚えた。そうして私はふとんの中に首をつっ込み、生れて初めて締めた自分のふんどしを眺めてみた。目の前にみるふ



ふんどし

んどし、しかも自分が締めている足を上げた時、たればかりでなく、その奥の縦帯も「赤ふん」であることを確認して、私はいよいよのしない喜びに襲われ、心臓がドキドキ痛いように脈うつのを覚えた。その芝居は二晩つづいたが、私は二晩とも目を皿のようにしてかぶりつきをはなれなかった。

戦前のそのころは、銭湯へ行くとお客の四分の一ぐらいがふんどしを締めていて、そのうちの大半は越中褌だったが、何人かは六尺ふんどしを締めていた。私は鏡の中で大人たちのふんどしを飽かずに眺めた。六尺ふんどしの締め方も、みているうちにいつの間にか覚えてしまった。私は早く大人になつて、いつもふんどしをしていられるようになりたいと思った。

## (四)

小学校四年の時の夏祭の舞台におなじみの「白井権八」がかかった。廊の段の彼は赤いふんどしのたれをみせていた。私は神殿の一番前に陣取っていた。彼がさつと

た。男は大の字に広げた脚を時々動かしてわめいていたが、そのうちグーグー寝込んでしまった。介抱役の四、五人はついに彼を手とり足とりして、みんなでかつぎ上げた。手足別々に四、五人がかついだのでふんどしは一層よくみえるようになった。彼は死んだようにぐったりしてかつがれていた。

私は下からそれを見上げ、ノドにこみ上げてくる切ないような気持ちを押えながら、彼が神社の社務所にかつぎ込まれるまで、あとをついていった。

私はその酔っ払いがうらやましかった。自分もふんどし一つで死んだようになって、あのようになんにかつがれたらどんなにいい気持だろうかと……と胸が締めつけられるような思いをどうすることもできなかった。

## (五)

それから数年たって、私の家の近くの建築現場に、赤いふんどしをする不思議な女の子がきた。今

になってみれば、その少女が極端な露出症だったのだなと合点もゆくのだが、そのころの私には全く妖しい女の子に思えた。

その少女は大柄ではあったが、顔をみたところ小学校六年生ぐらいだろうか、お下げ髪 of 可愛い子だった。ちょうど原っぱの中に新しい家が建ちかかっており、壁でもかわかしていたのか大工も入らず、しばらく無人のままになっていた。そこへその女の子が、自分よりやや小さい小学校三、四年ぐらいの女の子二、三人と遊びにくるのだが、まことに奇妙なことにその子はそこで裸になつてしまうのだ。私の友達がまずそれを発見して、私に告げた。私は友達と一緒にそつとその家に近づいてみた。つみ上げた材木の陰からそつと覗いてみると、なるほどその女の子は花模様のゆかたを脱ぎ捨てて裸で仰向けに寝ており、よくみると裸の子は赤い絞りの兵児帯をふんどしにしてお尻から腰に回



しており、私は少女のお尻にまきついた赤いふんどしを、息を殺してくい入るようにつめてしまった。それは私にとって夏の日ざしのように強烈で目くらめくような印象だった。

私は生れて初めてみる、年の割に豊かな両脚の間の赤ふんどしに魅入られ、思わずゴクリと生唾をのみ込んでいた。その少女がどこの子なのか、何という名なのか、その後びったり現われなくなってしまうので、ついにわからず終いになったが、彼女が相当強い露出症であり、早熟であったことは間違いないようだ。

しかし何はともあれ、野外で見た少女の赤いふんどしは、日がたち年がたつにつれて、その印象がますます強烈になり、美しくなり、私を刺激するようになった。

# (六)

また、そのころの夏祭りの舞台に一人芝居というのがあった。丸橋忠弥が捕縛されるところを、一

人でやってみせるのだが、この忠弥は空色の絹のふんどしをしていて、前垂れは空色だったが、腹巻は白羽二重だった。この芝居は、後年、私が自分で一人芝居を楽しむ時のヒントになった。

舞台の両端に一本ずつ捕り縄の一端を固縛しておき、刀をふるった丸橋忠弥が多勢の捕方を相手の身ぶりよろしく舞台狭しと荒れ狂いながら、片肌ぬぎになり、さらに双肌はだけて舞台の端の捕縄をとり、先端の投縄のようにした輪を胸にかけて、そのまま中央へ走り出ると一方の端が床に固縛してあるのでピーンと縄が張って、うしろから捕り縄をかけられたようになる。ここで丸橋忠弥はうしろへのけぞって尻もちをつき、足が高く上る。その時、空色のふんどしが丸みえになる。私は胸がドキンとなるほどの衝撃をうけ、喉はカラカラにひりつき、呼吸が乱れて、身体が小刻みにふるえるのを覚えた。丸橋忠弥はさらにもう一

本の捕縄を太ももにかけて暴れ回り、なおたるんでいる縄を腹や腕にもからませて、ザンバラにしたかつらをふりたてふりたて、残念そうな思い入れて召捕られるところで幕となった。

その夜、私は例の速成越中一つになり、畳の上をころげ回った。

# (七)

このような「ふんどし」に対する私の特別な興味というか、性感覚は、その後中学に入っても、大いに進学しても依然として劣えぬどころか、むしろ、ますます強くなっていった。

しかしどういふものか私は、相撲のまわしには興味を覚えないのだ。あれはふんどしというより、相撲とりの仕事着かユニホームのようには感じない。私にとって「ふんどし」とは、ゴツゴツしたものではなく、木綿か絹の、やわらかくびたりと腹に巻きつくものでなければならぬのだ。

# (八)

やがて私は軍隊に入った。軍隊では越中褌を常用していたが、後ろ帯を紐に巾広く縫いつけたあの越中では、ふんどしを締めたという感じが少なく、また全員が同じものを着けて同じようにいそがしく、くたくたになっているような環境では、ふんどしによる特別な感じは一つも起らなかった。しかしその軍隊生活から、以後私はふんどしを常用するようになった。そして戦後、私はサラリーマンになった。子供の時あこがれていた常時ふんどしのしていられる待望の大人になったわけだ。

現在私は家にいる時はいつも和服をきているが、下着は必ずふんどしとさらしのはらまきだけである。真冬でも着物の下に浴衣や襦袢を重ねることはあっても、シャツや股引のたぐいは絶対にはかない。もちろん就寝の時も寝間着の下は褌一本である。さらしを胸まできつく巻きつけると真冬でも決して寒さは感じない。むしろ背中

までキリキリ巻いたさらしは非常にあたたかいものである。

しかし私はサラリーマンであるから昼間勤めに出る時は背広を着る。背広のズボンはその構造上、下着にはふんどしよりパンツの方が具合がいい。そこで私は毎朝起きるとふんどしをはずし、パンツ、シャツ、ズボン下と背広用の下着に着かえる。そして一日の仕事を終えて帰宅してから、もう一度ふんどしを締め、腹巻を巻いて和服を着るのである。休日は大いとのふんどし、腹巻の上から着物をきるだけになる。

## (九)

「ふんどし」にもいろいろの種類や締め方があるが、私はふだんは六尺褌をしめている。気分によって越中をする時もあるが、私の越中褌は、うしろ帯を紐にぬいつけず、袋縫にしてひもを通し細く絞れるようにしてある。越中の時は前だれがあるが、六尺の場合には

さらしの腹巻のまき始めを適当な長さにとって「たれ」をつくり、前帯にはさみ込んでから巻きつけると「たれ」の長さが自由自在に調節できる。またさらしの巻き終りを六尺のうしろ縦帯に巻きつけて一たんきつく締め上げてから固着すると、寝くずれするようなこともなく、一晩たっても朝まで快よく緊縛している。

私はまた、さらし一反を切らずに長いまま全部使って、六尺を締め、たれをとり、腹巻まで一本ですますこともある。締め方は、まずさらしの始めの方を六尺ふんどしと同様にしめて、うしろで止める。それでもまだ一反の晒の大部分が長く尾のようにたれ下って残っているから、それを全部一たん後ろ縦帯をくぐらせてから前へ回し、前帯にその巾なりにはさみこんで止める。そして「たれ」をとり膝の上あたり適当な長さで二重に折り返し、再び前帯ではさんで止め、それからあとは全部腹から

胸へ巻きつけ、巻き終りをうしろ縦帯に通して締め上げ、縦帯が痛いほどこしめつけてから固着する。この場合、たれは二重になっているから、しっかりしている、さらし一反全部を体に巻きつけるのだから、腹や腰のしまり具合もきっちりして気持よい。夏などはこのままの姿で寝ることがしばしばである。またこの一反ふんどしの六尺の二重目の部分を尻へ回さず、たれにして下げておき、残りを全部腹巻きにしてもよい。ただしこの場合は縦帯もたれも一重になるが、たれは始めになるべく長くたっておき、はらまきをまく時にたれを腹巻で押えながら、長さを調節するとふんどしもゆるまずたれもしっかり押さえられている。

戦後、私も結婚した。妻は特別の美人でもないが醜くもない。中肉中背、どちらかといえばムッチリ型、色は白いと彼女自身自負しているが、これも飛びぬけて白いわけでもない。女優をサンプルにして類型してみると、木暮美千代型といったところだろうか、要するに十人並みの女性である。その彼女に結婚後数年たった時、私はふんどしを締めさせてみた。はじめはいやがるのをむりに、さらしの六尺褌を締めさせたのだが、私はそのセクシーな美しさに目をみはった。彼女が白いと自負するその肌にくつくくい込んだ純白のふんどしをみた時、私は思わずウームツとうなってしまうた。

初めは嫌がった妻も、ふんどしをすることに、私が異常に執着することを知ってから、次第にいやがらなくなり、ついには自分から積極的にふんどしを締めるようになる、私と同じように夜は必ずふ

## (十)





ふんどし

んどし一本になり、その上に寝間着をきて寝るようになった。初夏から初秋にかけての薄衣の季節など寝間着も着ずに全くのふんどし一本で寝ている姿には、わが妻ながらぞくぞくするような妖しい美しさを感じる。そのふんどしも、さらし木綿ばかりでなく、色とりどりの布地をモッコ、越中六尺などに仕立てて、気分に応じてとりかえるのである。現在ある各種のふんどしの色は、木綿の赤、絹とさらしの白、化繊の真紅、同じく

濃いピンクと淡いピンク、絹の藤色、水色空色、紫、それに緋縮緬、もみ、などであるが、結局赤か白が一番美しいようだ。女の白くやわらかい肌にこれらの色ふんどしが、きつく締まっているさまは、何ともいえず艶めかしいものだが、私も時々これを締めて鏡台の前であらゆる姿態をとって楽しんでい

る。私が白の六尺に晒の腹巻、妻が真紅の六尺に緋縮緬の腰巻をして、鏡の中をのぞくと、お互いの紅白の縦帯のコントラストの美しさ

さに、私たちは恍惚となってしまうのである。

## (十一)

私はまた時々ふんどし一本になった妻を縛る。しかし彼女は縛られることにはなかなか馴れずにい

真や絵でなく現実のものであるだけに、凄く刺激的である。しかし、そのような姿をみるためには、嫌がる妻をなだめたり、すかしたりしなければならぬ。ふんどしを締める時はきつく締め上げながら「あぁいい気持ち……」などというようになった彼女だが、縛られるのだけはなかなかうんといわないので、そのかわり……というわけでもないが、私は自分を縛ることを覚えた。自分をしばって鏡でながめるのである。私には妻を縛りたい、女をしばりたい、というサディスティックな気持ちとともに、その裏がえしともいうべき、自分を縛って、しかもその姿を眺めて楽しむというナルチシズム的マゾヒズムの要素が半々にあるらしい。自分を縛って鏡に写す時、私はふんどしの上に大たい女装をする。これも女を縛りたいという心理の裏なのだろうか。

ここで子供の時にふるえながらみたあの丸橋忠弥の一人芝居が役

に立ってくる。あの時、舞台の両端に固縛した捕縄を思い出し私は部屋の四隅の柱の鴨居の上あたりに？形の金具をネジ込み、それに長い木綿ロープの端をくくりつけ、もう一方の端を部屋の対角線の柱につけた金具に縛りつける。

両端を柱に固縛しても縄は畳の上になおとぐろを巻くぐらい長くして、もう一本の縄を同様にたるみをとって別の対角線の柱に結びつける。こうして二本の縄は部屋の四隅から十文字に交叉して柱に結びつけられた形になる。

それから私は一人芝居に入るのだが、もち論これは妻子の留守の時でなければできない。毎年妻は夏休や冬休になると、子供をつれて故郷へ旅行に出る。その時がチャンスだ。私は心おきなく丸橋忠弥になり、白井権八になれるのである。

まず、芝居にかかる前に風呂をわかしておく。これは化粧落しばかりでなく、全身につく縄目の跡

を早く消すためにもなる。そして鏡台をみやすいところにおき、妻の例の色ふんどしを全部出して、一番初めに赤色のモッコ、これは水泳のサポーターのような、それをもっと小さな前袋以外は尻へ回る部分も全部赤いヒモになっているのをつける。その上から緋縮緬の六尺をしめ、二重目の縦帯の尻へ回った部分は固着しないで後帯へかけるだけにしておく。これはあとではずれて真紅の「たれ」になることを計算してのことである。その赤ふんの上からこんどは桃色化繊の越中をつけ赤ふんをつつみながら前へ回してピンクのたれをたらししておく、そしてさらにその上から巾広の白羽二重六尺の一端を、赤ふんのうしろ腰帯にかけて、それまで締めた三重のふんどし全部をつつみ込み、桃色越中のヒモに通して残りで大きなたれをつくる。前の桃色のたれは、ちよっとはずれればだらりと下るようにかかるく畳んで前へはさんでお

く。そしてその上から晒の六尺を二つに折って胸高にかかるく腹巻を巻く。こうすると一番下に赤のモッコ、その上へ緋縮緬、ピンクと重ねた上に白羽二重でつつんだ四色のふんどしを締め重ねたことになるのだが、一見一番上の白ふんにさらしの腹巻だけのようにみえるわけだ。なぜこのようにするかというと、芝居の途中でつきつきにふんどしの色をかえて楽しむためである。

ここまでですでに私の体はワナワナふるえはじめが、さらにはずむ息を押えながら、妻の緋縮緬の腰巻をまき、その上へピンクの長襦袢を羽織る。ぞろりとした女物の感触が一層陶酔感をさそう。そしてさらに花模様のはか浴衣をつけて伊達巻を締め、会津みやげの朱塗りの白虎刀の大小を、落し差しに腰に差す。頭には紫の鉢巻を横で結び、結び目を長くたらせば鏡の中には女装も華やかな白井権八が出来る。

私は鏡台の前にあぐらをかき、緋の腰巻の下から白羽二重の大きなたれをのぞかせ、口紅を塗り、白粉をはたき、目ばりを入れると、そこにはもう私はなく、少年の日に私をしびれさせた白井権八そのものが、あの刺激的な縦帯をみせながら座っているのである。

顔をつくってから私は、いよいよ立上って芝居に入る。十文字に張った縄の傍にふみ台と六尺棒を三本ばかりおいておく。この六尺棒は御用役人が使用し、権八を痛めつけるものだが、富士山などで土産用に売っているものや、竹の棒を代用している。ふみ台は片足をその上にのせて太ももを出しふんどしをみえやすくするためなどに使う。

かくして花模様のゆかたに赤と黄ダンダラの伊達巻を締めた白井権八が、まず、御用役人にとり囲まれて朱塗りの大刀をすらりと抜く。左手でくり出してきた六尺棒を握りながら片足をふみ台にかけ



ると着物の前が割れて桃色の長襦袢と緋縮緬の腰巻の間から太ももがのぞき、白羽二重の大きなたれがだらりと下る。

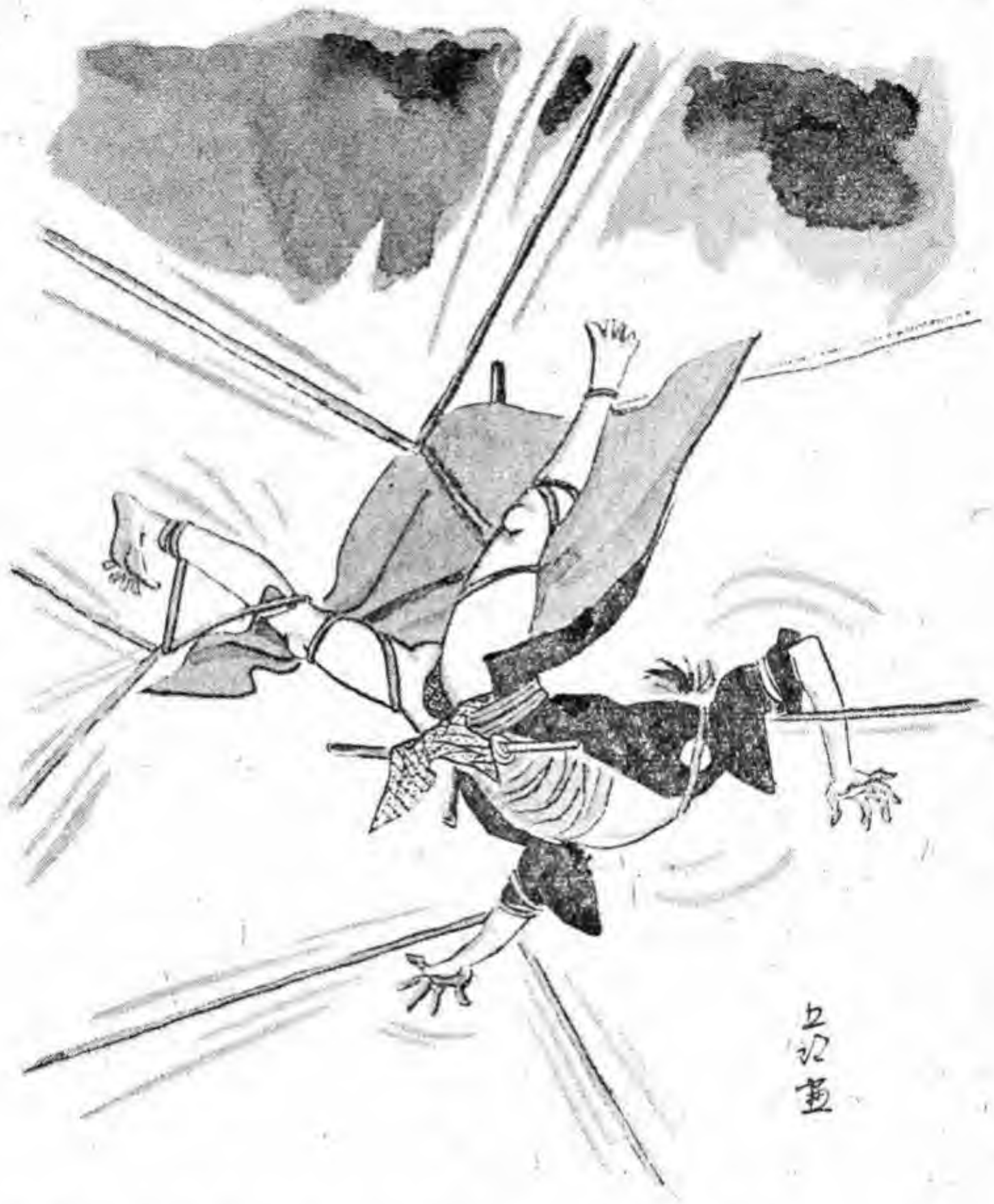
たちまち役人どもの乱斗となり、右に左に打ちかかってくる捕方を斬りふせているうちに次第に伊達巻が緩んできて、浴衣の前がはだけ、胸の晒しの腹巻がみえてくる。足を六尺棒ですくわれて尻もちをつく、ぱっとすそが割れて両太ももが大きく開き、燃えるような緋縮緬の腰巻に純白の羽二重のふんどしが縦帯まで丸みえになる。しかも、曾ての映画のように、一瞬の出来事ではなく、そのままの形で足の間に六尺棒をこじ入れられた権八は尻にくい込むふんどしの背中の結び目までみせて立上ろうとしてもがく。もがくうちに白の下につつま込んだピンクや緋の帯がチラチラみえかくれる。鏡台は刀の先で一番見易い角度に動かして調節する。

浴衣はずり落ち片肌ぬぎ、桃色の長襦袢も前がはだけ、赤い腰巻から白いたれが大きいぞくという乱れた姿になっている。その時、さっと胸に捕り縄がかかる。ふりほどこうと後ろを向くとこんどは足にからみつく。もちろん四隅の柱にかけて畳の上にたるませておいた縄を自分でかけるのである。刀をふるって十手、刺股を防ぐうち縄はさらに腹へも巻きつく。また六尺棒が襲ってくる。ついに浴衣は双肌ずり落ち、長襦袢も片肌ぬげ腰巻もまくれ上って縄がからまり、強くい込む。

「ウーッ……」と権八が首をのけぞらせてうめきながらどうと横に倒れて縄にとられた片足を高く上げた時、白羽二重の前袋の間に六尺棒をねじ込まれる。やっと思いで立上る瞬間、引っぱられた「白ふん」が外れ、その下の桃色越中がむき出しになる。長襦袢まで双肌脱ぎの上半身裸になり、胸にかけられた縄にひかれて後ろへ

反りかえるとたん、たたみ込んでおいたピンクの「たれ」がバラりと下る。赤い腰巻の間から桃色の長目のたれを下げた白塗りの権八の姿は女のようにあでやかだ。しかも胸にも腹にもくびれるほど捕り縄が巻きついていて、縦帯に六尺棒をつっ込まれた時、一たん尻の縄が外れたが、再び桃色ふんどしの上から尻の割れ目へきつく捕り縄をかけられ、そのうえ別の縄が十文字に交叉し、しかもその間に六尺棒がこじ入れられる。ふりほどこうとして脚を上げると、今度は太ももにくびれ込むほど縄がまきつく。いまは防ぐのに精一杯、無我夢中で斗ううちに、巻きついた縄は余裕がなくなり、四隅からピーンと張りつめ、どうしてこんなになってしまったのかと思うほどこんがらがって、胴や股の思いがけない部分を強くしばりつける。二の腕や太もものあちこちが、ちぎれそうにくびられて身動きもとれなくなる。

それでもなお死力をつくしてぬけ出そうともがくうちに桃色の越中襦袢は外れ、緋の腰巻もさらしの腹巻もほどけ落ちて緋縮緬のふんどし一本という、はだか姿になる。縄はさらに四方からきつく張りつめ、無理に体を動かすと胸や腹がギュッと締め、息もできなくなるのを我慢して、も早両手は



ふんどし

空をつかんでしまう。顔をねじって、やっとの思いでみる鏡の中には、宙に浮いたがんじがらめ、赤ふん一つの権八が、こちらへ大きく脚をひろげて、その足指までひろげて虚空をつかんでいる。尻へ回る真紅のふんどしに、くい込む縄目には、ぬげ落ちたピンクの長襦袢や、緋の腰巻がからみつき、捕われ寸前の白井権八のあわれな姿に花やかな彩りをそえている。

身体の重みで縄はさらにぎりぎりくい込み、権八はたえられなくなってくる。反り返らせた全身にワナワナとけいれんが走り出し、ハアハアと肩でつく息も大きく乱れ、時にはとぎれる。首をほとんど逆さになるほど伸ばして顔をのけぞらせ、手足をつっ張り、その指でしきりに虚空をつかみ直す。

「赤ふん」一つで縛り上げられる快よさに、すでに恍惚境に入った権八は、目はひっくり返して白目ばかり、口は半ばあけて歯をくいしばり、ウーン！という、うめ



き声とともに、宙吊りの全身をひくつかせたかと思うと、グッ：グエーツ：と、異様な叫び声を挙げ、最後まで握っていた刀を投げすてて両腕に巻きついた捕り縄にすがりつき、全身を弓のようにそらせて、次の瞬間、精根つき果てた権八は、ぐったり観念して捕えられるのである。

このようにして、私の芝居は召捕られるか、最期をとげるかして終るのであるが、しかしいつ召捕られるかは、その時によって違うのである。ピンクの越中禪で捕縛されたり、また長襦袢のままの時に早くも召捕られたり、その時その時でまちまちである。時には緋縮緬のふんどし一本でガンジがらめになってもまだ参らず、ついにはそのふんどしもはぎとられて小さな赤のモッコ一つになり、いまはこれまでと朱ざやの小刀を抜きはなち、畳に落ちた緋の腰巻を刀身にまきつけて我とわが下腹へ突き立て、十文字にかき切りなが

ら、最期をとげる時もある。

腹かき切って果てた時も、縛られたまま召捕られても、そのあと始末が大変である。前述したように、全身に縄を巻きつけて暴れ回っているうちに、縄は意外なもつれ方をして、どうしてはずしたらいいのか分らぬほどにこんがらがり、二の腕や太腿にくい込んでいく。まして四隅の柱から宙吊りになった時など、体の重みで全身にくい込む縄目は次第に痛みを増してくるのに、なかなか手足が抜けず、倒れたふみ台を足で起こそうとして宙吊りのままもがいてしまう。長時間の荒芝居のあと完全に最期をとげ、て興奮からさめつつある私の体は、早く食い込む縄の痛さから抜け出たいと汗びっしりになり、バタバタともがきあせるのだが、焦れば焦るほど縄は力の抜けた体に一層くい込むばかり、全身を流れる汗が目にし、腹を締めつける縄の苦しさに私は後悔の念に襲われ、鏡の中の自分

の浅間しい姿を眺めるのだった。

それでもやっとの思いで縄目をほどいた私は、動けなくなって、しばらくはそのまま、その場に長々と横たわってしまう。やがて、はうようにして風呂場に行き、汗みどろになった赤のモッコを外して化粧を落し、湯舟に入ってほっと一息つくのだが、みると腹を中に太腿、下腹、胸、二の腕、首筋と全身いたるところ縄の跡だらけである。しかもやわらかい内股や下腹などは赤く血が滲んで、お湯をかけるとしみるほどにすりむけている。それでも風呂から上って特にひどいところにメンソレなどをすり込んで、シッカロールではたいておくと翌日にはたいてい跡は消えてしまう。

そして妻と子供が旅行から帰ってくるまで私は連日ふんどしの色をとりかえて全身傷だらけになりながら、十手、捕縄、六尺棒との大乱斗をくりかえすのである。

四隅の柱からかける縄の代りに

私は二階の階段の上からU字形に縄を下し、それに体を巻きつけ、さらに下からも同様、逆U字形に縄を固縛してそれを太腿や腹にまきつけ、階段の途中で、上下から打ちかかってくる捕方と斗う時もある。この場合は、上からのU字縄を胸や腹にまきつけてぶらさがらただけで半ば宙吊りになることができ、また太腿や腹に縄をかけて、頭を下に逆吊りにされ、苦痛にしばれてしまうこともできる。またさらに背中や腹はもちろん、幾重にもキッチリ縄をかけられて、のたうち、うめき回ることもある。が、それだけに、この階段での芝居は短時間で、召捕られてしまうことが多い。

また私は、時には風呂場で芝居をすることもある。例の、幡随院長兵衛を頭に描きながらの芝居である。幡随院長兵衛といえば、子供の時みた、かの白井権八の映画の中には必ずでてきたはずなのだが、私は全然覚えていないのだから、私は全然覚えていないのだから、

ら不思議である。あの映画の権八のふんどしの印象が強烈すぎたため、あとは全部消えてしまったのだろうか……とに角、長兵衛が水野十郎左衛門に討たれるところは後年別の映画でみたのを覚えているのである。

この芝居をする時、私は映画の中の長兵衛のように、大柄の白地の浴衣を着る。妻の朝顔模様の浴衣や、所々に赤の入った花模様の寝間着などが、これに適している。ふんどしは前に述べたさらしの一反褌をつけ、ゆかたの真紅の化繊六尺ふんどしを用意する。槍の代りに先を斜めに切った竹の棒をもってきておく。

芝居は話のスジを多少かえて、まず風呂から上った長兵衛が、洗いたての純白さらし一反を使ってきつくふんどしを締め膝の上あたりまで大きく「たれ」をとって、腹巻を胸まで巻き上げ、白地花模様の浴衣を着る。真紅の燃えるような六尺褌を帯の代りに前で花結

びにしてたらし、紫の手拭を鉢巻にして横ビンに下げ、風呂場を出ようとした時、いきなりうしろからサッと槍がくり出されて左の太腿へさぐりとささる。「ウウッ……」と左ひざをついた長兵衛が、ふりかえるとさらにキラリと別の槍がつきかかる。左手で槍の千段巻をむんずとつかんで防いだが、さらにもう一本が腹へブツツリ突き刺さる。竹槍は相当鋭く切つてあるので腹に快い痛さを感じる。右手でその柄を握りながら、長兵衛たまたらず、よろよろと湯舟へよろけて倒れかかる。浴衣がはだけて真っ白なふんどしの、長い「たれ」が股をひろげてふんばった太腿の間にだらりと下る。さらに突き掛ってくるやりを払おうとするが、すでに腹へ一本深々と突き込まれており、長兵衛はすでに吐く息も荒く、露わになった肩が苦しそうにあえいでいる。

上げた瞬間、ぱっと白い「たれ」が舞い上り、そのまま太腿にまくれ返って尻へくい込む縦帯が奥の方までむき出しになる。その時、新たな槍が胸板へ一本ブツツリ刺さる。無念の形相の長兵衛が、全身ぶるぶるふるわせながら、こん身の力をこめて腹と胸の槍をひきぬいた時は、すでに体を支える力も抜けて、乱れた浴衣姿のまま、ザ、ザ、ザ、ザ……と湯舟の中へ横ざまに落ちこんでしまう。お湯の中で花模様の浴衣がぱっとひろがり、長いふんどしの「たれ」がゆらゆらと浮上る。一たんは頭までしずんでしまった長兵衛は湯舟のふちに手をかけて再び立上ろうとする。そこを待っていたとばかりに再び脇腹へおつとり槍をぶち込まれる。ぬれてびったり身体についた浴衣や腹巻から、もうもうと湯気が上る。

最後の止めとはばかり、水野方は田楽刺しに槍を突き入れる。「ウッ！」と長兵衛がのけぞってその柄を握むと、こんどはさらに一本ぐさりと刺し込まれる。長兵衛はすでに苦痛を通り越し、体を弓る。お湯を含んで重くなった浴衣が片肌ぬげて背中へはりつく。びしよぬれになったふんどしのたれも太腿にべったり巻きついて雫をたらし、むき出しになったふんどしに真紅の帯が血のように乱れかかる。胸に巻いたさらしも、ぬれてギューッと縮まってきて、全身から湯気が上る。

あまりの深手に、すでに気が遠くなり、意識もうすれてきた長兵衛は湯舟の板に頭をもたせ、苦痛に顔をゆがませていたが、次第にうっとりした表情になってゆき、双肌ぬげた血だらけのふんどし姿を大の字にして、ついに、がっくり頭を落し、太腿から足先をけいれんさせながら虫の息になってゆく。

最後の止めとはばかり、水野方は田楽刺しに槍を突き入れる。「ウッ！」と長兵衛がのけぞってその柄を握むと、こんどはさらに一本ぐさりと刺し込まれる。長兵衛はすでに苦痛を通り越し、体を弓



なりに反らせて、最後の力をふりしぼり、ワナワナとふるえる手で

槍の千段巻を抑えようとするが、腹の中へさらにズブズブと深く

刺し込まれて、ついにままたならず

「ウーッ！」とのたうちながら、やがて全身をつっぱらせ、次の瞬間、グァーッ！……と思わず断

末魔の声を挙げてしまう。そして手足の指で虚空をつかみ、激しく顔をふりながら、白眼をつり上げて、歯をくいしばり、ヒエッ……ヒエッ……ヒエッ……と息をひいて、

ついにばたりと全身を投げ出し、次第にくったりとなってゆき、流しの上で大の字、串刺しの最期をとげるのである。

びしよぬれでなま温い浴衣や、腹巻、ぬれたために一層びっちりとかい込むふんどしの快よさに、私はしばらくは、うっとり天国に

昇ったまま、手足を投げ出して横たわっているのである。

この湯殿での芝居は、後始末が楽である。ぬれた浴衣やふんどしは、その場でお湯でゆすいで干してもよし、洗濯器の中へ放り込んでおいてもよいし、とに角自分はそのまま入浴して体を洗い、上っから新しいふんどしにかえ着物を着れば、それでOKというわけだ。

## (十二)

以上述べてきたことでわかるように私の一人芝居は結局オナニーの変形であると思う。それも「ふんどし」はもちろんのこと、「緊縛」「女装」などの願望をみだし、時には「切腹」また自分の肉体を痛めつけて快がる「マゾヒスティック」な気持、更にそれを鏡に写して眺めるという「ナルチズム」

といろいろなものがミックスされているわけだ。

しかもこれだけのことも私の性の癖の半分なのである。残りの半分は女性をこのような目に合わせたという「サディズム」なのである。女にふんどしをしめさせて、ギリギリに縛り上げて責めたい。それが、私の最大の願望なのである。ただ妻以外に適当な相手がないので私は自分の身体で間に合わせているだけなのだ、と思っている。

要するに私の性癖の中心をなすものは「ふんどし」に対する異常な関心であるが、私はこの異常性について、自分のことを少しもいやだとは思っていない。むしろこういう異常さが私になかったとしたら、人生は何と淋しいものだろうかとさえ思う。詭弁になるかも知れぬが「ふんどし」に対する願望に限らず、性的に「正常」であるということは、人生のだいご味をまだ知らないのだといえるような気がする。

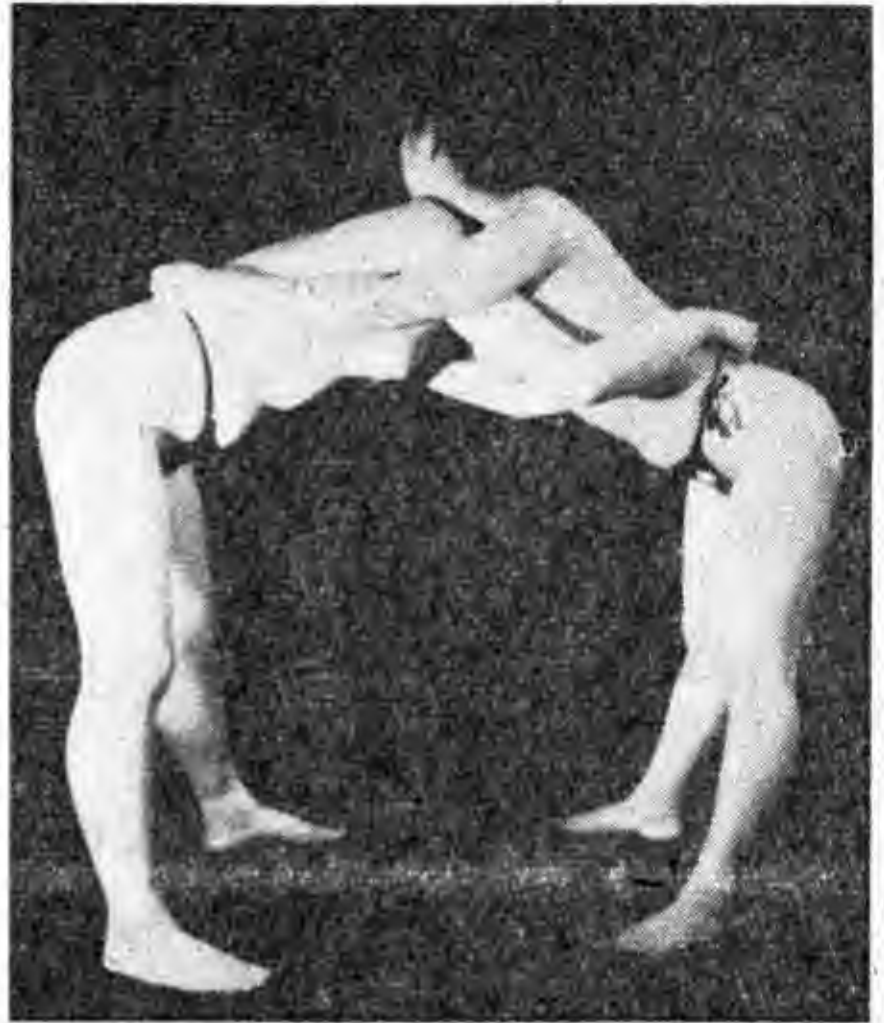
ねむられぬ夏の夜など、私は六尺褌に浴衣をひっかけただけで暗い野原や川の堤へ行き道を歩きながらゆかたを脱ぎ、ふんどし一本になって裸のまま散歩をする。真っ暗な夜のことでもあり、誰も通らないので時には跣足で赤ふん一つなることもある。とに角、野外でふんどし一つの素肌に夜風をうける楽しさはまた格別である。堤の草の上に寝転んで尻や脇腹をチクチク刺す草の刺戟に思わずうめき声をあげ、身をくねらせてしまふような快よさは「正常」なものには到底味わえぬこの世の快楽である。

私にとって「ふんどし」をしない人生など考えられもしないし、もし「ふんどし」がしめられなくなったら死んだ方がましなくらいだ。「ふんどし」こそ私の生きがいであり、「ふんどし」をキリキリ締め上げる時、私は生きている喜びを感じ、この世に人と生れたことを神に感謝するのである。

(終)

告白特集

偏執記録の断層



## 女相撲ファン

### 見聞記

江波恵吾

女相撲といえば、昔から九州の伊万里、山形県をはじめとして全国各地にそれぞれの地方の特殊な催し物として、存在していることは、よく一般誌などに紹介されていて、ご存知のことと思うけれども、今回は本誌の愛読者中、女斗美、女相撲ファンのためにも思いい、私の観た女相撲の一コマともいふべきものを紹介してみよう。

これは私が山形地方に旅行したときの話。昔から山形地方には女相撲が催されているらしいことを、よく聞いたり雑誌などで読ん

だりしていたので、私自身の眼で一度観たいものだと思っていたところ、はからずも、次のような見聞記を発表出来るようになったことは、私だけでなく、全国多数の女相撲ファンのために、一収穫でもあったかも知れない。

私たち三人の旅行グループは、その晩宿の湯に旅の疲れをとり、部屋でゆっくりと盃を傾けていると、宿の女中が来て、「お客さんたちは、実際に女相撲を御覧にな

ったことがありますか？ それも、プロではなく、しろうとのものですよ」

という話し。これはまた、みみよりな、というわけで、さっそく宿に出入りしている物売さんの紹介で開催することに意見が一致したものだ。

しばらくして私たちの前に現れたのが、年のころ二十二、三才というところだろうか、身長は一六〇センチぐらい、体重も十四貫はありそうな立派な体をした妙令の乙女二人。二人ともスタイルは八頭身に近く、しかも男



好きのする美女ぶりに、私たちは、しばらく手の盃を忘れてみとれてしまった。後から入ってきた、行司をつとめるという女もこの二人と同じくらいの立派な体格。

ではというわけで、二人の女は部屋の片隅で着物を脱ぎはじめた。

みていると、彼女たちはブラジャーも外してバタフライ、つまり男子用の海水パンツの下にはくバイクのようなものの上から、絹の黒いまわしを締め、お互いに引締め合っている。行司の女の説明で、相撲をとっている内に、ゆるんだり、解けたりするのを防ぐために強く締めあげるのだと納得できた。

用意が出来た二人は、私たちの前に来て改めてあいさつをし、それぞれに自己紹介をした。洋子と、あい子という名だそうだが、間近に見る二人はまったく素晴らしい。明るい容ぼうといい、色白の輝くような肌艶といい、私たちの魂をうばうに十分だ。均整のとれたグラマーというおうか、胸のふくらみ、腰、太もものボリュームに、圧倒されそうな逞しさと艶かしさを感じさせられる。

そうこうしているうちに、行司の女（くみ子というそうな）が、やはり黒のまわし姿になって、二人を促した。『行司までが？』と

私がいぶかしく思う間もなく、洋子と、あい子が、待ってましたとばかり、パツと東西に別れて、四股を踏むやら、手足を屈伸さすやらで、盛んに闘志を示し始めた。いよいよ、私たちのこの八畳の部屋が、肉弾相うつ女相撲の熱戦の場となるときが来たわけである。

くみ子の軍配に導かれて、洋子とあい子は全身に斗わんかなの気配をみなぎらせてしきりに入った。

その真剣な態度、気はくは、内心、どうせお座敷芸の一種、と多少みくびっていた私にはちよつと意外にさえ思われたぐらいのものが現れていた。

五度程の仕切直しの後、二人はパツと立ち上った。次の瞬間、二個の女体は激しくぶつかり合っていた。『パシッ！』と音がしたように私には思えた。一瞬、はじき合うように離れた二人は、すぐにガッチリと四つに組み合った。

体格もほぼ互角の二人は、互いに差手も十分に、相手の隙をうかがっているが、初夏の風暖き中に、部屋を閉め切ったの激斗。みるみるうちに、滑らかな背中が湧き出す汗に光り出した。白い肌が紅潮し、噛み合うように争う双方の大乳房も汗にまみれて、互いに退

かじともみ合うさまは、まことに形容し難い景観。見ている方がときどきして落着いていられないほどである。

洋子もあい子も、気合いは共に充分。互いにしつかと取ったまわしを引合うたびに、一段と豊かな頬を紅潮させて、およそ十分近くももみ合っただろうか。私には予想できなかった熱戦である。

突然、洋子が寄るとみせて外がけ、次いで内がけに攻めだした。あい子は、ちよつとグマリと上体を泳がしたが、よくこらえた。やはり汗ですべるらしい。

その反動のように、今度はあい子がグイグイ寄りをかける。洋子は、土俵線一杯で弓のように反ってこれをこらえる。全身が一段と赤く染まり、あい子のまわしに掛った双手に力をこめて吊ろうとしているのが、私たちによくわかる。

アワヤと思われた土俵際の攻防も、洋子の捨て身の吊りが功を奏して、あい子の寄りには失敗した。体勢は元に戻ったが、二人ともこの激しいもみ合いに、さすがに疲れがみえて来た。ガップリと組合った豊胸、汗にテラテラと光る背や腹が、大きく波を打って息づいているが、二人は髪をふり乱し、眼に斗志を

みなぎらせたまま、尚も隙を狙っているようだった。

そのすさまじさに、観ている私たちの方が疲れてしまって、もう結構だから、といって、二人は一向に離れようとせず、こちらがハラハラするありさま。行司のくみ子が、私たちの意向を汲んで、勝負のつくまでやらせるが、とにかく一旦水入りにしよう、と二人をなだめ、ようやくにして引離したが、洋子もあい子も水を浴びたように汗で肌をテラテラ光らせている。組合っているうちにこすれたのか、二人の耳や頬がきわだって赤く色づいていた。

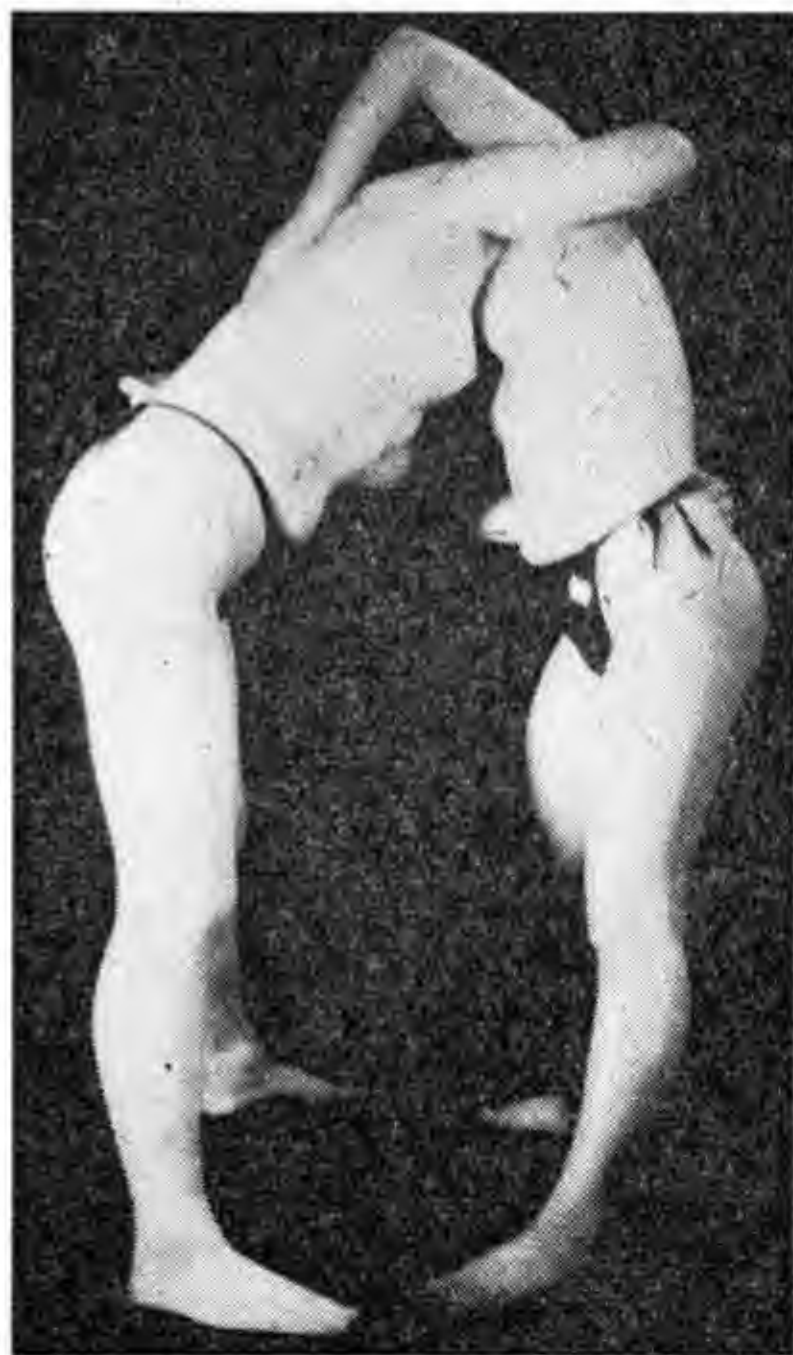
部屋は、熱気と、乙女の体臭というか、独得の匂いがたちこめてムンムンする程だ。これは後で洋子から聞いたことだったが、あい子は軽度ながら「わきが」の症状があり、取組が終ってもその移り香がなかなか消えないそうである。

流れる汗を拭き一息ついた両女力士？は、行司の手で元のとうりしっかと組合せられ、水入りで血の気が納まり、雪の白さをとりもどしていた柔肌に、勿ち力をみなぎらせ、桜色に紅潮させて再び力闘が繰り返えされ始めた。

だが、今度は水入り前のような膠着状態にはならず、二人の動きはきわめて活潑だ。遅く伸びきった双方の脚が、外がけに、内がけにと目ま

ぐるしい程にからみ合い、激しい攻防をくりひろげた末、互いに相手のまわしをしっかりととりあつたまま、重ね餅のようにドウと倒れ、漸くにして、この熱戦も勝負あつたかにみえた。だが二人は、尚も取組みを解かず、レスリングよろしく寝業に入ろうとする気配をみせて、私たちを又もやハラハラさせた。

行司のくみ子が、無理に引わけ、やつこのことで、この私たちの予想外の大一番も洋子の辛勝ということでケリがついたのだった。この後で、勝者の洋子と、行司後のくみ子の一番が行われたのだったが、その模様は次回



にゆずることにして、あとで思いがけぬ熱戦をみせてくれたお礼の意味もかねて、ささやか乍ら膳をとり寄せ、共に食卓を囲んで二人の相撲歴？ に関して聞いたことを紹介したいと思う。

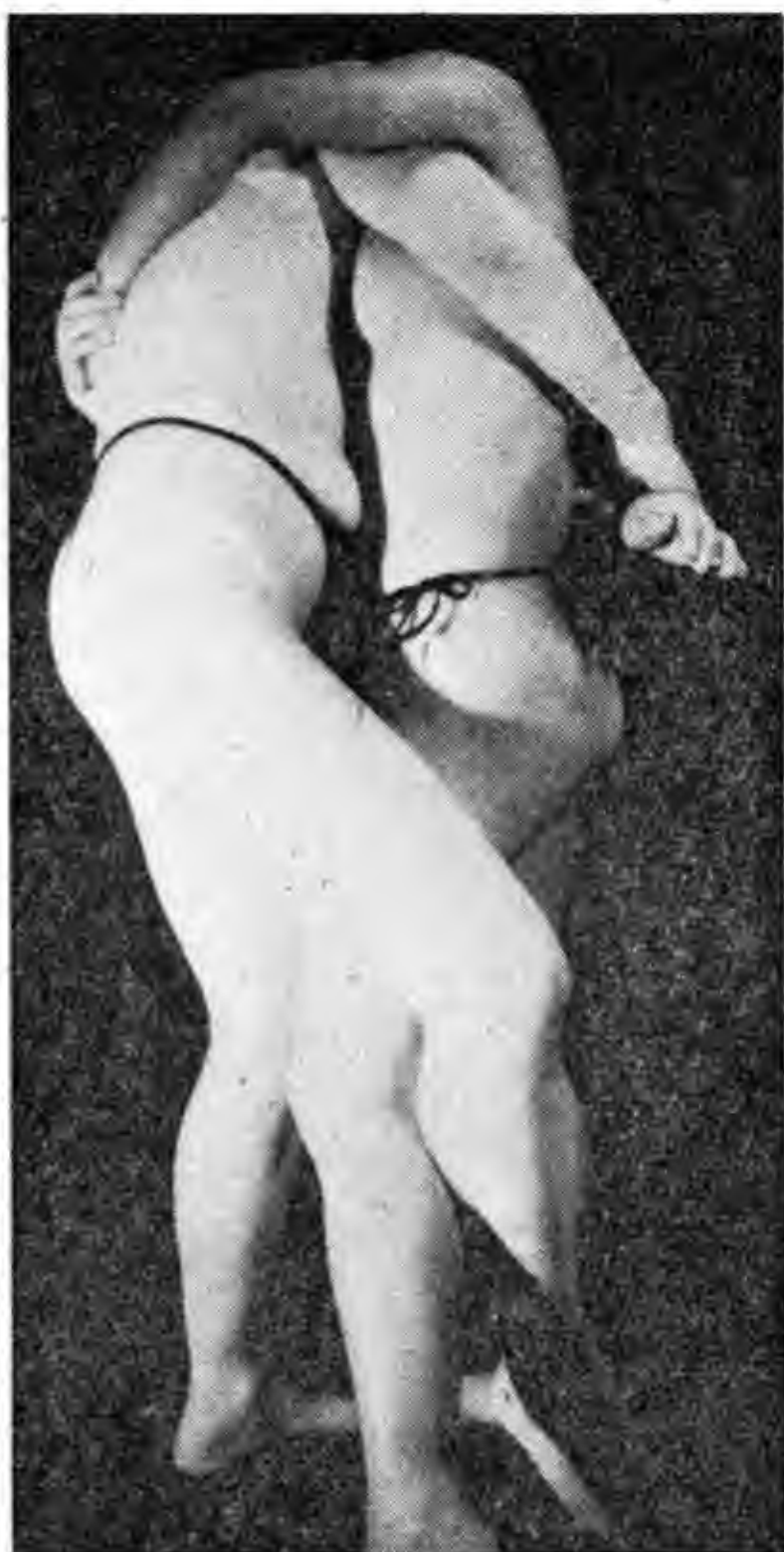
この二人は、高校時代のクラスメートで、柔道部の女子班で常に覇を競った好敵手同志であったそうであるが、四年後の今日、偶然にも、一人の青年を目標にして相争う仲になつていくのである。運命のいたずらは二人を宿敵のような状態に置いていくらしいが、そう聞けば、先程の取組みの激しさも肯



けるような気がした。

別に勝負にその青年を賭けている訳ではないらしいが、相撲といい柔道といい、実力の迫仲している二人は機会ある毎にぶつかり合っている。真剣になってしまふのだという。いわば恋の女のサヤあてのようだが、競うに慣れた娘同志の奇妙な意地の張り合いとでもいえるだろう。そのくせ、二人の仲が悪くないらしいのはちょっと不可解な気もした。

横から手振りを交じえて口をはさむ女中さんの話によれば、あい子と洋子のクミウチは町では有名なので、今日のように相撲を所望



された場合を別としても、稽古終了後、人の居なくなった町道場や、町外れの草原で、ブラジャーとパンティだけの姿で、柔道とも相撲ともつかぬプロレスよろしき激斗を展開している二人をみた通行人は数多くいるそうであるが、町の人なら大抵知っていて、止めるどころか、声援を送って見物するという。

そんな女中さんの話しを、二人は、娘らしい微かな羞らいをこそみせるが、否定しないところを見ると作り話とも思えなかった。

そして、私の質問に対して彼女達は、多少はにかみ乍らも答えてくれた。

組打ちをするときには動作が激しすぎて、普通のナイロン・パンティなどはすぐに破れてしまうので、自作の三角パンティか三角フンドシを用い、ブラジャーのホックなどはケガのもとだから一切つけない。相撲用として自作したまわしは、身心共に落着きが出来て一番好ましい。得意な柔道より相撲で争う回数が多いのは、このまわしの魅力が大きいからであって、冬でも、まわし一本で取組んだ後は、ボカボカとしてとても爽快な気分になれる。二人は、たしかにライバル同志としての意地は感じているし、取組めば知らず知らずの間に真剣になってしまふが、取組が終り独りになると、互いに相手に、見えない怪我でもなかったかと気になる。

というのが、その答えの要約であるが、私には、彼女たち二人の間に、好敵手というばかりではなく、他人には分らぬ親愛の情が通い合っているからこそ、張り合っていると思われる、しみじみと二人の美しい顔を見較べたものであった。

(掲載の写真は二人の面影であるが、私の拙い写真技術では、熱戦中の動きの早い場面には自信がなく、取組終了後、改めて撮影用に組合って貰ったものです。)

体験告白手記

鼻

(びきょう)

鏡

藤 木 久 生

左 脇 藤 江・絵

告白特集

偏執記録の断層

午前十一時半、同僚の女事務員がそろそろ昼食の配膳をとり立ちかけた時、リリーと私の前の電話が鳴りました。それとは知っていても、思わずドキリと胸がなり、頬が熱くなります。

「ハイ、あのう藤本ですが……」  
「ア、藤本さん？、時間よ、すぐね。よくって？」

それだけでガチャリと切れてしまいました。

私は長い廊下を渡り、一番奥の医務室の前に来て、コツコツとノックしますと、「どうぞ」と、いつものつきはなしたような返事が私の胸の動悸に輪をかけます。扉を排して中へ入ると、先ず私の心を捉えて止まぬ、妖婦的な美しい顔立ちがまぶしく視界一ぱいにひろがって映ります。

「どうしたの？ おそいわね。今日、忘れてたわけじゃないんですよ？」

私は黙ってうなずきました。彼女はスッと立って傍に来ると、ギョッ

ユッと、いきなり私の鼻をつまみ上げました。細かいしなやかな彼女の指が、痛い程私の鼻翼を振りあげるのです。そしてそのまま傍の診察椅子に押し倒すと、キュッと睨み乍ら

「罰よ、今日は一寸痛いわよ」といいました。

私は、唯、心がうずく様な気持ちでもう口もきけず、黙って、彼女の意志に従う旨を身振りで示しました。

最上看護婦さんは白い上衣をひるがえして、器具棚から冷たく光る鼻鏡をとり出すと、再び私の前にたちます。

「フフン、神妙なもののね」

彼女は満足げに笑いを洩らすと「顔を上げるのよ」というより早く、白い手を伸して再び私の鼻を邪慳にグイッとつまみあげて顔を仰向かせ、鼻鏡をとり直して鼻の孔にさし入れ、グッと押し拡げました。

瞬間、私は身体中の血が一ぺん





に逆流するよう感じがして、思わずブルンと身ぶるいしてしまいました。

「動いちや駄目よ」

彼女は、冷たく射す様な瞳で私の鼻孔をくまなくのぞき、右手に

持った鼻孔用鉗子で遠慮なく私の鼻粘膜をつつき廻るのです。

「今日はずいぶんよごれているわね。それにうっ血がひどくて、まるでつまっててよ」

といい乍ら、グイと強く鉗子で

奥をこじりました。

「アッ痛ッ」

「フスフ……痛かった？　じや、こんどはこっち」

鼻鏡は再び反対側の鼻の孔にさし入れられ、器具の先端が鼻粘膜

をさぐるのです。

「こっちはそれ程でもないけど」

素晴らしい乍ら彼女は鼻鏡を抜きとり、今度は開いたまま、たてに構えて両方の孔にひっかけて、鼻をグッと上に持ち上げ、両方同時に見比べ乍らノンビリと観察するのです。それから鼻をもち上げたまま、顔をのぞきこみ、

「サア、治療する前に、遅れた罰に仕置してあげるけど、覚悟はよくって？」

としわがれたような声でいうのです。彼女もこれから行おうとする鼻責めにきつと上気しているのでしょう、彼女の卵形をした鼻の孔は大きくふくらみ、息する度に小鼻がビクリビクリとケイレンしています。

「どんなお仕置ですの？」

私は、期待と不安との入り混る奇妙な気持で問い返しましたが、「罪人に訊く権利があつて？」

と、邪慳にピンセットで鼻をつつかれ、ウツとうめいた瞬間、固

く眼隠しをされてしまいました。

「サア、始めるわよ」

彼女の声がすぐ前でしました。

冷たい器具が私の小鼻をつまんだかと思うと、激しい力でグーツと裏返すようにまくり上げられました。続いて、眼もくらむばかりの鋭い痛みが頭の芯をつらぬき、思わず「ヒイッ」と悲鳴をあげてしまいました。

「フッフッフ、どう？ 気持は」

彼女は容赦なく、次々と私の鼻粘膜から鼻毛を抜き取るのです。それも一本ずつでなく一度に四五本ずつも……。

やっと片側を終わってホッとすると、息づく暇もなく反対側をつまみ上げられ、思わず私は手を合せて哀れみをこいしましたが、

「患者は絶対服従よ」という無慈悲な言葉の下に、再び脳天をつらぬく痛みに悲鳴をあげ、不覚の涙をポロポロとこぼす始末でした。

X X X

何時の頃からか私は自分が女で

ありながら妖婦的な感じの同性の鼻に憧れを持ち、続いてそんな人から自分の鼻を思う存分いじめ

られたいと思う様になっていました。今、仮りにこんな私の気持を鼻マゾとでも称しましょう。私の小学校時代には、割に妖婦タイプ

の先生が多く、然も決って男の先生よりサジスチックで、私たちも

男の先生より恐がっていたものでした。皆立派な鼻の持主で、私は

よくこういう先生が、受持の生徒をセツカンしているのを見掛けて私もあんな先生に叱られてみたいと何度か思ったものでした。

然し、その頃はまだ鼻マゾといった様な判然とした状態ではありませんでした。そういった自分の願望をはっきりと知ったのは、か

の太平洋戦争の最中でした。当時、私はまだ女学生で、例の学徒動員令に基き東京の某軍需工

場に動員され、その寮に入居りました。そして、其処の舎監

さんの奥さんから初めて「鼻マ

ゾ」を引き出されたともいえるのです。無論最初は話し合った事もなく、唯珍しく感じの違った綺麗

な奥さんだな、位いにしか感じていませんでした。立居振舞が普通のひとと異り、作法の正しい奥さんでした。

それが偶然に親しく話す機会を得てしまったのです。当時は空襲

がひどくなり始め、寮でも三人ずつ交替で不寝番を置くことになっ

て、或る寒い晩に私が当たったので、しんしんと冷えこむ不寝番室に、乏しい火に手をかざし乍らふるえていますと、フッと黒い影が

さしました。ビックリして振り返ると、基処に奥さんがたっていたらしやったのです。

「何か御用でしょうか」

と、いふかり乍らも立って迎える

と、奥さんは僅かにかぶりをふり乍ら、

「寒いでしょ、今夜は。こっちへいらっしやいませんか？ 炬燵をか

けてありますのよ」

と、さそってくれるのです。丁度、舎監さんは出張中でした。

「私も一人で寂しくって」

という奥さんの言葉になんだか嬉しくなって、これ幸いとばかり部屋へ上りこんでしまいました。

奥さんはお茶を入れてくださってそれから二十分許り四方山話をしましたが、その内、突然歪んだ様な顔をして笑うと、

「藤木さんのおつまみはいい形だわね、一寸つまみたい位……」

といったものです。

「え？ おつまみ？」

私がキョトンとして問い返すより早く、スンナリした奥さんの手がスッと伸びてきて、いきなりギョッと私の鼻をつまんで前にひいたのです。

瞬間、私はクラクラとめくらむ思いで、そのまま奥さんの手に引張られて前にのめってしまいました。

「アラ御免なさい、いきなり驚か



して」

奥さんは慌てて私を助け起しました。

「おつまみッてお鼻のことよ。女官仲間の別名なのよ」

奥さんはおどろく私の耳にささやました。私はその時初めて、奥さんがかつて御殿勤めをした人だということを知ったのです。

聞いてみると、奥さんは女学校を出ると、すぐ旧主の出身者である、某高級女官の侍女として御殿へ上ったのだそうです。そして私はその晩、色々の珍しい話を聞いたのですが、それによると御殿勤めは女達だけの世界であり、しかも階級制度は一段ときびしく、奥さんの仕えた女主人は「御方様」と呼ばれ、専制君主として侍女達に君臨し、一寸した粗相も決して見のがされる事なく、苛酷なお仕置が加えられたのだそうで、そしてその時には、必ずおつまみの前ぶれがあるのだそうです。

例えば御方様は毎朝侍女達を占

検されるのですが、少しでも気に入らぬことがあると、その女の鼻をつまんでひきずり出し、そして、もう血の気もなくガクガクふるえている哀れなイケニエを見下ろし乍ら、再び鼻をつまんでグイと顔をひき上げ、他の侍女に仕置をお命じになります。言下に仕置掛りのものが太い先端のとがった鉤をイケニエの鼻につきさします。その鉤にはひもがついていて、その端は天井の車を通して引き上げるようになっていきます。「ヒイツ」と悲鳴をあげて、鼻筋の突張ったイケニエが思わず腰をうかす瞬間、御方様の手に握られた太い鞭が凄じい唸りを生じ、後手に縛られた哀れなイケニエの背におそいかかるのです。彼女の身体はグツと前にのめり、全身の重みを彼女の細い鼻肉一つで支える様になるのです。瞬間、恐しい悲鳴と共に彼女の鼻はギューンとゴムのよう

に延び、美しい顔が激しい苦痛のため、凄じい形相になります。その時、間髪を入れず、巧みに鼻ひもを握っていた侍女がサッとゆるめるので、女は鈍い音をたてて板の間に叩きつけられるのです。それからお方様はゆっくりとお仕置の鞭を加えられた後、静々とお奥へお入り遊ばされるのだそうです。

お廊下でご挨拶の仕方の悪かった者、お給仕の粗相、お目見得の女中の御引見等、必ず、まず鼻をつまんで御前にひきすえてから後にゆっくりとお仕置遊ばされるのだそうで、これから鼻のことをおつまみというようになったのだそうです。

そのお話を聞いた時、私は異常なショックを受け、自分自身をどうすることも出来ず、ただ、むやみやたらに自分の鼻を虐めました。他にも色々珍しい話があったのですが、わけてもこの「おつまみ」は、私のかくれていた異常性を殊の外刺激してしまったのです。爾来、私の希いは急速に異常性をたかめてゆき、常に心の中で他人には打開けられない鼻マゾの世界を求めるようになってしまったのです。

× × ×

最上看護婦さんが私のお勤めしている会社へ入社されたのは二年程前で、丁度彼女が入社の挨拶に各課を廻られた時、私は折悪しく二番目のお姉さんのお産のために有給休暇をとってお手伝いに行っていて、その後も忙しくて、健康な私はついぞ顔を合せる機会はありませんでした。処が彼女と顔を合せたその日に、私は完全に彼女のトリコとなり、押し隠くしていた鼻マゾを満足することとなったのですから、皮肉なものです。

事の起りは会社の定期健康診断でした、丁度、私の生理休暇中に健診があり、私だけ後まわしになっていたのです。そして看護婦さんから或る日の朝、社内電話があらって、午後一時に医師が来るから医務室に来るようにとのことでし

た。

「悪いところもないのに診察されるなんていやだわ」と思いながらも社の年中行事の一つですから仕方なしに指定の時刻に出向きますと、医務室には社医の太ッチヨの相田医師の姿がみえず、初めてみる最上さんが器具を消毒していました。

「あのう藤木ですが……」という私の声に、フト振り向いた彼女は注射器の水を切り乍ら

「アラ、わざわざすみませんでした。こちらへどうぞ」

といって私を迎え入れました。私としては初めて見る彼女でしたが、彼女の顔が余りにも思いがけぬ、内心あこがれていたヴァンプ型であるのに一驚してしまいました。

美しいイヴニングドレスでも着たら、とても私なぞは足もとにも及ばない素晴らしい貴婦人が出来るのではないかと思う程の妖艶な顔。吊り上り気味の眼と眉、大き

めの赤い唇、そして何といってもど、構いません？」

私の心を惹くそのサジスチックな豊かな鼻、普通の人よりズツと大きくて、しかも形のよい卵形をしてよく手入されて光っているような鼻孔。それは私を一息に吸いこんでしまいそうな錯覚さえ感じてしまったのです。

そんな私の気持を知るや知らずや、彼女は診察椅子をグルリと廻して私を腰かけさせると、

「あのネ、さっき急に先生から、来られないから私に一応診察するようにって電話があったんですけ

「ええ、どうぞ」

彼女は肯くと、片手にカルテを持ち

「じゃ顔をあげて」といい乍らいきなり私の鼻をつまみ上げたのです。瞬間、私は寮の夜を思い浮べブルンと身をふるわせました。その時、彼女はハッと気付いたように手を離し、真赤になり

「ごめんなさい。つい悪いクセを出してしまつて」

と謝ったのです。しよげる彼女をみて一瞬頬の染まるのを覚えながら私も私は急いで言葉をかけたのです、或る期待を持ち乍ら。

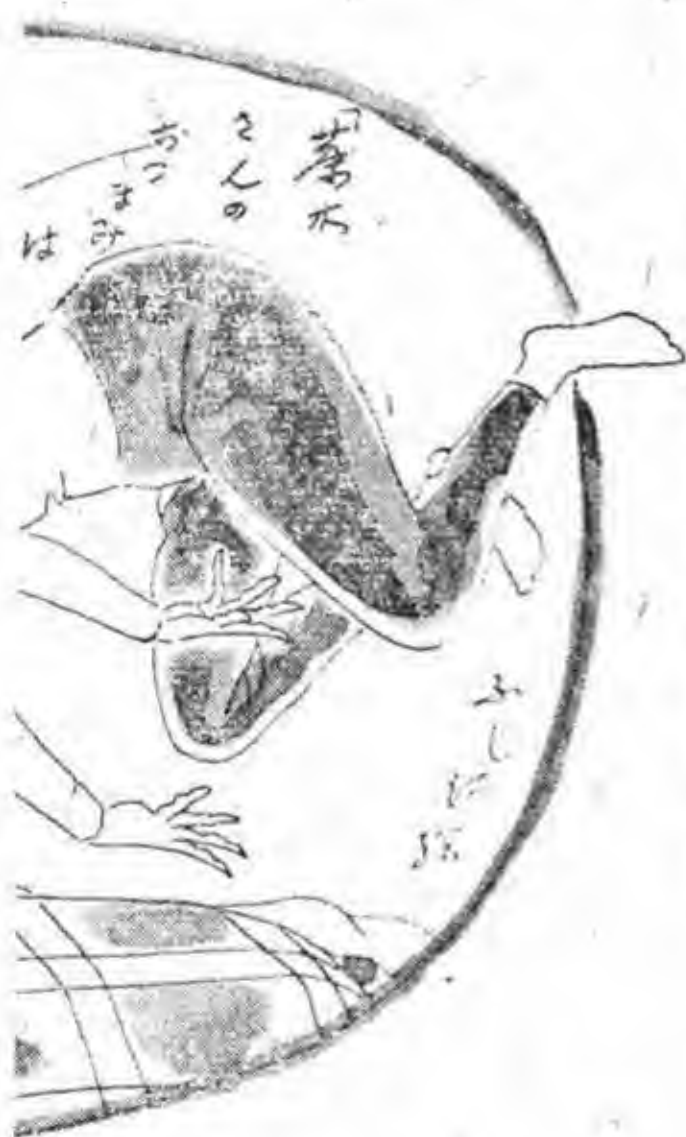
「イエ、いいんですのよ。……だつて鼻をつまむというのは貴婦人のお作法なんですもの」

「え？ どうして？ そんなことないわ。私はこのクセで、前の会社をクビなつたのよ」

そこで私はあの奥さんから聞いた例のおつまみの一件を、彼女にうけうりして聞かせたのです。彼女は完全に私の話に魅了されて、身動きもせず聞き入っていました

が、私の話にいたく興味を感じていることは、彼女の顔をみているだけでよく判りました。美しい顔は上気して赤く、その鼻はヒクヒクとふえるていました。

彼女のこのクセは、以前精神病院に勤めていた時のものだのとことでした。仲々患者がいう事を聞かず、診察中もキョロキョロ動いて許りいるので、或る日、ゴウを





ニヤして、いきなり患者の鼻をつまんでひきすえたのだそうです。そうしたら、患者はビックリするほどおとなしくなっていて、以来、彼女は落着かぬ患者は対しては、もっぱらこの手を用いてきたのだそうです。奇妙に彼等はいふことを聞いたということです。

処が其処を辞めて某会社にお勤めをするようになった時に、なにげなく重役さんの鼻をつまんでしまった為に一ぺんにクビになったというのです。そんなことから彼女は、今迄、自分の習性となってしまうたこの奇妙なクセを、悪いものとはばかり思いこんでいたらしいのですが、私の話を聞いてスツカリ元気になりました。

「でも、他の人の鼻をつまむとまたクビになるから、私、藤木さんのお鼻だけつまんで上げるわ、いいでしょう」

といい乍ら、彼女は今度は本当に私の鼻をギュッとつまみ上げ、



「ホホホホ、藤木さんも綺麗な娘さんに以合わず、きつとこういうことお好きなのね。判るわ、ホラ、私の指が動く度に、ホホホ、藤木さんッたら……」

こうして、私は完全に最上さんのトリコとなって終ったのです。診察の結果、最上さんは私に蓄

膿症と云う病名をつけて毎日治療に来るようにと命じました。

× × ×

やっと恐ろしい鼻毛抜きのお仕置が終わると眼隠しが外され、満足げな顔をした彼女が

「痛かった？ その代り大人しくお仕置を受けたゴホウビに、今日

の治療はウンとサービスして上げるわ」

と、ニコヤカに云ってくれました。

まず鼻洗が行われます。長い管が彼女の手で私の鼻孔にそう入されドンドン鼻の奥を洗い流すのです。やがて、スポンと今迄奥にまつていた粘液が流れ出ると、急にスツと頭が軽くなったように感じます。

「ホウラネ、こんなに粘液がつまってるんだもの、身体に悪いわけよ。美容の上にも大いに関係してよ」

彼女はワザと、その粘液をピンセットでつまみあげて私にみせるのです。今や完全に私の鼻マゾを理解する彼女は、こういうことが私にどんな反応を起させるかよく知っているのです。

「では、これから美顔術のスペシャルサービスよ」

そういい乍ら、彼女はハンドバッグから乳液のビンを取り出し、

小皿に半分程空けました。何時もならここで薬をつけて終りの筈なので一体何をするのかしらと、怪しんでいると今度は脱脂綿をちぎり、幾つも丸めて乳液に浸しました。それから再び私の前にたち、「サア、もう一度」

と私の鼻をつまみ上げ、鼻鏡を挿入して孔を押し上げた後ピンセットで先程の綿を一つつまんで、

鼻孔のうんと奥へつめこみ、続いて次々と鼻の先端迄それを押しこむのです。両側の鼻孔にそれをさした時には、私も毎日の化粧に使ってその匂いには慣れていますが、その、むせるような強烈な香りに頭がボーッとなくなってしまいました。そして最後に液のつけてない綿で蓋をした後、彼女は何時の間にか意したのか熱い蒸しタオルを私の鼻の上からおおいかけました。こ

のタオルは三回かけかえられました。十分程たつと「もうよさそうね」といい乍ら、彼女はタオルをとり、綿を全部取り除くと、再び鼻鏡を使い乍ら、乳液のついた綿をピンセットではさみ、鼻粘膜を丹念に先端から奥の方へと、軽くマッサージをするのです。ジーンと甘い香りが脳のすみずみ迄しみ通るようです。

「サア、最後の仕上げよ」

そういう彼女の手にしたものを見て、私はビククリしてしまいました。何とそれは香水噴霧器でした。再び顔を仰向けられた私は、シュツシュという音と共に鼻腔の奥深く迄しみ亘るたとえようのない馥郁とした甘酸っぱい香りに、ただ陶然としてしまい、ボンヤリと見上げる天井の飾灯が、次第々々に霞んでゆくのでした。

告白特集

偏執記録の巻

## 新人（ニューフェイス）悦虐ムード図絵

大手紙（9×13センチ）印画紙焼付

各組 三枚一組 二五〇円（送共）

○花 本 京 子 二〇才  
身長一五四種、体重四二種

略号（もと）

○加 茂 良 子 二二才  
身長一六二種、体重五四種

略号（よし）

○桜 井 葉 子 一九才  
身長一六〇種、体重六三種

略号（さく）

○前 本 妙 子 二三才  
身長一五八種、体重五一種

略号（たえ）

○熱 海 容 子 二二才  
身長一五五種、体重四九種

略号（よう）

○柳 初 子 二〇才  
身長一五七種、体重四六種

略号（はつ）

○大 井 小 夜 子 二二才  
身長一五四種、体重四五種

略号（さよ）

○若 原 明 子 二〇才  
身長一六一種、体重四八種

略号（あき）

○山 路 ミヨ子 二〇才  
身長一五四種、体重四五種

略号（みよ）

○四 方 清 美 二二才  
身長一五八種、体重四八種

略号（きよ）

一旦縄に括られると、これでも純情なBGかと驚くミヨ子

白い肌を狂ったように震わせてもだえぬく美しい清美





「奇ク私見」と題した小生の小論に対して、岩崎氏が九月号で、その誤謬を指摘しておられますが、これは誤謬というよりは、むしろ、氏の誤解である事を、こゝに明らかにしておこうと思ひ筆を取りました。

氏は「発表すべきものとすべきかざるものの取捨選択があつてこそ、良識というものがあつて、味噌も糞も一緒にするようでは」云々と言つておられますが、この点については、小生とても同感なのです。これについては「奇ク私見」でも誤謬のないよう、再三言つてある筈です。氏が引用された小生の文「だからといって私は愛撫の描写を長々とやれというのではない」という所や、その後の「再び言うが、私は奇りに多くを望んでいるわけではない。(中略)たゞ、

セックス面をいたずらに忌避するというのではなく、細心な注意と工夫によって必要最少限の事は表現する方が真実味を与える事になるのではないか」という所などでも、その事はお察しいたゞけると思います。

小生の言いたかつたのは「不自然をなくせよ」という事なので、味噌も糞も一緒にせよといつていゝるのではない事は、あの小論をもう一度読み返していただければ、充分読み取れるものと信じます。氏は排泄作用を例に取っておられますが、これとて、必要な時には映画などでも描写されております

す。戦前の名画「外人部隊」がその好例だと思いますし、コプロ派の人々にとっては排泄作用そのものが対象ではありませぬか。即ち排泄作用は彼等にとつては絶対に描写される必要があるのです。小生の「必要最少限」という意味は、そこら辺にあるのです。なお、「細心な注意と工夫」の好例としては、ドストエフスキーの「悪霊」における少女姦と、異常なセックスの描写。フオークナーの「サンクチュアリ」における不能者の強姦、をあげておきます。次に、氏は小生の「愛する男女の間であれば、それ(愛撫の描写)は不純でも猥褻でもない筈だ」という言葉を「広言」だとして非難しておられますが、これ又、氏の誤解です。(この様に多くの誤解をまねくとは、ひとえに小生の表現のいたるざる所で、まことに残念に思つております)こゝで小生が「不純でも猥褻でもない」といつたのは、後にのべる強姦の場合に比較して、という

気持ちと、公然猥褻罪に問われるのをおれる程には、という気持ちの二つが下敷きになつてゐるので、勿論、この場合でも、表現の仕方が細心かつ巧みである事が当然要求されます。いっただい、あの小論は、奇クがセックスに関する描写なら、どんなさゝいな描写でも、すべて忌避してゐるような態度に対する批判なので、その点を御理解いただければ、あの様な誤解も生じなかつた事と思ひます。

以上で小生の弁明は終わりますが、氏の所論について、いさゝか反駁したい点もありますので、蛇足めきますが、以上少々述べて見ます。

氏は寄稿家と純然たる読者の側に立つ人とを区別しておられる様ですが、それは全然無意味です。なぜなら、奇クという雑誌の性格をお考えになれば、おわかりと思ひますが、奇クは読者が寄稿する事により成り立っており、区別する理由がありません。氏にして、あの文を寄稿された事によつて、その純粋な手を汚してしまわれしました。

又、氏は「奇ク編集部のやり方に全面的に賛意を表したい」(傍点筆者)と言われながら、一方では

岩崎一生氏に答える

千草忠夫

「私は千草氏の意見に全面的に反対するわけではない」(傍点筆者)と書いておられる。小生の論では、編集部のいき方に相当反対しているのだが、それに全面的に反対するわけではないのなら、編集部のやり方に全面的に賛意を表した事にはならない。それでは矛盾が生じます。この点について、ハ

ッキリしてもらいたいのです。又、氏は、その論の最後に、「一部のエロとどきつさを好む偏狭者」と述べておられますが、若し、その中に小生も含んでお考えになっておられるのなら、小生の「奇ク私見」の最後をもう一度読み返してもらいたいのです。そこに小生は結論として「奇クにもっと美

を」と書いておいた筈です。小生の「奇ク私見」は、小林氏や中谷氏の御意見に触発させられたのですが、結論は、おのずから異なるものです。この事をお忘れなく、更に御意見をお聞かせ願えれば、さいわいに思います。なおその際、三島由紀夫氏の「憂国」につ

いての御感想もお聞かせねがえれ

(以上)

## △読者サロンV

### 愛 禪 通 信

内田武男兄

東 禪 一 (東京) 22才

「一禪亭雜記」以来の熱烈なファンで、六尺禪党の一青年です。いつも御作を拝見するたびに禪の世界をあますところなく描く筆力のすばらしさに感激しています。男のいのちとも云うべき六尺禪を愛用する真の日本男児を一人でも多くふやすためにも、三千年の歴史ある日本の誇り六尺禪復活のためにも貴兄の作品は大きな意義と価値があります。かく云う小生も貴兄の禪礼讃に魅せられた一人ですが、充実した毎日を送ることが出来るのも禪あればこそで、「一禪亭」を通じて広く禪の魅力をPRした意義は大きいものです。貴兄

の云われるまでもなく、六尺禪は単に生理的快感を与えるだけのものではなく、男子ならすべからく愛用しなければならぬ必然性があります。激しい労働に、スポーツに、きりりと締めた六尺禪は下腹部を安定させ、体の保護のためにも欠かすことの出来ない重要なもので、さらに自らを男一匹として意識し、必要とあれば禪一本の体を張り、力の限りつくす斗志をよびおこす「心締め」でもあります。それにつけても禪と不可分に結びついていた戦前の風俗、特に軍隊生活がしのばれ、裸と禪の世界を送った貴兄が羨ましくて仕方ありません。それは経験したこ

とがないだけに、一そうはげしく小生を刺激し、想像するだけで体中の血をたぎらせれます。禪に規定され、規則に縛られた男だけの世界の素朴で単純な結びつきは小生にとっては理想そのものです。それは保守とか反動とかいうものではなく、健全な肉体と強固な意志を創る合法的な世界だったと信じています。徴兵検査にはじまる裸と禪は、それにつづく軍隊生活を象徴するきびしいもので、男としての価値が決定される成人への門でもあったはずで、そしてきびしい毎日のあけくれの中で芽生えた猛々しい友は、男だけが創りあげられる独自の世界で、規則が支配した生活の中での、ムチやビンタ、軍規に反した者に与えられる責めの数々は日常茶飯事の報酬だったことでしょう。さらに、逞ま

しい男たちの集団で禪と裸に惹かれてゆくことや性の欲求が同性間で行われたことはむしろ自然なことと、それが変型されたプレイや罰則に発展していったことも当然のことだったとうなずかれます。貴兄の一連の軍隊物を拝見するたびにこうした過程を経て自己を訓練していった世代を妬ましいようにさえ感じます。そして同時に、無国籍化されつゝある現代の世相と考えあわせるとき、禪復活を叫ばなければならぬことを痛感します。その意味においても貴兄の存在は大きく、全国の愛禪党の代表としてK・Kあるかぎり禪の世界を書きつづけていたゞきたいものです。およばずながら小生も全国の愛禪党諸兄とともに六尺禪の伝統を守ることを誇りとして緊禪一番ががんばるつもりです。



## マゾヒストのアイデア

本馬吾朗

一、五、六年前の奇譚クラブの口絵に、マゾスオートとして春日ルミ嬢が小沼正三氏を仰向けにしその顔の上に水着姿で逆さ馬乗りになっっているのがありましたが、丁度小沼が横をむいて彼女の尻が彼の片頬をべったり押さえつけておりました。こういった写真を絹

川嬢あたりに演じて頂けませんでしょうか。

二、仰向けとなった男性の胸の上に丁度目上の人の前で坐るように両膝をきちんとそろえて坐るようです。即ち胸上の正座というわけです。女性の服装はスラックスかモンペ姿。

三、振り袖、角隠し、金らん綴子の帯を締めた花嫁さんが、これ又紋付、羽織袴の新郎の胸の上に正坐している姿。題して（興入れの式）

四、畠で農夫が仰向けとなり、その胸の上にこれ又、百姓嬢が笠、モンペ姿で横坐りになり、大きな握り飯を食べているところ、題して（野良の書休み）

五、看護婦さんが白衣を着て、仰向になった男性患者の顔の上に



## 連作「少女」

牧村興次・画

## 仲良しグループ

仲良しの少女たちが集まりました。みんなそれぞれに後手に紐で括られているので一層可憐さと美しさが増しているようです。

さて、この仲良しのグループは、これから、どんな楽しいパーティーをひらこうというのでしょうか。私たちは楽しみにして、みてみましょう。

跨り、医者がその患者の腹部の腫物を手術をしている姿。題して、（人間手術バンド）

これはマゾヒストとしての私の平常抱いているアイデアですが、一度マゾフオートのモデルになりたいたいものと思っております。別紙で送りました告白文の通り、勇気と信念と経験の深いマゾヒストですから、たぶん貴社の御期待にそえろと思ひます。勿論旅費自己負担し謝礼等一切無用です。但し顔は写してもいいですが公開誌にのせる場合は一寸修正して下さい。それ以外のなら修正無用です。写真をとった後二時間位は相手の女性から苛められたいのですが、その点御配慮方御願ひ致します。これは私にとって何よりも報酬です。男性マゾヒストは女性の乳房や腹部の露出させたものには少しも興味はなく、服装は如何に嚴重であってもよく、ただ望むことは女性からの叱咤であり、馬乗りであり顔乗りであり、隷属と服従以外の何物でもないのです。広い世間に数少い男性マゾヒスト達の真の希望を御理解下さって、中断することなき貴誌の発展を切に望みます次第です。（宮城県、八本馬吾朗）



## 連作「少女」

牧村興次・画

## 〃放課後〃

「うん、君はどうして居残りさせられているか、わかっているかね。神聖な教室で居眠りなんかしていて、それでも、君は……」

「ちよっと待って、先生御説教はそのくらいにして。何故男らしく、このあたいを縛りたいんだって言えないの。いくじなし、偽善者のできそこない」

「……」

## △サロン誌上通信△

## 私もおむつマニヤです

原 隆 夫

私が奇クを知ったのは大分以前のことですが、初めて奇クを手にして、おむつや浣腸に愛着を持つ方々が世の中に私の外にも大勢いらっしゃることを知った時は本当に驚きました。

それまでは、おむつや浣腸に魅せられなんて、人に言えぬ恥しい異常な感覚の持主は私一人だけだと思いつけていたからです。このような愛好者の世界を知るようになってから、いろいろと考え合せ

てみますと過ぎた私の生活のうちに逢った二人の方がマニヤではないかと思われるのです。そのうちの一人はおしめの持つ甘いムードの秘密を教え、このような異常な感覚の持主にしてしまった動機を作ってくれた人——それは私が高校時代に過した約二ヶ月の病院生活の中に附添つて下さった看護婦のF子さんです。美しい人で優しい心づかいで看護して下さいましたが、一寸のことでも恥しく感じる年頃の私は、便器の世話を頼むの

が嫌で、いつも出来るだけ我慢しておりましたが、ある夜小さな子供のよう粗相をしてしまいました。翌朝洗面の時におねしょのことは気付かれてしまい、恥しさで真赤になっていた私にそつと、「いいのよ、御病気の時ですもの、今夜からお洩らしをしてもいいようにちやんと手当をしてあげましょうね。」という手早く後始末をしてくれました。その日の夜、消灯時間近くなるとF子さんは手になにか持って入って来ました。

「今夜からおむつを当ててお休みしましょうね。」と言って手にしているもの目の前でひろげるのでした。派手な模様の浴衣地のおむつで、それを見るとみるみるうちに恥しさで顔が真赤になってゆくのを感しながらも、息がつまり言葉がでませんでした。

「一寸寒いかもしれませんが我慢してね。」

私があつと思うまもなくふとんをとられ、パジャマのズボンと膝の下まで脱がされると、腰の下におしめが当てがわれました。手際よく腰からお腹の下までを包んでしまうとカバーでぴっちり止めてしまいました。

「さあ、もう終わりましたわよ。大





チェックのワンピース

きな赤ちゃん、御気分はいかが？  
あらごめんなさい。こんな言い方はいけないわね。よかったら、これからずっと当てていてもいいのよ。沢山用意して汚れたらいつでも取替えてあげますからね。」  
その夜私はなかなか眠れませんでした。幾重にも当てられたおむつは柔らかく腰を包み、その上をカバーがびっちりとお腹や太腿を締めつけるようにくい込んでおりました。なにか分かりませんが、ほのかな甘い感覚が私の胸に次第にうずいてくるのでした。

「いっとお洩らしをしてもいいのよ、ちやんとおむつを当てておきましたから……。」F子さんの言葉が甘いささやきとなって耳の底に残るのでした。

暫らく病院におりましたが、急に姿を見かけなくなってしまうました。嫁いでいったという噂を聞いただけでそれっきり逢う機会はありませんでした。F子さんはマニヤではなかったのかと今でもそう思われてなりません。

もし私の空想めいた考えが当たっており、奇クの愛好者の一人であったら。そしてこの一文がお目にとまったら——きっと御連絡して下さるでしょう——夢は果しなく続くのです。もう一人の方はS夫人。この方とは軽井沢の高原の別荘でお逢いした方ですが、書き続けますと「奇クアロン」の欄では長くなりすぎますので次の機会に致したいと存じます。同好の方々のお便りをお待ちします。

